
魔王襲来！！

鹿谷カモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王襲来！！

【Nコード】

N4542Q

【作者名】

鹿谷力モ

【あらすじ】

「オヌシ、儂のモノになれ！！」

突如異世界に召喚された少年、あかつき 曉 そつた 宗太。

右も左も分らない彼が訪れた街で、偶然出会った少女は世界最強（最凶）の魔王様！？

人知れず世界の命運を賭けた名も無き勇者の物語が今、始まる。

プロローグ（前書き）

初めての小説です。

自分の乏しい語彙力ではてさてどこまで書けるやら。

ノープランの物語が今、始まる（笑）

プロローグ

フォートリア暦二一六二年。

フォートリア大陸を永き間脅かし続けた魔族と人間との争乱は、それまで中立を保っていたエルフを始めとした亜種族の参戦や、異世界より召喚された勇者の活躍により終わりを告げた。

魔王は勇者に討たれ、世界は平和な世を迎えた。

ハズだった。

終戦から五年後　フォートリア暦二一六七年、魔族は先代魔王の子を新たな魔王とし、世界は再び戦乱の世を迎えた。

勇者は再び魔王を倒すために魔王国に乗り込むが、歴代最強と謳われる魔王の前に成す術も無く倒れてしまった。

「ルネスクが墜ちた、だと？」

王城の一室、作戦会議室に置かれた大きな長テーブル、その上座に座る男性 エルトリア王国国王、ユーリス・オルト・イヴァリア・エルトリアが重々しい口調で報告に来た兵士に確認した。金の髪に碧い瞳、精悍な顔付きに衣服の上からでも鍛え抜かれた事が分かる体軀は、もうすぐ50に届くとは思えない程若々しく見える。

「ハッ！魔族による大規模攻勢により奮戦虚しく……」

その報告に室内は重苦しい雰囲気にも包まれた。

「これで先の大戦で我が国の領土となった旧魔国領は全て奪い返されてしまいましたな……」

エルトリア王国宰相ガルデニス公爵が疲れた表情で呟く。

先代魔王を討った大戦で魔王国から得た領土、その5つ全てがたったの三年で奪い返されてしまったのだ。

五年も掛けて統治の基盤作りを行ったものが全て水の泡となってしまった。

と、沈黙の続く作戦会議室に慌てた様子の兵士が飛び込んで来た。

「何事だ！」

ノックも無しに飛び込んで来た兵士にエルトリア王国軍大将グラス侯爵が怒鳴りつける。

しかし、次に兵士の発した言葉に室内は凍り付いた。

「も、申し訳ありません！御報告致します、魔族軍凡そ500の部隊による奇襲攻撃によりアーネスト駐屯軍8000壊滅…城塞都市アーネスト陥落致しました……」

「バカな！アーネストはかつての魔族軍の大攻勢にも耐え抜いたのだぞ！！それが魔族とはいえたったの500に壊滅だと……！！？確かな情報なのか！？」

グラスト侯爵が立ち上がり、怒りも露わに兵士を怒鳴る。
兵士は怒気に身を竦ませながらも何とか続きを報告する。

「ハッ！アーネストの通信技官よりの魔術通信による報告です！ほ、報告によりますと……今回の進軍は魔王自ら兵を率いていたそうです……」

その報告に再び室内に沈黙が訪れる。
しばらく続いた沈黙を破ったのはユーリスだった。

「軍属に限らず宮廷内の全ての魔術師を召喚の間に集めよ」

「陛下！？」

ユーリスの命に室内をざわめきが支配する。

その中で宮廷魔術師団長を務めるレイファスが異議を唱える。

「危険です、陛下！召喚の魔法陣に流せる魔力は先代勇者様召喚時が限界。いくら流す魔力量で召喚される勇者様の力量も変わるといっても限度を超えれば失敗、最悪暴発の危険も……！！」

「解っておる……！！」

それを一喝するユーリス。

その顔は苦渋に歪んでいた。

「圧倒的な力を持っていたあの勇者が容易く敗れたのだ…、出来なければこの国、いや、この世界が終わるのだ…」

その言葉に返せる者は誰もいなかった。

エルトリア王城、その地下に召喚の間はある。

松明で照らされた広間の中には紺色のローブを着込んだ宮廷魔術師団の精鋭が50人程。

どれも熟練の魔術師ばかりだ。

召喚の間に入りきれなかった者達は魔晶石に魔力を封じ、魔術師団が保存していた魔晶石と共に儀式に使用されることとなった。

その総魔力量は先代勇者召喚の儀の実に三倍。

儀式に失敗し、魔力の暴発が起きれば王城も吹き飛ばやもしれない。

「儀式を始めたいと思います。」

準備が整った事を確認したレイファスが宣言する。

「うむ。」

ユーリスが見守る中、広間の中心にある魔法陣の外周にレイファス他4人が、その後ろに残りの魔術師達が並び円陣を組む。

レイファスが呪文を唱え始める。

すると魔術師及び魔晶石から魔法陣へと魔力が流れ、魔法陣が輝き出す。

儀式が進むにつれ輝きを増す魔法陣。

魔力は魔法陣を中心に渦を巻き、魔力の嵐が広間を襲う。

間近で魔力の激流にあてられた魔術師達は顔色が蒼白になり、額には脂汗を浮かべている。

離れた場所で王を護っている結界魔術が軋みを上げる。

儀式は進み、遂には耐えきれず意識を手放す者が現れ始めた。

（ぐう……！やはり無理だったか……？）

レイファスは倒れていく魔術師達を横目に頭の隅で考えるも、しかし儀式を中断する訳にはいかない。

魔術師が半分程倒れた頃、漸く儀式は終わりを迎える。

最後の呪文と共に目を開ける事も出来ない程の眩い光が広間を埋め尽くし、溢れていた膨大な魔力が魔法陣に収束していく。

（成功だ……！）

レイファスは儀式の成功を確信した。

やがて光は収まり、視力が正常に戻っていく。

果たして、魔法陣の中心には

誰も居なかった。

プロローグ（後書き）

ふっ…、時間の割に文章量少なっ！

ノープラン、勢いで書いたものでこれからどうなるかも分かりませんが、どうぞ宜しくお願いします。

第1話 異変は突如

「くわあゝ……」

午後の授業、窓際一番後ろという特等席で少年、あかつきそうた 暁宗太は睡魔という強敵と熾烈な戦いを演じていた。

季節は四月、春の日差しと食後の満腹感、昨夜の夜更かしに極めつけは坊主の読経も斯くやという教師の声が聞こえてくる。
正に四面楚歌、怒涛の攻勢に自制心という防壁は陥落寸前である。

「じゃあ、…から…まで。 暁、読んでくれ。」

勢いに押され船を漕ぎ始めた頃、現国教師田中先生（仮）に指されたが、如何せん今まで必死の攻防戦を繰り返していたのだ、肝心な部分が頭に入って来なかった。

「67ページ5行目から68ページ2行目までだ。」

指された内容が分からずにいると、隣の席から中学以来の悪友、岡崎浩平が小声で教えてくれた。

なので俺は「ありがとう」と感謝の意を述べ席を立つと

「すみません、田中先生（仮）。睡魔との抗争が激しくて聞いてませんでした。」

正直に述べる。人間正直が一番である。

途端に教室内は笑いに包まれるが岡崎は悔しそうな顔をしていた。

「俺は橋本だ！まだ名前覚えとらんのか…まあいい、じゃあ同じ所岡崎読んでみる。」

田中先生改め橋本先生は呆れながらも岡崎^{バカ}に振る。

岡崎^{バカ}はといえばついさっきまで爆睡していたのだ、分かるう筈もない。南無。

案の定わたわたとしたと思ったら、

「すみません、キレーなお姉様方とキャッキャウフフしてて聞いてませんでした。」

教室内が一瞬で真冬になった。

睡魔も裸足で逃げ出してしまった。恐るべし岡崎^{バカ}。

一体どのような夢を見ていたのか非常に気になる所ではあるのだが。

「そうか、それはさぞかし楽しかっただろうな。そのまま立ってろ。」

田中先生もとい橋本先生は非常に良い笑顔で仰った。
ハッ、ざまあ。

そんなこんなで後5分で退屈な授業も終わりという頃、それは起こった。

（ ……？何だ？）

何かがおかしい。

周りを見渡してみるも別段いつもと変わらないように見える。

しかし、何故か言いようのない不安、奇妙な感覚が押し寄せる。

まるで自分の周りの空間だけ変質しているような…。

気のせいだと自分に言い聞かせ、残りの授業に集中しようとした時…。

突如視界がねじ曲がった。

「あ、暁!？」

異変に気付いた橋本先生が叫ぶと、振り返った面々も騒ぎ出し教室内はパニックに陥った。

宗太の周りだけ空間が歪んでいるのだ。

「宗太ッ!！」

隣の席の岡崎が歪んだ空間から宗太を引きずり出そうと手を伸ばす。

宗太も必死に手を伸ばすが、本来一メートルもない筈の距離が届かない。

そうこうしている内に歪みはどんどん大きくなっていき、最早歪みの内と外がそれぞれ判らなくなつた頃。

宗太の足元が円形に光り、やがて消えた。

歪みと、宗太と共に。

第1話 異変は突如（後書き）

短い…。やべえ短い。

投稿後確認してみても愕然としました。

てかプロローグに纏めちゃっても良かった気が…。

もっと精進致します。

第2話 目覚めと遭遇、初戦闘で逃避行

「知らない天井だ…。」

目を覚ますと、そこにあるのは蒼と白、そしてそれらを侵食するかのよう包み込む緑。

要するに森の中だった。

「言ってみたかっただけですーっと…。」

誰に言うでもなく一人呟くと身体を起こし立ち上がる。

木々に遮られ日が余り当たらないためか、地面は水分を多く含んでいるようだ。

どれだけ寝ていたのか、制服に水分が染み込み背中が冷たい。

正直気持ち悪いのだが、日が遮られているため乾かす事も出来ないだろう。我慢する事にする。

「しっかし…、どこよ？こじ…。」

辺りを見回してみるが、そこにあるのは木、木、木。

正直言つて人が足を踏み入れているのかも怪しい。

「何でこんな所で寝てたんだ…？」

急な展開で記憶が少々曖昧になっているようだ。

一度大きく深呼吸。

落ち着いた所で、記憶を辿ってみる。

「確か…、朝起きて、遅刻ギリギリで急いで学校に行つて…。」

授業を真面目には言えないが受けていた筈だ…。

「んで、昼飯食ったら眠くなって、睡魔と闘ってる内に岡崎がバカやって田中先生（仮）に立たされて…。」

だんだんと記憶が（一部を除き）はつきりとしてきた…。

「変な感覚がしたと思ったら周りが歪み出して…？」

オーケーオーケー、眠る前の事思い出しましたよ。思い出しましたとも。

「…どこよ？ここ…。」

いくら眠る前の事を思い出したとしても、起きた後の事との繋がりが解らないなら意味が無いのである。

「…そうだ！携帯で…。」

誰かに連絡するなりして状況の打開を図ろうと試みるも、ディスプレイには無情にも『圏外』の二文字…。

「はあ…。どんだけ山奥に…てか、何故に山奥に…。いや、森か。」

ボヤいてみるも答えてくれる人は存在せず。

無駄に虚しさが込み上げてくるのみである。

「とりあえず、人が居そうな場所を探すしか無いのかな？」

深い森の中、サバイバル道具どころか水も食料も無いのだ。

助けが来るかも分からない中、何時までもこの様な場所でじっとしているのも不安になる。

「…というか、熊とか出てきたら怖い。てか、出てきそうで怖い。」

本音などそんなものである。誰だって野生の獣は怖いのだ。

「さつてと、どっちに進めば良いんだ？最低でも川ぐらい見つけたい…。」

周りは木ばかり。太陽の位置でかろうじて方角は判るのだが、現在地が欠片も判らない状況では大して意味がなかったりする。

「仕方ない、こういう時はアレに限るか。」

そう言つと、地面に落ちていた一本の木の枝を拾い上げ地面に立てる。

手を離すと、枝は南東を指し示すように倒れた。

「よし、こつちか。」

どうやら未だ混乱は治まっていなかったようである。

しかし、落ち着かせてくれる者などいる筈もなく。

宗太は深い森の中を歩き出した。

どれだけ歩いただろうか、昇りかけだった日は頂上に達している。

時計を確認する。一時十五分。

まだまだ余裕はあるとはいえ、日が暮れる前には森を抜きたい。

何故か肉体的な疲労は感じないのだが。

「腹…、減ったー。」

とはいえ、精神的な疲労や空腹感だけは如何ともしがたい。

片田舎に住んでいたとはいえ、森に踏み込んだ経験などない宗太には食べられる木の実などの知識はない。

下手に食べて体調を崩すのも嫌なので、木の実や茸を見付けても手を出せずにいた。

そんな時である。

ガサガサ

何かが落ち葉を踏みしめ歩いてくるような音が宗太の意識の隅に届いた。

(……？何だ…？)

音は後ろ、宗太が歩いてきた方角から聞こえてくる。

何とも嫌な予感がする。

はつきり言って振り返りたくない。

だが、予感^{予感}は所詮予感^{予感}。森に入っていた人が発見してくれたのだとしたら出口まで案内もして貰えるかもしれない。

ガサガサガサッ

そんな風に悩んでいると音は大分近くまで来ていた。

意を決して振り返る。

「ブルルルルッ」

そこには巨大なイノシシが居た。

体長は二メートルを越えるだろうか。下顎からは二本の大きな牙が突き出ている。

それだけ見れば只の巨大なイノシシなのだが、それでも十分脅威ではあるのだが、額からは何故か一本の角が突き出し、背中にも棘の様に小さいながらも幾つか付いている。

そんな異様なイノシシ様は鼻息荒く呆然としている宗太を睨み付けている。

（ななな、何アレ！？主！？この森の主様ですか！？）

角の生えたイノシシなど見たことも無い宗太は混乱が頂点に達している。

不意に、イノシシが宗太を睨み付けたまま口を開けると、大きく息を吸い込みだした。

（何をしてるんだ…？）

宗太は意味も判らず見つめ続ける。

すると、イノシシの口内が淡い緑色に輝き出し、空気の砲弾を吐き出した。

「いいつ…！？」

宗太は訳も分からず横に飛ぶと、地面を転がって回避する。

すると、背後から爆発音と共に風が吹いてくる。

恐る恐る背後を振り返ってみると、その場の木々は薙ぎ倒され、地面が抉れた光景が目に入った。

直撃したと思われる木は半ばから砕けて^{くず}いている。

（じよ、冗談じゃねえぞ…！？）

あんなモノが直撃すれば人の身体など容易くボロ雑巾のようになっ

てしまう。

背中を冷たい汗が流れる。

「ブルルルルッ！」

獲物を仕留め損なったイノシシは怒りも露わに一鳴きすると、再度口を開け息を吸い込む。

（ ヤバいつ！ ）

そう思った時には身体は勝手に動き、後ろを向いて走り出す。

ドゴオオオン！！

背後、自分が先ほどまで居た場所から爆発音が聞こえる。

次いで吹き荒れる風に煽られながらも木々の間を縫って全力で逃げる。

続け様に二発、三発。

全てが宗太の背後に着弾する。

（あれ…？俺ってこんなに速く走れたっけ？）

宗太は自分が何時もより速く走れることに疑問を抱きつつも、逃げることに精一杯で深く考えることは出来ない。

イノシシは圧縮弾では仕留められないと悟ったか、宗太を追いかけて走り出す。

突進の威力のまま角で突き刺せば、大抵の獲物は仕留められると理解している。

意外にも獲物の足が速いのは予想外だが、それも時間の問題だろう。

そうした追いかけつことを続けること凡そ一時間、じりじりと距離を詰められる中、宗太は横に長く木々が途切れている場所を見つけた。

（…街道、か？）

舗装されてはいないが、狭い訳ではない道がそこにあった。

しかし、その一瞬気を緩めてしまったのが拙かった。

宗太の走る速度が遅くなったのを好機と見たか、イノシシが更に速度を上げて突っ込んできた。

「……！？うおっ……！？」

背後からの気配を察した宗太は辛うじて横に飛ぶことで、イノシシの一撃を回避する。

避けられたイノシシは前方で停止、振り返る。

宗太は街道を目の前にして回り込まれた形になった。

「うわっと……！」

振り返ったイノシシは宗太を仕留めようと突進してくるも宗太は横に飛んで避ける。

イノシシは進路上にあった木を薙ぎ倒し停止する。

「…怒ってらっしゃる？」

長い追いかけてここでジレたのか、イノシシはかなり鼻息が荒くなっていた。

口を開け再度圧縮弾を放つが、何度も見たソレ。

宗太は風圧でバランスを崩しながらも回避に成功する。

と、突如イノシシが突進してきた。

今まで単調な攻撃しかしてこなかったのが、ここにきて連続攻撃を仕掛けてきた。

（ やられる…！！ ）

迫り来る巨体。

バランスを崩した状態で回避出来る筈もなく、目を瞑り衝撃を覚悟したと同時に無意識に拳を前に突き出した。

（ …！！……？ ）

メキツというイヤな音の後に何かが倒れるような音。

腕に若干の衝撃を感じたものの、覚悟していた程のモノは来なかった。

「……………何で？」

恐る恐る目を開けてみると、そこには角の下、眉間の辺りが陥没したイノシシが痙攣しながら横たわっていた。

「はあ……………」

予想だにしなかった急展開に思考が付いていかず、精神的疲労と相まってその場にへたり込む。

「何で一発でイノシシ仕留められたんだ……………？虎殺しならぬ猪殺しってか……………？どこの武道の達人だよ……………」

理解出来ない出来事に一人ボヤク。

「あれだけ走ったのに殆ど疲れて無いし…、一体どうなってやがんだ。」

本来であれば答えてくれる人がいたのだが、宗太の問いは誰にも聞こえる事なくただ木々に吸い込まれるだけだった。

「…さて、行くか。」

疑問は幾つも湧いて出て来るが、解決のしようがないのなら悩むだけ無駄である。

気を取り直して人のいる場所を探す事にする。

「…と、その前にコレどうするか。」

目の前には先程仕留めた巨大イノシシ。

とりあえず足を掴んで引き摺ってみる。

「…軽っ！」

殴った時の衝撃の軽さから考えてもしかと思ったのだが、せいぜい

20キログラム程度にしか感じられない。

ともあれコレなら運べそうである。

イノシシの足を掴み上げると街道まで出る。

「右か左か…」

一本道の街道をどちらに進むか迷ってしまう。

「よし、決めた！」

そう言うと、地面に落ちている木の枝を拾い上げる。

困った時の神頼みならぬ枝頼み。

木の枝を地面に立て、手を離す。

枝は街道を横切る形で倒れた。

「……気を取り直してもう一回。」

再度杖を倒すと今度は左。

「よし、行くか。」

宗太はイノシシを掴み直すと、街道を進み出した。

第2話 目覚めと遭遇、初戦闘で逃避行（後書き）

森の中でイノシシ狩り。

身体の変化にも余り深く悩まない宗太でした。

しかし、魔王様が出て来ない（笑）。

設定は主人公の宗太よりも詳しく出来てるのに。

誤字、脱字、「改行とか読みづらいよー」等の御意見など御座いましたらお気軽にどうぞ。

少しでも読みやすくなるよう変えて行きたいと思います。

第3話 街への到着とギルド登録（前書き）

今回は説明、説明、また説明。

ちょっと長くなってしまいました。

第3話 街への到着とギルド登録

人気の無い森の中の街道を巨大なイノシシを引き摺りながら進む少年が一人。

街道に出てからかれこれ二時間、人っ子一人現れない。

「むう…、自転車が結構通ってたみたい何だかなぁ…。」

地面を見ると、剥き出しの土の道には細い車輪の後が幾つも残っている。

最初の内は近くに民家でもあるのかと思ったのだが、その様なものは一向に見えてこない。

疑問に思いながらも今では半ば諦めている。

「腹減った…。」

今日は目が覚めてから何も口にしていない。

いや、歪みに飲み込まれてから朝まで眠っていたのなら、最低でも丸一日何も食べていない事になるのか。

腹も減るはずである。

「腹減った！メツシ食わせー！腹減った！メツシ食わせー！………はあ。」

気を紛らわせようと騒いでみるも、そんな事で腹が膨れるわけも無く。

溜め息一つ。

時刻は三時、このまま民家が見つからなければ野宿は確定。

火を起こす事も出来ず、猛獣が出没する森の中で過ごすのは全力で遠慮したい。

最悪、食事も生で猪肉を食らなければならぬかもしれない。

そこまで考えると気が滅入ってくる。

「…ん？」

脳内でこれからの鬱展開に悶えていると、視界の先で森の木々だ途切れているのが目に入ってきた。

「おお、森から抜け出せた!？」

やったぞ木の枝! スゴいぞ木の枝!

気分一転、森の終わりに喜びも露わに足を速める。

森を抜け出せば、そこは一面の草原が緩やかな傾斜を描いていた。

何とも牧歌的な光景である。

片田舎とは言えゴミゴミとした現代日本で過ごしていた宗太である、観光で訪れていたならどれほど心安らく光景だろうか。

そしてその先には…。

「……城？」

巨大な城壁の中には城を思わせる建築物と、街と思われる小ささな建物が微かに確認する事が出来た。

てつきり日本に居たものと思っていたのだが、西洋圏まで来ていたというのか。

宗太は思いもよらない事態に、呆然とその場に立ち尽くしてしまった。

「……ハッ！」

どれだけ立ち尽くしていたのか、気を持ち直すととりあえず城塞に向かつて歩く事にする。

日はとつくに傾いているのだ。

急がなくては日が暮れてしまう。

早足で向かうこと数十分、道なりに進むとこれまた巨大な門に辿り着いた。

入口脇に灰色に輝く鎧を着込んだ数名の兵士らしきものが、槍を手に警戒している。

時代錯誤も甚だしい格好だ。

宗太がイノシシを片手に近づいていくと、こちらに気付いた兵士が槍を向けて問うてきた。

「止まれ！貴様は何者だ！」

宗太はどう答えたものか悩みつつも何とか返答する。

「えーとですね…、気が付いたらあつちの森の中に放り込まれて、自分にも何がなんだか…。ここって何処なんでしょうか？」

そう言って来た方角、森の中を指差す。

「イーヴルニスの森からだ？…貴様、魔族か！？」

そう言つと兵士は刺し殺さんばかりに槍を突き出してくる。

「え、ええ……!？」

宗太は訳が解らず混乱する。

「少しは落ち着かんか、ロイド。」

宗太が狼狽していると、そう言いながら奥から一人の兵士が出て来る。

歳は40くらいだろうか？

ガタいのいい鍛え抜かれた体軀は歴戦の戦士の風格さえ漂ってくる。

「部下が済まん。俺はモーリス、良ければ中で話を聞かせてくれるか？」

モーリスと名乗った兵士の言葉にロイドと呼ばれた兵士は反論する。

「危険です！魔族かも知れない者の中に入れるなどと…！」

「落ち着けと言っとるだろう。確かに黒髪黒眼といった風貌や身なりは珍しいが、居ないという訳ではないし魔族にしては小柄。羽も尻尾も角すら見当たらないか。」

そう言われると漸くロイドは黙る。

「では改めて、中で話を聞かせては貰えんかな？」

上司と部下の言い合いに付いて行けずにはうつとしていると、ロイドを黙らせたモーリスが再度訊ねてきた。

よく観察してみると、表情こそは柔らかいが目が笑っていない。

此方の一挙手一投足すら見逃すまいとしているようだった。

「分かりました。」

断ったらどうなるかと不安になり即答してしまう。

「そうか、それは良かった。では付いてきてくれ。」

そう言うともーリスは門の中、詰め所のような場所に向かう。

（早まったかな？もし納得して貰えなかったらどうなるんだろ…？）

後ろをロイドともう一人の兵士に固められながらもーリスに付いて行く宗太は、今更ながら不安を覚える。

と、詰め所の前まで来た所で引き摺っていたイノシシの存在を思い出す。

「あの、コイツはどうすれば…？」

「ああ、ロングホーンボアか。ひとまずコチラで預かるつ。そこらに置いといてくれ。」

そう言うともーリスは詰め所内の隅を指差す。

「分かりました。」

宗太が隅にロングホーンボアを置いたのを確認したモーリスは更に奥の部屋へと入っていく。

奥の部屋は隊長室とでも言うべきか、執務机と書類、ソファーに応接机が置いてあるだけの質素な部屋だった。

「そこに掛けてくれ。ロイド、済まんが水晶を持ってきてくれんか。」

モーリスは宗太にソファーに座るよう促すと、入口に立つロイドに指示を出し、自分も反対側に座る。

「改めて自己紹介をしよう。私はここ城塞都市ハーベルの衛兵隊長を務めるモーリス・ブラウンという者だ。さて、いきなりだが君の素性と何故イーヴルニスの森から来たのかを聞かせて貰っても？」

（魔族云々とか訳の分からん事言っただし包み隠さず答えるのはマズいか…？）

「あ、自分は曉…いや、ソウタ・アカツキと言います。あの森に居たのは自分でも良く解らなくて、気が付いた時には着の身着のまま放り出されてた…。」

モーリスに問われるままに、しかし重要な事ははぐらかしながら答える宗太。

それを聞いたモーリスは顔を顰める。

「ソータか、変わった名前だな。しかし、何も持たせずにイーヴルニスの森に放り出すとは…何か恨みでも買ったか？」

「そんな事はないと思うんですが…。」

「失礼します！」

モーリスの疑問に宗太が苦笑しながら答えた時、ロイドが手に水晶球を持って入ってきた。

「おお、来たか。ここに置いてくれ。」

そう言って応接机の上を示すと、ロイドは水晶球を慎重に置く。

「…これは…？」

宗太が訊ねるとモーリスは説明をしてくれた。

「これは俗に識別球と呼ばれる物でな、手を翳す事でその者の持つ魔力属性を調べる事が出来るのだ。」

そう言って手を翳すと水晶内が赤く輝き出す。

「と、まあこんな感じだ。君もやってみてくれ。」

宗太は促されるまま水晶球に手を翳す。

すると、水晶内が緑色に輝く。

「ほう、風に…若干だが土もあるのか？優秀なのだな。」

僅かながら茶色が混ざっていたようだ。

そう言ってモーリスは頷く。

心なしか表情が柔らかくなった気がする。

「あの、これにはどういう意味が…？」

宗太が質問すると、モーリスは済まなさそうに答えてくれる。

「うむ…実はな、先日魔族が近々この都市を攻めてくるという情報
がもたらされたのだ。それで警戒を強化した所、魔王国領であり魔
獣の巢窟であるイーヴルニスの森から正体不明の人間がロングホー
ンボアを引き摺りながら現れた。それで君を魔族かどうか調べさせ
て貰ったのだよ。魔族は少なからず闇属性を持っているのでね。」

そう言って笑う。

入口の兵士も緊張を解いてくれたようだ。

室内の張り詰めた空気が弛んだ気がした。

「手数を掛けて済まなかったな。お詫びについては何だが通行税は
此方で免除させてもらうよ。」

「助かります。財布すら無い状態でしたので。」

そう言っているとモーリスは大声で笑い出した。

「ハッハッハッ！そいつはまた災難だったな。まあ、あのロングホーンボアをギルドに持ってけば丸ごと一頭だ、それなりの値段で買い取って貰えるだろう。そうなると早めに行かんとギルドが閉まっちゃうな。ロイド！手早く手続きをしてやれ！」

モーリスはロイドに指示を出すと宗太に訊ねる。

「ギルドまでの道は…分からんだろう。ロイドに案内させよう。ついでに荷車も貸そう、ロングホーンボアを運ぶのに使うといい。」

「重ね重ねありがとうございます。」

宗太はモーリスの好意に感謝を述べる。

「気にしないでくれ、魔族なんぞと間違えて不快な思いをさせちゃった詫びだ。荷車は売り払った後で返しに来てくれれば良い。」

その言葉に宗太は改めて礼を言っていると、手続きの為に執務室を後にする。

詰め所で名前や目的等簡単な質問を受けた後、滞在許可証を受け取りギルドに向かう。

ギルドに登録していない者は身分確認が出来ない為、許可証が無いと色々と不便なのだとか。

ロイドはロングホーンボアを売るついでにギルドに登録しておいた方が良くアドバイスしてくれた。

ハーベルで手続きを取った西門から続く大通りを暫く進むと、目当ての冒険者ギルドはすぐに見付かった。

道すがら教えて貰った情報によると、ハーベルは東西南北四つの区画に別れており、魔王国に近い危険な西区が冒険、傭兵ギルドや武器・防具店の集まる区画になったのだとか。

因みに、南が市場等の商業区、北が城を含めた高級住宅区、東が一般住宅区らしい。

「じゃあ、俺は詰め所に戻るよ。後はギルドの受付の指示に従えば諸々の手続きは出来る。」

そう言ってロイドは来た道を引き返す。

「ありがとうございました。」

宗太はロイドに礼を言うと、ロングホーンボアを持ち上げギルドの扉を開ける。

大きめの扉をくぐると、正面にカウンター、左手の壁に書類が何枚も張り出され、その手前には幾つかのテーブルと椅子。

何ともベタなギルドであつた。

「すいませーん、素材を買い取って貰いたいんですが…」

「あ、はい。…い!？」

宗太が入口からカウンターの受付嬢らしき人に声を掛けると、宗太を確認した受付嬢は驚愕の表情を浮かべた。

ギルド内にたむろしていた冒険者達も皆一様に口をあんどりと開けて宗太を見ている。

「コイツを買い取って貰いたいのですが。」

皆の反応を不思議に思いつつもカウンターの前まで進むと、右肩に担いだロングホーンボアを示しながら受付嬢に言う。

「…あ、は、はい！では向かって左手のドアから奥にお進み下さい。」

何とか我を取り戻した受付嬢がカウンター脇、奥へと続いていると思われる扉を指し示すと、宗太は礼を言って奥の部屋へと入っていく。

それを見送った冒険者達は宗太が消えた後も暫く呆然としたままだった。

奥の部屋は思ったよりも広かった。

入って左手には恐らく荷車等で運び込むためだろうか、正面入口よりも大きな扉があり、依頼の書類が張り出されていた壁の裏側に当たる場所には保管庫なのか、重厚な鉄の扉がある。

「すみません、コイツを買い取って貰えますか？」

宗太は右側にカウンターを認めると、再び訊ねる。

「あ、はい。…て、嘘お…。」

宗太に気付いた受付嬢はこちらでも呆然と宗太を見つめる。

「…あの、コイツってそんなに珍しいんですか？」

その反応にいい加減不安になってきた宗太は受付嬢に訊ねる。

「…あ、い、いえ！ランクはC相当ですが、割とポピュラーな魔獣です。…じゃなくて！その…、重く無いんですか…？」

どうやらこの受付嬢、相当混乱しているようである。

「まあ、そこそこですね。コレはどうすれば？」

先に進まないと判断した宗太は話を進めることにする。

「そこそこですか…。あ、そちらに置いて下さい。魔獣素材の買い取り確認お願いしまーす！」

宗太が床にロングホーンボアを置くと、受付嬢は裏に向かって声を上げる。

すると、奥から数人の男性職員が出てきてロングホーンボアを調べだす。

「お客様、査定の間に買い取り手続きをさせていただきます。ギルドカードはお持ちでしょうか？」

どうやら受付嬢はもう立ち直ったようだ。

流石は荒くれ共を纏める冒険者ギルドの受付嬢。

大したプロ根性である。

「いえ、実はまだ登録はしてないんですよ。」

「そうですか。では都市発行の身分証明書等はお持ちでしょうか？」

言われて宗太は詰め所で貰った滞在許可証を提示する。

「この許可証で大丈夫ですか？」

「はい、そちらで大丈夫です。ソータ・アカツキ様ですね、少々お預かりさせていただきます。」

許可証を受け取った受付嬢は書類に何やら書き込んだ後、ロングホーンボアの査定をしていた職員と二言三言言葉を交わす。

「お待たせ致しました。今回の買い取りですが、ロングホーンボアが殆ど完全な形となりますので7万エリーでの買い取りとさせていただきます。」

「え、エリー…？」

初めて聞く単位に宗太は頭上に疑問符を浮かべる。

「えっと…、失礼ですがお客様、入城手続きの際に通行税の方は…？」

不法入城と思ったのか、受付嬢が訝しげな表情で聞いてくる。

「あ、通行税は魔族に間違えられたお詫びだとかで衛兵隊長さんが免除してくれたんですよ。お金の方は小さい頃から人里離れた場所で修行の毎日で今の今まで接する機会も無く……。」

勿論修行云々は口から出任せであるが、何とか納得してくれたようだ。

「では、通貨の説明を致しましょうか？」

「助かります。よろしくお願いします。」

何と優しい受付嬢だろうか。

まるで後光が差して見えるようである。

「では……、ここフォートレス大陸では国を問わず共通通貨が流通しています。単位のエリーとは商業を司る女神エリーシャから来ていると言われており、貨幣の発行量は毎年女神エリーシャを祀る神殿の巫女が神託を受けて公正に決め、神殿が発行しています。」

そう言って幾つかの八角形と円形のコインを取り戻した。

よく見ると八角形のコインの方が少し小さいようだ。

「これが貨幣です。種類は下から角銅貨、銅貨、角銀貨、銀貨、角金貨、金貨、白金貨となります。白金貨だけは高額なので角貨幣はありません。」

「続いて貨幣単位ですが、角銅貨一枚が1エリー、銅貨一枚が10エリー、角銀貨一枚が100エリー、銀貨一枚が1000エリー…と10の倍数で続いて、最後の白金貨が100万エリーとなります。角銅貨は使う人が少ないため余り見る機会は無いですよ。」

貨幣で呼ぶか単位で呼ぶかは人によって様々ですので、細かいですが両方覚えた方が良いでしょう。何か御質問は？」

受付嬢は一息に説明すると質問があるか聞いてくる。

「神殿が全て発行しているとの事ですが、不正はどうやって防止しているのですか？それと、両替はどうすれば良いのでしょうか？」

宗太の質問に受付嬢は笑って答える。

「今まで何度か神殿の司祭等と不正を画策した人は居たそうですが、その全てが企みが成功する前に金銭的不運に見舞われて没落したそうです。今では不正を働こうと考える人も居なくなっただけですよ。」

両替についてですが、大抵の都市に民間の両替商が居りますが5〜10パーセント程の手数料がかかります。お客様はこの後ギルドへの登録はなさいますか？」

「はい、一応その予定です。」

宗太の答えに頷くと、笑顔で続ける。

「では、表のカウンターでギルドカードを提示して頂けば手数料無料で両替を御利用頂けます。これはどの都市の冒険者ギルドでも共通のサービスとなっておりますので必要の際は是非御利用下さいませ。以上で説明はよろしいですか？それでは改めまして、買い取り代金の7万エリーです。角金貨6枚と銀貨10枚にしておきました、どうぞお受け取り下さい。尚、ギルド登録手続きの際こちらの書類も提出して下さい。」

宗太が頷いたのを確認した受付嬢は、角金貨と書類を差し出す。

宗太がそれらを受け取ると、男性職員がロングホーンボアを保管庫に運び込む。

大の大人が五人掛かりでも少しずつしか動かない。

「そこそここですか…。」

受付嬢の呟きは聞こえない振りをした。

表の部屋に戻ると、登録手続きのためカウンターへ向かう。

「お疲れ様です。どのようなご用件でしょうか？」

すると、こちらにも立ち直った受付嬢が良い笑顔で対応してくれた。

「えっと、ギルドへの登録をしたいんですが。」

「畏まりました。それではこちらの用紙にサインをお願いします。身分証明書と買い取り時に受け取った書類がありましたらそちらもお出し下さい。登録手数料は3000エリー、銀貨3枚となります。」

言われた通り、銀貨と書類を提出する。

「見たことの無いサインですね…。」

サインを確認した受付嬢が不思議そうに呟く。

「拙かったですか？」

不安になって聞き返す。

日本で育って17年、外国語など書けるワケがない。

というか、さっきからみんな日本語話してるじゃないか。

「いえ、カードの再発行の際に必要なだけです。」

受け取った受付嬢はというと、特に気にした様子もなくカウンター奥の部屋に行き、書類を渡して戻ってくる。

どうやら奥の部屋は買い取り窓口と共通の事務室になっているらしい。

「カードの発行には少々お時間がかかりますが、その間にギルドについての説明を致しましょうか？」

「お願いします。」

ギルドについても聞いておく事にする。

冒険者ギルドは想像していたよりも親切なようだ。

「冒険者ギルドとは、基本依頼者と冒険者間の仕事の仲介を行う組織です。依頼の内容は護衛や魔獣及び犯罪者の討伐、素材の採取など様々なものがあります。」

あくまで依頼者は個人単位が基本ですので、戦争等に参加するのでしたら傭兵ギルドの方に登録下さい。両方登録されている方もいます。

丁度向かって左手の壁に依頼書が確認出来ると思いますが、その中で仕事内容と報酬から納得出来るものを選び頂き、こちらのカウンターに持ってきて頂ければ受注手続きを致します。」

「報酬額ですが、基本一つの依頼を何人のパーティーで受けようと報酬額は変わりません。パーティー内で山分けして頂く事になります。しかし、護衛など人数が欲しい依頼では個別報酬となる場合もあります。キチンと依頼内容は確認するようにして下さい。その場合は報酬欄に『個別報酬』と記載されますので分かりやすいと思います。」

また、提示されている報酬額は予めギルドの仲介手数料を差し引いた金額となっております。尚、ギルドを通さない依頼の契約にはギルドは一切関与致しませんのでご了承下さい。ここまでで何か御質問は？」

訊ねられて宗太は首を横にふる。

「では説明を続けます。次にランクですが、これはS～Fの7段階に別れており、それぞれ2ランク上の依頼までしか受ける事は出来ません。下は制限がありませんが、ランクアップの審査の対象にはなり難いですね。ランクは依頼の達成状況やランクの高い魔獣を倒す等、実力があると認められる事で上がっていきます。

注意して頂きたいのは、依頼を失敗されると10パーセントの罰則金が発生致します。また、失敗を何度も繰り返すと実力無しと判断されランクが下がる場合もありますのでご注意下さい。」

「最後に依頼とは関係ありませんが、便利なギルドのサービスを説明させて頂きます。

ギルドでは、新しくやってきた冒険者の皆様に対して優良商店、宿屋などの紹介や両替、お金のお預かり、素材の買い取り、各種手続きの代行等を行っております。手続き代行は一部手数料が掛かる物もございますが、これらのサービスは基本無料でご利用いただけます。新しい都市にお越しになった際は是非ご活用下さい。

また、ギルド提携店ではギルドカードの提示により割引が行われます。割引率は店舗により異なりますが、大抵は5～30パーセント程でしょうか。提携店は看板の隅にギルドの印である『盾に立て剣』が描かれています。」

そう言って一枚の紙を取り出して見せる。

紙にはヒーター・シールドの中心に両刃の剣が立て掛けられた様な絵が描いてあった。

「提携店は厳格な審査によって選別されますが、万が一詐欺行為等が起きた場合はギルドまで申し出て下さい。調査し、再発防止等に努めさせていただきます。

説明は以上です。解らない事がありましたら、お気軽に職員にお訊ね下さい。」

受付嬢が説明し終えた時、奥からやってきた職員が受付嬢にカード渡す。

「お待たせ致しました。こちらがカードになります。ソータ様はロングホーンボアの討伐が評価され、Dランクからの開始となりました。頑張ってください。

尚、カードの再発行と一年毎の登録更新ではそれぞれ手数料が発生致しますのでご留意願います。

それでは、ソータ様の今後のご活躍をギルド職員一同、心よりお祈ります。」

そう言うってお辞儀する受付嬢。

宗太も礼を言々と宿屋の場所を聞いてギルドを後にする。

外はすっかり暗くなっていた。

急いで荷車を詰め所まで持つて行くと、衛兵にお礼を言い返却する。

ギルドで紹介された宿屋は西区の大通り、比較的ギルドに近い場所にあった。

一階が酒場兼食堂とはまたまたベタな…。

向かって左に上に上がる階段がある。

「いらっしやい！一人かい？」

中に入ると恰幅の良いおば…お姉様が出迎えてくれた。

一瞬強烈な殺気を感じたのは気のせいだろう。

近くの客がこつちを見て青い顔をしていた気もするが。

「冒険者ギルドの紹介で宿を取りたいんですが。」

そう言いながらギルドカードを提示する。

「おや、アンタ冒険者かい。一人部屋で良いのかい？一泊二食で角銀貨5枚だけど。」

一応、暫く滞在するかも知れないので角金貨一枚を支払う。

「20日分前払いだね。もし宿を出る場合は残金返却するから言ってくれ。アンジー、お客さんを部屋に案内しておくれ！」

おば…お姉さんが店内で叫ぶと、給仕をしていた十歳くらいの女の子がやってきた。

「部屋を確認したら夕食を出すから降りてきておくれよ。」

おば…お姉さんはそう言うと言いつと給仕に戻る。

一々感じる殺気な何なんだ？

「ママにおばさんって言ったら凄く恐いのよ？あたしアンジェリー

ナ、アンジーって呼んで。よろしくね！」

「俺はソータ。よろしくね、アンジー。」

そう言っただけで挨拶する宗太とアンジェリーナ。

食堂内におかみさんの怒声と客の笑い声が響き渡った。

その後部屋に案内されてから夕食を取り、今日は早めに寝る事にする。

今日は色々とあり過ぎて疲れた…。

（明日はどうするか…。）

そんな事を考えながら眠りに落ちていった。

第3話 街への到着とギルド登録（後書き）

他人との会話が入っただけでここまで長くなるか。

いや、説明のせいでしょうかね？

ご意見、ご感想お待ちしております。

次回、ついに魔王様が出る………予定。

第4話 街の散策と買い物、邂逅（前書き）

ところでR15ってどこまで許されるんでしょうかね。

あまりグロい表現は入れないつもりですが…。

後書きに投稿直前に考えた簡単な各種ギルドの説明を載せます。

本文最後のルシフェラによる傭兵蹂躪部分に少し書き足しました。

第4話 街の散策と買い物、邂逅

「しらない天井だ…。」

目覚めて最初に目に入っ たのは白い天井。

頭側の壁にある両開きの窓からは朝の光が差し込んでいる。

時刻は7時、窓の外に意識を向けると早朝にも関わらずかすかな喧騒が聞こえてくる。

「今度はちゃんと言えたぜ…。」

固めのベッドから起き上がりつつ、呟く。

何とも無駄な拘り^{くだわ}である。

随分とゆっくり眠れたので頭は大分スッキリしている。

（この街は何なんだ？城門の兵士に中世のような建築物、鎧と剣を装備した人もチラホラ見えたし。…それに魔族？吸血鬼伝説の事か

？)

コートハンガーに掛けておいたワイシャツと詰め襟を着ると、朝食を取るため食堂に向かいながら今の状況について色々と考えてみる。

(魔物に魔族、兵士や冒険者、魔力属性…。あ…。訳解らん。まるでゲームや漫画の世界だ…)。

まあ、小説なんで…ゲフンゲフン。

どうにも現実に理解力が追いついていかない。

「おや、お早う。朝食にするかい？」

いつの間にか一階に辿り着いていたようで、おかみさんが声を掛けてきた。

流石に朝っぱらから酒を飲もうなどというバカは居ないようで、食堂内は数人の客が居る以外は昨夜の喧騒が嘘のように静かだ。

「お早うございます。お願い出来ますか？あ、その前に顔を洗ってきたいのですが…」。

「用意しておくよ。裏に井戸があるから好きに使いな。」

おかみさんが指差した階段裏にある扉から外に出ると、裏庭の隅に井戸があつた。

「井戸とか使うの初めて……。」

祖父の家にも井戸はあつたのだが、石の蓋が被せられていたため使つた事は無かつた。

つるべを落とし水を汲み上げると、桶にあけて顔を洗つ。

水が冷たくて気持ちいい。

タオルが無かつたのでハンカチで顔を拭くと食堂内に戻る。

朝食はパンと柔らかく煮込んだ肉、スープとサラダだった。

全体的に薄味だがかなり美味い。

昨夜は疲労で味わって食べられなかったのが残念でならない。

「今日はどうするんだい？」

一心に朝食を消化していると、おかみさんが話し掛けてきた。

「んー…、この街には昨日来ただけなので、散歩がてら色々見て回ろうかと。」

「じゃあ、あたしが案内してあげる！」

宗太が答えると、掃除をしていたらしいアンジェリーナが笑顔で言ってきた。

肩甲骨の辺りまで伸びた茶色の髪を後頭部で一つに纏め、同色の瞳は期待に満ちている。

「確か昨日は三つ編みだったよね、髪型変えた？」

昨夜の記憶を思い出しながら、聞いてみる。

「その日の気分で色々と変えてるの。似合わないかな…?」

「うっん、似合ってるよ。可愛い。今日はアンジーさえ良ければ案内頼めるかな?」

円滑なコミュニケーションの為には相手を褒めるのが有効なのだ。

「うん、任せて! ねえママ、行ってきた良いよね?」

宗太の返事に笑顔を一層深くし、おかみさんに聞くアンジェリーナ。

頬が若干赤いのは何故だろうか。

おかみさんは苦笑しながら許可を出す。

「やった! ソータさん、掃除が終わったら迎えに行くんで、お部屋で待ってて下さい。」

アンジェリーナはそう言って上機嫌で掃除に戻る。

食べ終わった宗太は、食休みのためにも言われた通りに部屋で待つ事にする。

部屋に戻って一時間程経った頃、扉をノックする音が聞こえる。

「ソータさん、お待たせしました！」

アンジェリーナの準備が出来たらしい。

宗太が扉を開けると、外出用かおめかしした姿が目に入った。

少し時間が掛かったのはこのためか。

「着替えたんだね。よく似合ってるよ。」

宗太が褒めると顔を赤くして俯いてしまった。

（ありゃ、恥ずかしいのかな？似合ってるのに…。）

何とも無自覚な男である。

「何か買う物がありますか？」

二人で外に出ると、アンジェリーナが訊ねてくる。

「そうだな…、武器とか欲しいかな。冒険者が素手っていうのもアレだし。良い店知らないかな？」

「うーん、リードさんのお店で大丈夫かなあ…。案内しますね。」

そう言って歩きだすアンジェリーナ。

何やら不安げな表情が隠せていない様子だ。

「そのリードさんだっけ…？何か問題でもあるの？」

一緒に歩きながら聞いてみる。

「問題、といいますが、その…。」

何とも歯切れの悪い返答だ。

「取り扱っている武具は良いものが揃っていると評判なんですが、性格の方も評判で…。気に入った人とその他の人で値段を変えちゃうんです。いい人ではあるんですが。」

「何ともまあ…。」

不安そうにしている理由が分かった。

何とも個性的な人物であるようだ。

宗太も若干不安になってきた。

「でも、きっとソータさんなら大丈夫です！あ、着きましたよ！」

話している間に着いたようだ。

アンジェリーナは根拠不明だが自信満々に言い切ると、店の扉を開け入って行く。

武具店の印なのか、盾に剣と斧槍が交差した物が看板に描かれてい

た。

宗太も後に付いて入って行くと、剣や槍を始め短剣、盾、鎧など様々な品物が陳列されていた。

「おう、アンジーじゃねえか！今日はどうした…って、誰だ？後ろのヒョロイのは。」

宗太が店内を珍しそうに眺めていると、奥から一人の男性が現れた。

禿げ上がった頭に白い口ひげ、顔や筋骨隆々な体軀には至る所に傷痕がある。

何よりデカい。

二メートルはあるんじゃないだろうか。

その風貌は「山賊の頭かしらです」と紹介されれば思わず納得してしまいそうだ。

（前職は山賊か…？）

「誰が山賊だ、俺は元冒険者だ！」

「読心術！？」

思っていた事を言い当てられて思わず焦る。

「声に出していましたよ…。」

アンジェリーナが苦笑しながら教えてくれた。

あまりの衝撃に口に出してしまっただけらしい。

反省。

「…まあ、いい。それで、お前さんは？」

「この人はソータさん、ウチに泊まってるの。」

リードの問いにアンジェリーナが答える。

「ソウタ・アカツキです。昨日冒険者ギルドに登録したばかりなので、武器を買いに来たんです。」

続いて宗太からも自己紹介をする。

「リード・ロフマンだ。元冒険者で今は武具屋の店主をしてる。」

元冒険者を強調しながらリードも自己紹介をする。

結構気にしていたようである。

アンジェリーナは苦笑を浮かべながら見ている。

「登録したばかりってことは新米か。ギルドカードは？」

言われてカードを見せる。

看板にギルド印が無かったので提示はしていなかったのだ。

「ふむ、…ん？依頼達成ゼロでランクDだと？こりゃ、どういう事だ…？」

カードを確認していたリードが疑問を口にしたので宗太は事の経緯を説明する。

「実は気が付いたら西の森で倒れてたみたいで、街を探して歩いていたらロングホーンボアでしたっけ？あの魔獣に追いかけられたので何とか倒したんですよ。」

「イーヴルニスの森を踏破しただと？魔族って訳でも無さそうだな。…成る程、その時に剣を折っちまったって訳か。」

「あの森を無事に抜け出せるなんて、ソータさん凄いです！」

リードは宗太の説明に納得をし、アンジェリーナは尊敬の眼差しで見つめてくる。

宗太は特に考えもせず、リードの言葉を一部訂正する。

「いえ、剣とか持って無かったんで殴りました。」

「…は？…殴った？」

リードとアンジェリーナは見事なシンクロ率で啞然とした表情を浮かべているが、宗太は特に気にせず説明を続ける。

「ええ、無意識に拳を出したら運良く眉間を打ち抜いたみたいで。そのまま引き摺って街まで持ってきました。…剣とか見せて貰っても？」

「…あ、ああ。」

「なぐ…、引き摺って…？」

宗太の質問にリードは辛うじて反応を返すが、アンジェリーナはまだ脳が理解しきれていないようだった。

その間に宗太は武器を見て回る。

片手剣や大剣、種類も直刀から曲刀まで様々である。

目に付いた物から握って確かめて見るが、どれも軽過ぎてしっくり来ない。

粗方見終わり、諦めようかと思ひ始めた時、店の隅に立て掛けてある大剣が目に入った。

ツヴァイ・ハンダーと呼ばれる大剣に似ているだろうか。

二メートル近い全長に長い柄、刀身の根元にも持ち手にするためか革紐が巻かれている。

ただ記憶にあった物と違うのは、剣先から根元 革紐が巻かれていない部分 まだが大分幅広になっている事だろうか。

手に取り軽く振ってみる。

まだ片手でも振れそうな程軽いが、他の剣より余程良い。

これにしようと思ひ決めてリードの方を見ると、またしても啞然とした表情でこちらを見ていた。

「…お前さん、そいつを振れるのか？」

「…？ええ…。」

リードの問い掛けに頷くと片手で振ってみる。

それを見たリードはうなだれていた。

「今までそれを振るう事を目標に鍛えに鍛え、ついぞ叶わなかったモノがそんな細腕に…。」

エライ落ち込みようである。

「ソータさん凄い！格好良いです！！」

アンジェリーナは逆にエライハシヤぎようであつたが。

宗太は若干引きつった笑みを浮かべながらも値段を聞いてみることにする。

「それで、コレを買いたいんですが幾らですか？」

「金貨五枚…と言いたい所だが、良いもん見せて貰った。角金貨三

枚で持つてけ。」

あまり高すぎる買い物が出来ない宗太は、内心ホッとしながらも代金を支払い礼を述べてアンジェリーナと店を後にする。

「次はどこに行きますか？」

言われて考える。

他に必要な物といったら服だろうか。

いつまでも同じ物を着続けるというのも気分が良くない。

本来なら剣よりこちらを優先するべきなのだろうが、そこは冒険者という事で無理やり自分を納得させる。

「そうだな。替えの服が欲しいんだけど。」

「じゃあ商業区の服屋さんですね！」

行き先を決めると、アンジェリーナは裏道へと入って行く。

目当ての店に行くには、中央広場まで出てから大通りを歩くよりも近道になるそうだ。

裏道は想像通りと言うべきか、疎^{まば}らに商店がある以外には殆ど人通りもない。

「もしかして買い物に行く時とかは何時もこんな道を通ってるの？」

この様な場所を女の子が一人で歩いているのだとしたら危ないんじゃないか、と思い訊ねてみた。

「そうですね…、お使いの時なんかも通ったりしてますよ。あ、この街って意外と治安が良くて裏通りも安心して歩けるんですよ。」

治安の良さがどれだけのものかは知らないが、流石に日本レベルという事も無いだろう。

アンジェリーナに気付かれ無いように周囲を警戒しながらも、会話に華を咲かせる。

（ 見られてる…？ ）

西南区画の中程まで来た頃だろうか。

宗太はふとこちらを観察するような視線を感じ、顔を上げる。

すると、黒いローブを着た小さな人影が一つこちらに向かって歩いて来るのが目に入った。

フードを目深に被っているために、その表情までは窺う事が出来ない。

（！？）

「どうかしたんですか？」

ふと人影と目が合った気がして若干身構えると、アンジェリーナが不思議そうに訊ねてくる。

「あ、いや、何でも無いよ。」

「？」

笑って内心の動揺を誤魔化す宗太。

ありがたい事にアンジェリーナはそれ以上深く突っ込んでくる事はしなかった。

内心安堵しつつも、件の人影に思いを巡らせようとした時だった。

「オイッ！テメエどこ見て歩いてんだ、アアッ！？」

前方から何ともガラの悪い怒声が響き渡り、宗太とアンジェリーナは揃って声のした方に視線を向ける。

見ると、ガラの悪そうな屈強な男達が五人、先程の人物 身長が
男達の胸辺り迄しか無い事から察するに未だ子供だろう を取り
囲んでいた。

「確かに僕は注意を怠ってしまったが、それはオヌシ等とて同じであらう？ぶつかったのはお互い様という事じゃ。」

どうやら互いに注意不足で脇道からの出会い頭にぶつかってしまった

たようだった。

ロープの人物は口調こそ年寄りクサイが、声から察するに女性それもまだ幼い少女であるらしかった。

宗太は徐に背負った大剣の柄を握る。

このまままるく収まれば良し、状況が悪化すれば直ぐにでも助けに入るつもりであった。

第一、子供一人を大の大人が寄って集って脅すというのが気に入らない。

「んな事関係ねえんだよ！そのフードを取りやがれ！」

男達もそれに気付いたのか、その内の一人が下卑た表情を浮かべながらフードを剥ぎ取る。

左右後ろに纏め縦に巻かれた陽光に煌めく銀髪に幼いながらも整った顔立ち、ややつり上がり気味の真紅の瞳はその意志の強さを表しているようだ。

剥ぎ取られたフードの下から現れたのは十人居れば十人が振り返る

程の美少女だった。

「へへへ、コイツは上物だ…。」

その素顔を見た男達が誰ともなく呟くと下卑た笑みを深めた。

「ガキとはいえ人にぶつかつたからには誠意を持って謝ってもらわねえとなあ。取り敢えずは身体で払って貰うか。」

「楽しんだ後は売っ払って残りを返して貰うから気にすんなよ。」

その表情を見た少女の瞳に剣呑な色が浮かんだのに男達は気付く事無く、言いたい事を言いながらそれぞれ腰の剣を引き抜くと、脅す様に翳して見せる。

「…ッ!！」

男達が剣を抜いのを認めると、宗太は鞘ごと大剣を背中から引き抜き全力で踏み出す。

「ひゃっ!？」

宗太の踏み込みに耐えきれず石畳が陥没する。

それに驚いたアンジェリーナが可愛らしい叫び声を上げるが気にしないでおく。

瞬時に間合いを詰めると、二閃。

手前で背を向けている二人を叩き伏せる。

驚いた様子で宗太を見る四人。

宗太は軽く左にステップを踏むと男の肩口に突きを叩き込む。

「伏せて!!」

盛大に吹き飛んで行く男に殺して無いかと内心焦りながらも、少女に向かって指示を出す。

言われた通りに身を屈めた少女を確認すると一歩踏み込み、こちらに向き直った残り二人の内左の男を横殴りに吹き飛ばした。

「て、テメエ！俺達を傭兵団『鮮血の剣』^{（じるぎ）}と知ってて刃向かってやがんのか！？」

「知るかバカ。」

上擦った声で叫ぶ男に一言だけ返して叩き伏せる。

一応死んではない筈である。

…全員瀕死かもしれないが。

「ソータさーん、大丈夫ですか！？」

最後の一人を倒したのを確認したアンジェリーナが声を上げながら駆け寄ってきた。

「うん、平気平気。君も怪我とかは無い？」

アンジェリーナに答えた後、少女の方に向き直り訊ねる。

改めて見るとホント小さい。

140センチメートルくらいしか無いんじゃないだろうか。

「うむ、問題は無い。今回は礼を言おう、助かった。オヌシ名は何と言っ?。」

少女の物言いに苦笑しながらも自己紹介をする宗太。

「どういたしました。俺は宗太、駆け出しの冒険者をやってるんだ。」

「何、冒険者じゃと…?。」

宗太の答えが気になったのか眉根を寄せる少女。

「あ、あの！取り敢えずここから離れませんか？この人達の仲間が来るかも知れませんし…。」

傭兵“団”と言っていたのを聞いていたのだろう。

アンジェリーナがそう提案してくる。

「そうだね、早いとこ離れよう。君も…。」

「済まぬが僕はここに残らねばならぬ。連れがおるのでな。」

宗太の言葉は少女に遮られてしまった。

なおも迷う宗太とアンジェリーナに少女は続ける。

「何、すぐに合流する予定じゃ。こ奴等の仲間遭遇する前には離れられるじゃろう。」

言外に早く行けと言われていると感じた宗太とアンジェリーナは、少女を気にしながらも先に行く事にする。

「そう言えば名乗り忘れておったな。僕の名はルシフェラ。すぐにまた逢うことになるじゃろう…。」

宗太は背後から聞こえた少女　ルシフェラの言葉に振り返り、軽く手を振ってからまた歩き出した。

「ソータ、か……。なかなか楽しそうな奴じゃの。」

二人が立ち去ったのを確認したルシフェラが呟く。

ふと、こちらに近付いてくる気配を感じた。

その数十。

連れの合流よりこちらの方が早かったかと一人こちる。

「オイ、ガキ！こりゃあ誰がやりやがった！？」

ルシフェラと倒れている仲間を認めた男達がルシフェラに詰め寄る。

「何、ぶつかった程度で得物を抜いてきたのな……。」「

その言葉を聞いた男達は剣を引き抜いてルシフェラを取り囲む。

腐っても傭兵という事だろうか、その行動は素早かった。

ルシフェラが内心で感心していると、男達の一人　リーダーと思
わしき人物が忌々しげに口を開く。

「オイ、ガキ……。誰がやりやがったのかは後でゆっくり聞かせて貰
おうじゃねえか。テメエ等、連れてけ！」

「　それは御遠慮願います。」

リーダーが号令を出すと同時に、どこからともなく少女の声が聞こ
えてきた。

「だ、誰だッ!？」

リーダーが姿無き声の主に向かい叫ぶ。

すると、狼狽える傭兵達の直中、ルシフェラの背後に侍女服を身に

纏った少女が突如として現れる。

年の頃16、17といった所だろうか。

薄紫の髪を後頭部で一つに纏め、同色の瞳はどことなく落ち着いた
雰囲気醸し出している。

腰に佩いた双剣が異様ながらも身に纏う雰囲気に溶け込んでいる。

「一人の女性を十人がかりで取り囲むなど、エスコートにしては些
か礼儀に欠けると思いますが。」

少女は男達を窺めるように言う。

「遅いぞリース。何をしておったのだ。」

「申し訳ありません。城内の探索に思いの外手間取ってしまいまし
て…。しかし、このまま領主を消した方が手っ取り早いのはあり
ませんか？」

ルシフェラの問いにリースと呼ばれた少女が答える。

「何を言うか。軍を以て侵略するのが様式美というものじゃろつが。」

「て、テメエ等何を言つてやがる！何モンだッ……！？」

二人のやり取りに業を煮やしたリーダーが問い掛けるも、答えてくれる者はいなかった。

「申し訳ありませんが、少し黙つてて頂けませんか？」

リースが腰の双剣を握り一步を踏み出すが、それはルシフェラの手によって遮られた。

「……ルシフェラ様？」

「儂は今とても気分が良い。こ奴等は儂が直々に相手しよう。」

リースを手で制したルシフェラが変わりに歩み出る。

リースは諦めた表情で退いた。

「さあ、掛かってくるがよい！下郎共！」

素手で高らかに宣言したルシフェラに対し傭兵達は一瞬だけ逡巡するも、剣を握り直して襲い掛かる。

「来い、朔夜^{サクヤ}。」

ルシフェラがそう言った瞬間足元の影が蠢き、ルシフェラの右手まで伸び上がった。

ルシフェラが影を掴むと、影は漆黒の刀身を持ち、身の丈を超える両刃の大剣へと姿を変えた。

急な大剣の出現に動きを止める傭兵達にも構わず、ルシフェラは上段から切りかかる。

咄嗟に剣の腹で受けた傭兵は剣ごと二つに叩き斬られた。

驚き、狼狽える傭兵達を嘲笑うかの様に突如ルシフェラが姿を変える。

側頭部からは二本の角が生え、背中のローブが僅かに盛り上がる。

僅かに上がったロープの裾からは返しの付いた槍の様な尻尾が現れた。

「こ、コイツ…、魔族か…!!!」

あまりの出来事に浮き足立つ傭兵達は、しかし逃げる事叶わず。

次々に斬り伏せられていった。

全てが終わった後、そこには二人の少女と十五人分の肉塊が残っていただけだった。

「随分とご機嫌ですね。何か良い事でもございましたか？」

目の前の惨状を気にした様子も無く問い掛けるリース。

「うむ、オヌシが来る前にちと、の…。」

対するルシフェラも明らかにご機嫌な様子で宗太達が消えた方角を見つめる。

「……ククク。 さて、今代こそは儂を楽しませてくれるのかのう
？のう、勇者よ……。」

第4話 街の散策と買い物、邂逅（後書き）

どうも、今回書いていてアンジェリーナを気に入ってしまった作者です。

遂に出ました彼女達。
これからどうしよう。

取り敢えず作中に出てくるか不明ですが、急遽考えたギルドの説明です。

ギルドの紹介（ ）内は印（ 印は世界共通）

冒険者ギルド（盾に立て剣）

各国にある冒険者を纏める組織。

国を越えて繋がり、国とは独立した組織である為戦争には関わらない。

依頼主からの仕事の仲介や素材の買い取り、提携店の紹介など幅広いサービスを行う。

傭兵ギルド（盾に交差剣）

各国にある傭兵を纏める組織。

冒険者ギルドとは違い他国のギルドとの繋がりはない。

戦争時に登録された傭兵と国との仲介を務める。

魔術師ギルド（六芒陣に杖）

各国にある魔術の研究や魔術師を教育する組織。
魔術の研究内容は部外秘であり、戦争時には所属魔術師も参戦するため傭兵ギルドと同じく他国のギルドとの繋がりはない。

商業ギルド（荷馬車に財布）

都市にある卸商の組合。

主に店主への卸商の紹介、取次などを行う。

また、冒険者ギルドから素材の引き取りや海運ギルドとの提携等も行う。

海運ギルド（竜頭帆船）

沿岸部の船主による組合。

商業ギルドとの提携による船主と卸商の仲介や造船所の取り纏め、一般人への客船等の紹介も行う。

盗賊ギルド（交差短剣）

盗賊や暗殺者を纏める非合法組織。

暗殺依頼や暗殺者の育成、盗品の売買等をしている。
ギルド同士の繋がりには情報の共有程度。

主な物は以上でしょうか。

ご意見、ご感想等もお待ちしております。

第5話 続・買い物と魔王襲来！！

ルシフェラと別れた宗太とアンジェリーナは本来の目的である服飾店への道中を歩いていた。

「 やっぱり暫くは裏道を通るのは止めといった方が良いと思うよ。」

「

宗太は先程の騒動を思い出しながらアンジェリーナに忠告する。

「 いつもならあんな事は滅多に無いんですよ…? 」

対するアンジェリーナは若干俯きながらも反論する。

「 滅多に無いと言っても絶対じゃあないだろう? それに魔族が此処を狙ってるって情報があるんだし、ああいったならず者がこれからも増えると思うんだ。」

戦場を求めて傭兵が押し寄せれば、ああいった手合いもまだまだ増えてくるだろう。

「 今回のルシフェラがアンジーだったらどうなる? 俺だって何時も

護れる訳じゃない。多少遠回りするだけで危険が回避出来るならそ
うちの方が良いじゃないか。」

「そう…ですね。分かりました、暫く裏通りには近付かないように
します。」

どうやらアンジェリーナも理解してくれたようだ。

笑顔で応じてくれた。

残念ながら「出来れば、お使いの時とかもソータさんと一緒にお出
かけしたりとか…」というアンジェリーナの呟きは宗太の耳には
届いていなかった…。

目当ての服飾店は大通りから少し中に入った場所に建っていた。

看板には針と糸にシャツ、それにネックレスと思われる絵が描かれ
ている。

どうやらこれが服飾店の印のようだ。

「いらっしゃい！…おや、アンジーかい。」

「今日はユニスさん。」

店内に入ると20代くらいの若い女性店員が笑顔で迎えてくれた。

どうやらこの店もアンジェリーナの馴染みであるらしい。

「…と、後ろの男はアンタのコレかい？」

そう言っつて親指を示すユニス。

ここでも親指は“男”を表すのだろうか。

アンジェリーナは一瞬で顔を真っ赤に染め上げる。

「ち、違います！ソータさんはうちのお客さんで…！！」

「ほほーっ？そうかいそうかい。」

顔を真っ赤に染めながらあたふたと反論するアンジェリーナをニヤ

ニヤ笑いながらからかうユニス。

若いのに随分とオッサン臭い言動だ。

「それで、今日は何の用事で来たんだい？」

一頻りアンジェリーナをからかった後、宗太に訊ねてくるユニス。

アンジェリーナは漸く解放されてホッと息を吐く。

赤くなりながら瞳を潤ませている顔が何とも可愛い。

このままアンジェリーナを眺めていたらイケない性癖に目覚めてしまいそうだったので、慌てて本題に移る。

「えと、実は替えの服が無いのでそれらを買いに…。」

「ん、もしかして早急な入り用かい？」

途端に困ったような顔をするユニス。

「何か問題でもあるんですか？」

「確かユニスさんって普段からフリーサイズの作り置き用意してま
せんでしたっけ？」

宗太とアンジェリーナがそれぞれ疑問を述べると、ユニスが申し訳
無さそうに言う。

「…それ何だけどねえ！。実は昨日新規の客が来て買ってっちまっ
たんだよ…。」

「そんな…。」

ユニスの店ならすぐに手に入ると思っていたのだが当てが外れた。

宗太に無駄足を踏ませてしまった事に落ち込む。

「何着必要だっ たんだい？」

「そうですね…、上下と下着で三着ずつくらいでしゅつか。」

この街に長居するとも限らない。

旅を考えるならその辺りが妥当だろう。

「今から採寸して縫うとなると上下と下着の二組で…出来上がりは二日後かな？」

「そんなに早いですか？」

そんなに早く作れるものなのだろうか。

もつと時間がかかるものだと思っていた。

「ま、アンジীরオトコなら特別さ。超特急で仕上げてやるよ。」

そう言って豪快に笑う。

ヤバイ、姉御と呼びたくなってきた。

「か、かかか彼氏じゃ無いですよ！？そんな、あたしなんてソ-

タさんにはとても……！！で、でもソータさんさえ良ければ……、その……。キャッ！」

落ち込んだ様子から一転、わたわたと手を振りながら騒ぐアンジェリーナ。

もう先の失敗は頭に無いようだ。

こうなる事を狙ったのだろう。

ユニスは優しい微笑みを浮かべながらアンジェリーナを見ている。

（仲良いんだなあ……。）

そんな二人のやり取りを見て、宗太もつられて笑みを浮かべるのだった。

「さて、それじゃ採寸しようか。コッチに来てくれ。下着は丁度一組あるから、今日の所は古着屋で買って貰えるかい？」

そう言いながら店の奥に向かうユニスに付いていく。

店の奥が作業部屋となっているようだ。

壁際の棚には色とりどりの布、作業台の上には作りかけの衣服や裁縫道具等が置かれている。

「上着は脱いでおくれ。」

そう言いながら道具入れからメジャーの代わりなのだろう細長い紐を持ってくる。

宗太は言われた通り詰め襟を脱ぐとユニスに手渡す。

「ほづ、コレは……。なるほど。」

ユニスは受け取った詰め襟を一頻り観察し終わると、入り口脇のコートハンガーに掛けて宗太の採寸に移る。

「ユニスさんってアンジーと仲良いんですね。」

黙っているのも何なのでユニスの指示通りに紐を摘んだり、採寸の補助をしながら思った事を聞いてみた。

「ああ、あの娘この家は服から寝具までウチで買こってくれてるからね、それなりに長い付き合いなんだよ。あの娘も小さい時から知ってるから、まあ妹みたいなもんだね。」

言って笑う。

「あの娘が今日着てる服もねえ、アタシがこの前の十歳の誕生日に贈った物なんだよ。大事にするって言ってたんだが、まさかオトコ連れでお披露目に来ると思わなんだ。まだ子供だと思ってたんだがやっぱり女の子なんだね！」

「ははは…。」

意地の悪い笑みを浮かべて見上げてくるユニスに、宗太は苦笑で返す事しか出来なかった。

採寸も終わり店内に戻ると、アンジェリーナは暇つぶしに見ていたのだろう商品のカタログから顔を上げた。

「ソータさん、採寸終わってたんですね。お疲れ様でした！」

「うん、お待たせ。」

そう返すと、顔を赤くしてまたカタログに視線を落としてしまう。

「はいよ、下着だ。この後特に予定が無いなら二人で公園に散歩にでも行ってきたらどうだい？」

そんなアンジェリーナの様子をニヤニヤと笑いながら見ていたユニスが下着の入った紙袋を渡しながら不意に提案してきた。

「公園？」

「この街には北区と東西区画の境に遊歩道と公園があるんですよ。それと中央広場を合わせた三カ所が市民の憩いの場となってるんです。」

宗太の疑問にはアンジェリーナが答えてくれた。

「じゃあ、古着屋を見た後にでも行ってみようか。」

「は、ひゃい！ー！」

勢い良く答えたアンジェリーナだが、声が裏返ってしまい顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。

「はっはっは！それじゃあ服は明後日の夕方にも取りに来てくれ。下着の代金もその時に纏めてで良いよ。」

「ありがとうございます。」

宗太はユニスに礼を言い、アンジェリーナと一緒に店を出て行った。

「まったく、あの娘も初心つひなんだから…。」

そう呟くとユニスは穏やかな笑みを浮かべて二人を見送るのだった。

「あたしが選んでも良いですか!?!」

ユニスの店の近く、大通りに面した古着屋に入るやアンジェリーナが期待に満ちた声で聞いてくる。

ユニスに散々煽られたためか、最早アンジェリーナの中では「買い物付き添い」から「デート」に替わってしまっているらしい。

「そうだね、お願いするよ。」

もつとも、普段から服装に無頓着だった宗太としてはこの申し出を断る理由もない。

好意をありがたく受け取ることにする。

宗太の言葉を聞いたアンジェリーナは、嬉しそうにして店内に所狭しと並んだ衣服を漁りだした。

次々と宗太に似合いそうな服を掲げては小首を傾げている姿はまるで小動物のようで可愛い。

「コレなんてどうですか？」

小一時間ほど悩み続けるアンジェリーナを眺めて和んでいると、選び終わった服を差し出してきた。

詰め襟姿から決めたのだろうか、麻製と思われる白いワイシャツに

黒のベスト、同じく黒のズボンの三着だった。

「うん、いいね。コレを買おうか。」

アンジェリーナから服を受け取ると代金を支払い店を後にする。

「お昼はどうしようか?。」

腕時計で時間を確認すると一時半を少し過ぎた頃。

昼食を取るには少し遅い時間だろうか。

「中央広場に屋台があると思いますから、そこで買って公園に行きましょう!。」

アンジェリーナに促されるまま大通りを歩いて行くと、街の中心部である中央広場に出た。

周りは屋台や露天商が店を広げ、中央にある噴水の辺りでは穏やかな日差しと広場を包む喧騒の中沢山の人々が寛いでいる。

「この広場から北西と北東に続いている道が遊歩道で、その中頃に大きな公園があるんですよ。」

アンジェリーナの説明を聞きながら屋台で軽食を購入し、西部の公園へと向かう事にする。

買ったのはナンのような平焼きパンで角煮と野菜を包んだ物で、一つ銅貨五枚だった。

飲み物も一緒に買おうとしたが、公園の屋台で買うべきだと止められた。

何でも、使い捨てのコップというのは無いようで、飲み終わったら返却しなければならいらしい。

飲み物を諦め遊歩道を歩くこと凡そ三十分、目的の公園に到着する。

公園の中央には池があり、その周りを石畳の歩道が囲み、至る所に草木が茂っている。

公園は割と広く、中央広場ほどの賑わいは無いが親子連れや恋人同士が思い思いのひと時を過ごしていた。

二人は歩道脇の屋台で飲み物を買つと、近くのベンチに腰を下ろす。

「今日は買い物に付き合つて貰つてありがとね。」

買った軽食をかじりながらお礼を言う。

「い、いえそんな…。あたしもソータさんとお買い物出来て楽しかったですし…！それにソータさんのお願いなら何時でも…。」

頬を染めて俯きながら答えるアンジェリーナを見て微笑む。

この健気さは本当に癒される。

残念ながら最後の方は宗太の耳には届かなかったのだが。

「じゃあ、今度はアンジーの用事に付き合つよ。人手が必要なら何時でも声掛けて。」

「え、良いんですか…！？」

「うん、今日のお礼も込めてね。」

やはり自分に付き合わせて一日潰してしまったのだ、それなりの礼はするべきだろうと考えた上での提案だった。

（神様ありがとう…!!）

アンジェリーナとしては嬉しい事この上ない提案だ。

心の中で神に感謝した。

「あ、そろそろ帰らないと…。」

たわいも無い話をしながら一時間ほど過ぎたころ、アンジェリーナが呟いた。

「ん、もう時間？」

「そろそろお店の仕込みを手伝いに戻らないといけないんです。」

そう言うアンジェリーナは酷く残念そうだ。

「アンジーさえ良ければおかみさんに許可貰ってまた来ようか。」

こんな小さな娘ならまだまだ遊びたい盛りだろうに、それを我慢して親の手伝いを頑張ってる。

その健気さに何かしてあげたい　そう思ったら自然と口から言葉が出ていた。

「ホントですか！？約束ですよ！」

途端に満面の笑みを浮かべて喜ぶアンジェリーナだった。

宿に戻るとアンジェリーナと別れ、部屋に戻る。

服の入った紙袋を窓際、ベッドの反対に置かれた机の上に放り、大剣をベッド脇の壁に立て掛けるとベッドに寝転がる。

今日はなかなか濃い一日だった。

リードには驚かれユニスにはからかわれ…、そして叩きのめした傭

兵達にルシフェラと名乗った少女。

（あの娘は無事に連れの人と合流してあの場を離れられたんだろうか…。傭兵の仲間が敵討ちとか来たらイヤだなあ。）

そんな事を考えているとふと思い出される言葉。

『すぐにまた逢うことになるじゃろう…。』

「どういう意味なんだろ…。また遭うのを確信してるみたいな言い方だったけど。」

解らないなら考えても仕方の無い事か。

そう思い目を瞑った。

「ソータさん、夕飯にしませんか？」

ノックの音と共にアンジェリーナの声が聞こえ、目を覚ます。

時計を見ると六時を回った所だった。

「今行くよ。」

そう言ってベッドから起き上がり伸びをする。

「用意しておきますね！」

扉の向こうからは元気な声が聞こえ、続いてパタパタと廊下を走る音が遠ざかっていった。

宗太も食堂に向かう事にする。

「アンジー、今日はヤケに機嫌が良いじゃねえか！」

「あれか？ついにオトコが出来たんだな？」

「オレアさっき言ってた『ソータさん』ってのが怪しいと見たね！」

「かーっ、オヤジさんも遂に泣く日が来たんだねえ！」

階段を降りるとアンジェリーナが酔った常連客に揉みくちやにされている光景が飛び込んできた。

「あ、ソータさん、カウンター席にどうぞ!」

宗太を見つけたアンジェリーナは酔っ払い達を軽くあしらいながら宗太を席に案内する。

「何か…大変そうだね。」

「もう、皆酔っぱらっちゃって困っちゃいます。」

そう言って笑う。

すると、調理場から四十代くらいの男性　この宿屋の店主が出てくる。

何時も調理場に居る為宗太は会うのは初めてだった。

「あ、初めま…。」

宗太の挨拶は包丁がカウンターに突き立てられた音によって遮られた。

「パ、パパ…！？」

「娘は…、娘は絶対にやらんぞ…。」

驚愕の声を上げるアンジェリーナに構わず、親父さんは低い声で威嚇する。

「何やってんだい、アンタはっ！」

おかみさんにお盆で頭を叩かれる親父さん。

スパコーン！という小気味よい音が響いた。

「ぐおお…、し、しかしアンジーがこの男に…。」

「ソータさんにヒドい事するパパは嫌い…。」

頭を抑えながらも抗議の声を上げる親父さんに止めの一撃が突き刺さった。

「パパが変な事してごめんなさい…。」

「いや、気にしてないよ。」

俯き謝罪するアンジェリーナにそう返す。

力尽きた親父さんかというと、おかみさんに引き摺られ調理場へと消えて行った。

いつの世も女は強いと実感させられる。

食事を終わるとアンジェリーナにタオルを借り、裏の井戸で身体を拭う。

高級宿や金持ちの家ならともかく、一般的な宿や家庭では湯を沸かす手間などの理由から風呂が無いのだとか。

湯を沸かす為に熱を発する道具もあるそうだがやはり高級品だとのこと。

普段は濡れたタオルで身体を拭くか、商業区の公衆浴場　　と言つても蒸し風呂らしい　　に行くのだとか。

お湯を用意すると言われたが、手間をかけさせるのも気が引けるので断った。

（鉄砲風呂くらいなら作れそうなものなんだがなあ…。金銭的に無理なのか？）

部屋に戻り着替えを済ませると、ベッドに潜り込みそんな事を考えるのだった。

ガチャン

どこの酒場も店仕舞いし、街中がひっそりと寝静まったころ、宗太はそんな音で目が覚めた。

続いてコツ、コツ、コツと何者かが床を歩く音。

音は宗太の横で止まった。

途端に感じる背筋が寒くなるような殺気。

反射的に身を起こすとドゴッ！っという破砕音と共にベッドが砕かれた。

「
…流石にバレるか。」

その声に振り向くと、そこには漆黒のドレスに身を包み月明かりに輝く銀の髪を持つ少女　ルシフェラが漆黒の大剣を振り下ろしたままの体勢でこちらを見ていた。

「ル、ルシフェラ！？何で此处に…。」

「言ったじゃろ？『すぐにまた逢うことになる』と…。」

混乱する宗太を余所に再び大剣を振り下ろすルシフェラ。

かろうじて躲した宗太は、壁に立て掛けていた大剣を掴み窓から飛び降りた。

背後からは三度目の破砕音。

（二階で良かった…。）

無事着地し、ホッと胸を撫で下ろすと走り出す。

暫く走りつづけると見覚えのある場所、昼間アンジェリーナと来た公園へと辿り着いた。

背後から追ってくる気配が無いのを確認して漸く足を止める。

「傭兵ならまだ解るが、何でルシフェラに襲われたんだ？もしかして昼間置いてった事根に持ってたとか…？」

「戯け、そんな訳あるまい。それに傭兵共なら始末しておいた故安心するがよい。」

宗太の誰に言うでもないボヤきに対し、そんな返答が前から聞こえて来た。

驚いて前を見ると、いつの間に回りこんだのかルシフェラが涼しい顔で佇んでいた。

「いつの間に！？ってか、昼間の事が関係ないなら一体何で…？」

「昼間の事がまったく関係ない無いという訳では無いが…。まだ解らぬのか？」

そう言ったルシフェラが何事か呟くと、側頭部から角が、背中から黒い羽、腰からは黒い槍のような尻尾が生えた。

「コレで解ったじやろう！」

そう言いながら手にした大剣で切りかかる。

「え、角？羽？ってうわぁ！？」

咄嗟に背中の大剣を握み防御するも、ルシフェラの小さな身体から繰り出されたとは思えない斬撃の威力の前に吹き飛ばされる。

地面を転がり体勢を整えるも、先程の一撃で剣は曲がってしまっていた。

「ほう…、まさか只の剣でこの朔夜サクヤの一撃を受けて無事とは驚いた。

」

宗太はルシフェラの斬撃の威力に驚いていたのだが、ルシフェラは別の事に驚いている様子だ。

「只のつて…、その剣は普通と違うのか？」

「左様、この剣は魔剣マキヨ月夜。

歴代の魔王に受け継がれし魔王剣じゃ。」

「魔剣？魔王？」

ルシフェラの説明も予備知識の無い宗太には全く理解出来なかった。

「そう、そしてこの剣を持つ者こそオヌシの倒すべき相手じゃ！それくらいは理解しておるう？のう、勇者よ！」

言葉と同時に、大きな踏み込みと共に繰り出される斬撃の嵐を避け続ける。

漆黒の刃が夜の闇に溶け込んで見え難い。

感で何とか回避に成功している状態だ。

「ふむ、良く避ける。ならばコレならどうじゃ？ 魔剣月夜・織月！」
センゲツ

ルシフェラの叫びと共に漆黒の大剣がその姿を変える。

そして漆黒の大鎌が姿を現した。

「形が変わった!？」

「これこそが魔剣月夜、複数の武器に形や能力すら変じる魔の剣じや!！」

大鎌の斬撃を大剣で防ぐも、急な間合いの変化と刃の形状の為か刃先が頬を掠める。

たまらずバックステップで距離を取るが、ルシフェラは追う事はせず、その場で鎌を振るう。

（アレは拙い……！！）

本能が警鐘を鳴らす。

考えるより先に横へ回避する。

直後、石畳が幾本もの線を引き抉れていた。

「どうした、避けてばかりだと僕は倒せぬぞ！？」

「コッチにや闘う理由が無いっての！」

あまりの理不尽さに思わず怒鳴ってしまった。

「オヌシを召喚した王から説明されたじやろう？魔王、即ちこの僕を倒せと。その為にこの都市に来たんじやろうが。」

「王なんか知るか！俺が目覚めたのは西の森でこの街に来たのも偶

然だ！それに可愛い女の子に傷なんかつけられるか！！」

一気にまくし立て肩で息をする。

ルシフェラはというとポカンと口を開けていた。

「ク、ククク…ハハハハッ！召喚された先がイーヴルニスの森じゃと！？しかも歴代最強と言われ魔族からも恐れられるこの儂に『可愛い』などと申すか…。ククツ、オヌシは想像以上に面白い男じゃのう。」

ルシフェラは楽しそうに続ける。

「しかし、オヌシが儂を倒さねば人類が危機に立たされるのじゃぞ？」

「それも嫌だな…。」

若干悩む様子で答える宗太。

「じゃろっ？ならば儂を倒して…。」

「だからそれは嫌だって。」

ルシフェラは続けるも、これには言葉を遮り即答する。

「オヌシ、我が儘な奴じゃのう……。」

呆れた表情で言葉を吐き出すルシフェラ。

「しかし、ふむ……。……うむ、決めた！」

続けて何事か考え込む仕草をしたと思うと徐に顔を上げて言い放つ。

「オヌシ、儂のモノになれ!!」

「……はあ!？」

ルシフェラの突拍子もない言葉に今度は宗太が呆然となる。

「儂はオヌシの願いを聞き届けよう。今後の人間共の国への侵攻は中止する。そうなれば人間共も脅かされずに済むし、オヌシも儂と

戦わずに済むじゃろう？代わりにオヌシも儂の願いを聞け、という事じゃ。」

説明を続けるルシフェラに混乱しながらもそれを聞いている宗太。

「で、その願いつてのが…。」

「儂のモノになり儂を楽しませろ、という事じゃ。」

「……はあ。」

満面の笑みを浮かべるルシフェラに対し、宗太は溜め息しか出なかった。

「…また勝手にその様な事を決めて宜しいのですか？」

どこか呆れと諦めが入り混じったような声と共に、薄紫の髪の少女がルシフェラの横に現れる。

ルシフェラと同じく二本の角と羽、尻尾が生えており、清楚な侍女服にその身を包んでいる。

「うおっ!？」

突如現れたメイドさんに驚愕の声を上げる宗太。

「紹介しよう、こ奴が昼間言っておった連れ、儂の侍女のリースじや。」

「お初にお目にかかります。ルシフェラ様に仕えておりますリースリット・ノエルと申します。リースとお呼び下さい。以後お見知り置きを。」

優雅な仕草で挨拶をするリースリット。

「あ、どうもご丁寧に。ソウタ・アカツキと言います…って、そうじゃなくて!？」

つられて挨拶を返すが思い出したかの様にツッコミを入れる。

ルシフェラとリースリットは揃って小首を傾げていた。

「俺には突然現れたように見えたんだけど、どうなってるの?？」

「あれは『シャドウ・ムービング』といって、影から影へと移動出来る闇の上級転移術じゃ。儂がオヌシの後を追ってこの公園に来たのもこの魔術を使っただけなの。」

「影から影へって、壁とか障害物は…？」

ルシフェラの説明を聞いて浮かんだ疑問を訊ねる。

「光があろうと無かろうと、闇があるなら行けぬ所は無い。無論結界の中でもじゃ。但し、色々と発動が難しく扱える者は少ないがの。」

「それじゃあ窓を破って侵入する必要は無かったんじゃないか…。」

「何を言う、賊は窓を破って侵入するモノと相場が決まっておろう？」

さも当然と言わんばかりのルシフェラにガックリと膝を着く。

その様子をリースリットが同情を多分に含んだ表情で見っていた。

（ああ、この人も苦労してるんだろぅなあ…。）

リースリットに親近感を覚えた宗太だった。

「さて、儂等は少し国に戻るかの。」

そんな宗太を余所にルシフェラが言う。

「何か予定があつたのか？」

「うむ、侵攻準備の取り止めなどをせねばならんでな。では、また後程会おう。」

その言葉と共に二人は影に溶けて消えていった。

一人取り残された宗太は溜め息を吐き宿に戻る事にする。

夜中に叩き起こされてそのまま戦闘。

折れ曲がった大剣の修理には一体幾らかかるのだろうか…。

「お帰り。」

足取りも重く宿に戻った宗太をおかみさんが笑顔で迎え入れた。

「アンタの部屋から大きな物音がしたと思って部屋に行ったら、アンタは居ないし部屋は滅茶苦茶だし…。どこに行ってたんだい？」

身体からはもの凄いプレッシャーを撒き散らしている。

正直、魔王のルシフェラより怖い。

「…えっと、寝てたら賊らしい人に襲われて…。」

ルシフェラな訳だが正直に言う訳にもいかず、ボカして答える。

「で、賊は？」

「…逃げられました。」

折れ曲がった大剣や頬の切り傷などから納得してくれたのだろう。

「…ハア、仕方ないね。でも壊れた備品なんかは弁償してもらおうよ？」

「…幾ら程でしょう？」

恐る恐る訊ねると、おかみさんは少し悩む。

「うーん、職人に聞かなきゃ判んないけど、ベッドに机、窓と壁、床で…大体4万エリーくらいになっちまうかねえ。」

現在全財産が26,360エリー。

「…後払いでも良いですか？」

ガツクリと膝を着きながら提案する。

「それで良いよ、後で依頼でもこなして返しておくれ。とりあえず別の部屋を用意しといたからそっちに移って休みな。」

おかみさんも金が無いのを理解してくれたのだろう。

苦笑しながら部屋の鍵を渡すと、自分の部屋へと戻っていった。

宗太は礼を述べてから荷物を新しい部屋に移し、再び眠りにつくのだった。

「
…ん。」

窓から差し込む朝の日差しを受けて意識が浮上する。

「んー、まだ眠いや…。」

昨夜は夜遅くに一騒動起きたため、疲れが抜けきっていない。

傍らの抱き枕を抱いて二度寝する事にする。

人肌の温もりが気持ち良い。

(…ん、抱き枕？)

ふと脳裏に浮かぶ疑問。

ここに来たのは着の身着のまま、買い物も服と剣しか買っていない。

当然、宿に抱き枕なんて置かれてなかった筈…。

意識が急激に覚醒していく。

「のわああああっ！…！」

抱き枕だと思っただのはいつの間にかベッドに潜り込んでいたルシフエラだった。

「…んむ、何じゃ朝っぱらから騒々しい。」

目が覚めたルシフェラが瞼を擦りながら不満そうに言う。

「ど、どどどどうして…!」

「ソータ様、寝起きはお静かに願えますか？」

宗太の疑問の声は背後から聞こえた声によって止められる。

恐る恐る視線を背後に移すと宗太に寄り添うように横になるリース
リットが居た。

「リ、リース!? 何故ここに!？」

「それは…。」

リースが答えようとしたとき、ドタドタと廊下を走る音と共に勢い
良く扉が開け放たれた。

「ソータさん、どうかしましたか!?!」ってルシフェラさん?」

宗太の叫びを聞きつけて来たのであろうアンジェリーナだった。

「ア、アンジー？これはその…。」

「おお、オヌシは昨日の…。」

「ソータさんが、ルシフェラさんと美人のお姉さんと…。…きゆう。」

宗太とベッドに寝ていたルシフェラとリースリットの二人を認めたアンジェリーナが顔を真っ赤にして倒れてしまった。

「ちょっ！アンジー！」

慌てて駆け寄り抱き起こす宗太。

アンジェリーナは目を回して気絶していた。

第5話 続・買い物と魔王襲来！！（後書き）

5話目でやっとタイトルの内容を出せました。
さてこれからどうしよう。

実はこの小説、あらずじ文だけ思い付いた状態で書き始めたのでプロットとか無かったりしますorz

設定とかも書きながらその都度：（森とか街、公園、人物その他諸々）。

とりあえずアンジェリーナをヒロインに格上げしてハーレム目指すか…。

その場合、このまま初心でちょっと積極的なのと、ユニスに煽られてかなり積極的になるのとどちらが良いのでしょうか？

こんな行き当たりばつたりな小説ですが、お気に入り登録して下さる方もいて嬉しい限りです。

これを励みにこれからも続きを書いていこうと思いますので、どうか宜しく願います。

第6話 勇者の説明と依頼受注

「それで、何で俺のベッドに潜り込んでたんだ？国に戻るとか言うてなかったっけ？」

アンジェリーナが目を覚ました後、必死に事情を説明して納得して貰った宗太達は食堂で朝食を取っていた。

正直、リースリットが上手く口裏を合わせてくれて助かった。

「うむ、国には戻ったぞ。侵攻の中止を指示した後そのままオヌシの元に転移したんじゃが、寝床が無くての。」

「後処理を命じられた大臣達は今頃泣いていると思いますが…。それで私達も睡眠を取る為に、ルシフェラ様のご提案で一緒に一緒に頂きました。」

ルシフェラの説明に一言突っ込んでからリースリットが説明を引き継いだ。

主人に対してツッコミ入れる侍女というのもどうかと思うが、ルシフェラも気にしていない様子なので問題無いのだろう。

これも信頼の表れというものなのだろうか。しかし…。

（やっぱり他の人達も泣かされてるのか…。）

自分の先行きが不安になった宗太だった。

「ところで、タベ言ってた勇者とか魔王って何なんだ？」

気を取り直してタベから気になっていた事を質問してみる。

「む？…ああそうか、オヌシはイーヴルニスの森で目覚めたと言
うておったかの。」

どうやらルシフェラもその事を思い出したようだ。

「では、魔王と勇者という関係の成り立ちから説明するのでしょうか。
の。もっともこれは魔族に伝わる文献によるモノじゃが…。」

ルシフェラは一言加えると、お茶を一口飲み語り出す。

「嘗てこの世界には闇の魔力属性を持つ魔族ともう一つ、光の魔力

属性を持つ神族という存在がおったのじゃ。

魔族と共に上位種族と呼ばれ、魔族と唯一対等な力を持つ種族じゃつたらしい。

しかし、何時しか神族はその数を減らし、上位種族は魔族のみとなつてしまった。」

ルシフェラは一度言葉を区切り続ける。

「そして時は流れ、繁殖力の旺盛な人間がその数を増やした頃じゃ。力のある人間達によつて国が生まれ、争いが増加した。

魔族は当初これらの争いには非干渉の立場を貫いておつたそうじゃが、遂に奴らは魔族の暮らす場所まで侵略してくるようになった。当然、そんな事は認められる筈も無い。

侵略には抵抗し、何時しか魔族を纏める者を魔王、そして魔族の暮らす地域を魔族の王国、魔王国と呼ばれるようになったのじゃ。」

お茶を飲み、一息つくルシフェラの説明をリースリットが引き継いだ。

「魔王国による抵抗が激しくなると、困るのは人間でした。

領土は欲しいが下位種族である人間では上位種族である魔族にはどう足掻いても適わない。

そこで、魔族に対する手段として当時考えられたのが『どこかに消えた神族を呼ぶ』という事でした。

そうして、光属性を持つ者を無作為に呼ぶ大規模な召喚魔法陣が組みまれ、勇者がこの世界へ呼び出されるようになりました。

結果として『神族を呼ぶ』という目論見は失敗したものの、人間は勇者を担ぎ上げ魔族に対抗する力を得たのです。

その後も勇者が死ねば新たな勇者が呼ばれ、召喚陣の改良が行われながら一進一退の攻防戦が繰り広げられ、何時からか『魔族は世界を滅ぼす存在』、『勇者は世界を救う存在』と噂される様になり現在に至ります。

最も、これは当時の王侯貴族達が自分達の侵略を正当化するために流した噂とも言われていますが。」

リースリットはお茶を飲むと口を閉ざす。

神族とか光属性とかは良く解らない。けど…。

「勇者とか良いながら、まるで体の良い使い捨ての道具じゃないか…。」

宗太にはそう言う事しか出来なかった。

「ハハハッ、使い捨ての道具か、言い得て妙じゃの。人間の欲望が生み出した偶像の英雄じゃ。」

ルシフェラは宗太の言い回しが気に入ったのか楽しそうに笑う。

「そして、先代魔王　儂の父上を倒した勇者を儂が倒し、新たな勇者と呼ばれたのがオヌシという訳じゃ。」

「何で俺が勇者だつて…。それに入城時に属性を調べられたら風と土だつて言われたぞ？」

宗太にとっては当然の疑問だろう。

「オヌシが目覚めたというイーヴルニスの森は大半が魔王国領での、さらに魔物の巣窟とあつて殆どの者が近寄らん。更に、国に戻つて得た情報じゃが…四日前この国で勇者召喚の儀式が行われたそうじゃ。結果は失敗。それにオヌシからは僅かじゃが光の属性を感じられるのじゃ。」

そついうと側を通つたアンジェリーナにお茶のおかわりを頼む。

お茶を受け取りアンジェリーナが仕事に戻るのを確認してから話を続ける。

「勇者は皆光の魔力属性を持つて召喚される。それが元々の力なのか神代の神々の加護なのかは、諸説あつてはつきり解つてはおらんのじゃがな。オヌシの属性が間違われたのは、光の属性が覚醒しきつて無い所為じゃろう。」

「魔力つて覚醒とかで現れるものなの？判別する水晶は？」

「判別の魔導具は要はその者の魔力の表面をチラツと見るだけのモノじゃ。」

魔力とは本人の属性と同質、若しくは相反する魔力を流し込み、体内で存在を理解して初めて魔術として使えるようになるのじゃ。故に魔術師を目指す人間は魔術師ギルドへ加盟して目覚めさせるのじゃよ。

あそこなら基本四属性は揃っておるし、引き続き魔術を学ぶ事も出来るからの。」

魔術師ギルドなるものまであるとは知らなかった。

「じゃあ、俺も魔術師ギルドに入って学べば良いのか？旅に出るなら覚えておきたいし。てか人間以外はどうしてるんだ？」

宗太の質問にルシフェラは手をヒラヒラ振りながら答える。

「あそこに入るのは止めておくがよい。現在光属性を唯一目覚めさせられるのは闇属性だけじゃし、勇者とバレれば王城に強制連行で魔族と戦わされるのは確定じゃ。人間以外は大抵種族内で子供に教えていく事になるの。」

それを聞いてイヤそうな顔をする宗太。

「それは…、勘弁だな。それじゃあ今までの勇者はどうやって覚醒させてたんだ？てか、俺が現れないと新しい勇者が召喚されるんじゃない？」

「大昔に闇属性の魔力を封じ込められた魔力石があるのじゃ。その現存する最後の一つをこの国が保持しているのじゃよ。複数の勇者については召喚出来ぬようじゃ。世界が存在を許さぬらしい。」

ま、幾ら来ようが物の数ではないがのと言いながら笑う。

「旅に出るなら儂らが魔術を教えてやろう。良い暇つぶしにもなるじゃろうからの。」

「ソータさん旅に出ちゃうんですか!？」

ルシフェラがお茶を飲み干し立ち上がると、話を聞いていたのかアンジェリーナが詰め寄って来た。

「…え？う、うん、何時かはそうなるかな…と。」

宗太が勢いに圧されてそう答えると、アンジェリーナは何事か考え出した。

「そ、その時はあたしも連れてって下さい！」

暫く悩んでいたと思ったら、顔を赤くしながらそうお願いしてきた。

調理場からは皿の割れる音とおかさんの怒鳴り声が聞こえてきたのだが、聞こえなかった事にする。

「しかし、旅は危険ですよ？何の力も無い子供のお守りをしながら出来るモノではありません。」

宗太がどう説得しようかと悩んでいると、リースリットが助け舟を出してくれた。

「な、ならあたしにも魔術を教えて下さい！」

尚も食い下がるアンジェリーナに対してリースリットが言葉を続けたようとした時。

「うむ、良いじゃろう。」

ルシフェラの一言が全てを台無しにした。

思わずテーブルに突っ伏す宗太とリースリットを尻目に、はしゃぐアンジェリーナと得意気に頷くルシフェラ。

宗太は目から汗が流れそうになるのを感じた。

断じて涙では無い。

「ではアンジーの参加も決まった所で早速講義を始めるとするのかの。」

「

「…あ、今からは無理だ。ちょっとギルドで依頼受けて金稼がないと。」

宗太としては思い出したくない現実ではあるが、早急にどうにかしないといけない問題があったのだった。

「…？何故じゃ？」

意気揚々と歩き出したルシフェラだが、宗太の一言で歩みを止め振り返る。

「壊れたベッドとかの弁償と折れた剣の修理代。」

「……あ。」

どうやらルシフェラとリースリットも思い出したようだった。

話し合いの結果、結局魔術はギルドの依頼をこなしながら教えて貰う事になった。

宿泊客ではない二人分の朝食と、四人分の弁当代は宗太が払う事になったのは別の話。

というか、外出許可を出す代わりにアンジェリーナの弁当代も請求する辺りおかみさんもちゃっかりしている。

「まずは儂らもギルドに登録せねばの。」

「え？登録には都市発行の証明書が必要らしいけど持ってるの？」

何気ない会話をしながらギルドへ向かう四人。

「うむ、ちゃんと城門で審査を通してから都市に入っておったからの。ホレ。」

そう言つて滞在許可証を出すルシフェラ。

審査では魔力属性も調べられるんじゃないか…。

「我々程にもなれば簡易な判別魔導具など簡単にごまかせます。さらに、魔族には角等もご覧の通り隠す魔法も伝わっています。」

リースリットが小声で教えてくれた。

箆^{ぞろ}過ぎるぞ入城審査。

モリスさんに教えてあげた方が良さのだろうかといふ考えてしまった。

「儂ら三人ギルドに登録したいのじゃが。」

ギルドに着くとルシフェラが受付に行き登録を始める。

「アンジーも登録するの？」

「はい！ママも昔冒険者だったそうで、話したら市民証を出してくれました。」

そう言っ一枚の紙を取り出すと受付に渡した。

元冒険者とは、どうりで怒ったら恐い訳だ。

リースリットもそれに続く。

「ルシフェラ・レストール様、アンジェリーナ・メナード様、リースリット・ノエル様ですね。確認のサインを……。それでは三名様で登録料6000エリーになります。」

「……ソータ（さん）（様）」

何故か三人揃ってソータを見る。

宗太はうなだれながら角金貨を出す。

弁償の前にどんどん金が減っている気がするも、小心者の宗太には言い出せなかった。

ギルドの説明を断ると、カードが発行されるまでの時間に依頼を確認しておく。

「えーと…、南部の森で薬草採取、北部の山脈が薬草と鉱石採取と魔物討伐、商団の護衛依頼とかもあるのか。」

「しかし、これらの依頼はどれも往復で数日はかかってしまいますね。」

リースリットが教えてくれる。

世間知らずな宗太にとってこの優しさはありがたい限りだ。

「うーん、それは困るな…。明日の夕方にはユニスさんところに行かないといけないし。」

「Bまで受けられるなら、コレなんかどうじゃ?」西の森周辺の草

原でマッド・ハウンド10体の討伐』犬っころ10体で4万エリじゃ。素材も入れれば金貨一枚にはなるぞ。」

ルシフェラが一枚の依頼書を剥がして持ってくる。

「マッド・ハウンドって？」

「大型の犬のような魔獣です。性格は凶暴で単体ではランクC程度ですが群れで行動する為連携して襲ってくるのが特徴ですね。素材として利用出来る部位は皮くらいですが、割と良質の魔素石が回収出来ます。」

魔素石というのは魔獣が体内に魔力を溜めて置く為の、宝石の原石に似た器官だそうだ。

コレを精製した後、魔術を併用して錬成する事で様々な魔術媒体や魔導具として利用出来るらしい。

この依頼を受けようと受付に向かおうとした時だった。

「オイオイ、嬢ちゃん。新米がそんな依頼受けるのかよ。」

「そっちの兄ちゃんなんか折れ曲がった剣背負ってんじゃねえか。」

「てか、ここはガキの遊び場じゃねえんだぞ？」

「紫髪の姉ちゃんなら俺達が手取り足取りじっくり教えてやるのか？」

「いやいや、銀髪のガキもなかなか…。」

「お前そっちの趣味かよ！」

「ギャハハハハッ！！」

ギルド内の一角、テーブルの一つに陣取った冒険者パーティーらしい一団から冷やかしの声が上がった。

一体どのヤンキーだ。

二日連続でガラの悪い人達との遭遇である。

治安が良いと言う話は一体どこに行ったのだろうか…。

ルシフェラはそんな冷やかしなどまったく気にする事なく受付に向かう。

宗太も怯えているアンジェリーナの肩に手を置き、落ち着かせるようにしながら受付へと歩き出す。

「オイ、無視すんなっての！」

無視されたのが癪に触ったのか、冒険者の一人が一番後ろを歩いていたリースリットの肩に手をかけた。

瞬間、男はリースリットに腕を掴まれ投げられる。

宙に浮いた後、背中から床に叩きつけられ、更に雷の魔術のオマケまで貰った男は白眼を剥いて気絶していた。

（えげつない…。）

宗太は投げられる前に鳩尾に肘まで入れられていた男に心の中で黙祷を捧げながら、この人は絶対に怒らせてはいけないと本能で理解した。

「て、テメエ……！」

仲間をやられて逆上した冒険者達ヤンキーが一斉に襲い掛かるが、実力差など周りから見ても一目瞭然。

瞬殺された男達は部屋の隅に積み重ねられる事になった。

余談であるが、この件を目撃していた一部の冒険者及びギルド職員の間で『紫電の侍女メイド』と呼ばれ、本人の知らぬ所で密かに人気を博する事となったのだった。

第6話 勇者の説明と依頼受注（後書き）

全体は短いのに説明が長つたらしくてごめんなさい。

次回は魔法の説明になる予定…。

それと次話を投稿したら宗太、ルシフェラ、リースリット、アンジエリーナのキャラ紹介でも投稿する予定です。

第7話 魔術の説明と魔導書と。ですよ！（前書き）

サブタイアンジェリーナVer.

アンジェリーナ中心の話という訳ではありません。

第7話 魔術の説明と魔導書と。ですよ！

「この依頼を受けよう。」

ルシフェラは背後の騒動には一切目もくれず受付の前まで歩み寄ると受付嬢に依頼書を渡す。

「えっ！？…あ、はい、えっとルシフェラ様ですね。こちらがギルドカードになります。」

リースリットの無双状態を呆然としながら眺めていた受付嬢だったが、ルシフェラに声を掛けられ我に返ると業務に戻った。

同時に冒険者^{ヤンキー}を止めようとして近付いたが、結局一何も出来ないまま眺めていた（役に立たなかった）男性職員や他の冒険者達も本来の目的に戻って行く。

「依頼の内容は…。…申し訳ありませんが、ルシフェラ様のランクはFですのでコチラの依頼を受注する事は出来ません。」

依頼書を確認した受付嬢がそう言って頭を下げる。

「いや、受注するのはそこにいるソータじゃ。確かランクの高い者がメンバーにおれば、そのランクで受注する事が出来るのじゃろう？」

そう訊ねてから宗太を呼ぶ。

宗太は促されるまま受付に行くとカードを提示した。

「はい、それでしたら可能です。カードを拝見させていただきます…、ランクDのソータ・アカツキ様…ってまさかあのウワサのソータ様ですか！？」

受付嬢はルシフェラの質問に答えた後で宗太のギルドカードに目を通すや否や、いきなり声を上げて驚愕の表情で宗太を上から下まで観察するように見る。

途端に辺りからざわめきが聞こえてくる。

一体どんなウワサが流れているのだろうか。

何故か碌でもないモノの様な気しかない。

正直言って知りたくない。

「ほほう、どんなウワサなのじゃ？」

宗太の内心など知る由もなく、受付嬢の言い方に興味を覚えたたルシフェラが訊ねる。

「え、えっと…、私は人伝に聞いたただけなので…。怒らないで下さいね？」

「良いからさっさと話さぬか！」

と、前置きをしてから上目使いで宗太を見てくる受付嬢に、焦れたルシフェラが先を促した。

「は、はい！えっと…、私が聞いたウワサは曰わくロングホーン・ボアを一人で持ち上げる怪力の持ち主である、曰わく実は一子相伝の暗殺拳の使い手でその修行の為に入ったイーヴルニスの森でロングホーン・ボアを素手で屠った、曰わく地面を殴って地震を止めた…、というモノです。」

頭が痛くなってきた…。

恐らくロングホーン・ボアを持ち上げていた事に尾ひれが付いたのだろっ、…が。

「暗殺拳云々は絶対リードさんだ…！」

妙な確信を持って理解する宗太だった。

「アハハハハハッ！ソータ、オヌシー体何時から人間を辞めておったのじゃ！ハハハハハッ、ヒー…、ヒー…。」

後ろでは目尻に涙を溜めて笑い転げるルシフェラと、宗太とルシフェラを交互に見やりながらオロオロしてるアンジェリーナ。

リースリットまで顔を俯かせ、肩を震わせていた。

「はぁ…、取り敢えず暗殺拳も地震を止めたっていうのもウソですから。」

誤解を解くために訂正しておく。

世紀末覇者にも地上最強の生物にもなった覚えは無い。

「じゃが、ロングホーン・ボアを素手で屠って持ち上げたというのは本当なのじゃな？」

「…う。」

誤解を狙ってワザと曖昧に訂正したのに余計な事を。

「と、とにかく、その依頼を受注します！」

言葉に詰まる宗太を見かねて、話の流れを変えようとアンジェリーナが受付嬢に言う。

「あ、はい。それでは西の森周辺の草原で目撃されたマッド・ハウンド10体の討伐で、期間は三日間になりますが宜しいでしょうか？」

「はい。」

受付嬢の確認に頷く。

「畏まりました。それではお氣をつけて行つてらっしゃいませ。」

アンジェリーナとリースリットもカードを受け取りギルドを後にする。

「そう言えば、ルシフェラの苗字ってレストールって言うんだな。アンジーの苗字も始めて聞いた。」

ギルドの登録時になって初めてルシフェラとアンジェリーナの本名を聞いた気がする。

「む？…ああ、そう言えばちゃんと名乗っておらんかったか。儂の名はルシフェラ・エメイン・レスト・ローディアス。魔王国 正式にはローディアス魔王国の王じゃ。本名では色々と面倒事が起こるかも知れぬのでな。」

どうやら問題を避けるために偽名を使っていたようだ。

「ちよつ、お前な！アンジーが聞いて…。」

名乗ってくれるのは嬉しいが魔王というのがバレたら拙いんじゃないかろうか。

「別に問題無かるつ。どうやら宿での会話にも聞き耳を立てていたようじゃしの。」

そう言っアアンジェリーナを見る。

「えっ、そうなの!？」

「…あ、ごめんなさい。ルシフェラさんが魔王様で、ソータさんが実は勇者様だつて事とか…、聞いちゃいました…。」

申し訳無さそうに肩を窄めるアンジェリーナ。

「いや、俺としては他言しないつて約束してくれるなら問題無いけど…。魔族つて人間からは恐れられてるんじゃないの?」

「はい、約束します!それに、人から聞いてた話だと恐い人達だつて思ってたんですけど、ルシフェラさんもリースさんも良い人ですし。」

だから他の人には内緒にしますと言つてにこやかな笑みを見せるアンジェリーナ。

「うむ、物分かりの良い人間は好ましいの。」

そう言うルシフェラとリースリットもどこか嬉しそうに微笑む。

「アンジー？こんな所に何の用だ？」

外出手続きの為に西門の詰め所に寄ると、勤務中らしいロイドがアンジェリーナに話し掛けてきた。

「あ、お兄ちゃん。」

「お兄ちゃん！？」

衝撃の事実だ。

まさかロイドとアンジェリーナが兄妹だったとは。

「ん？ああ、アンタはこの前の。何でアンジーと一緒に居るんだ？」

宗太に気付いたロイドが訊ねてくる。

「ソータさんはうちのお客さんなの。ギルドの依頼でイーヴルニスの森の方に行くから手続きお願い。」

宗太の代わりにアンジェリーナが答えると、ギルドカードを提示する。

宗太達もそれに続く。

「ちよつ、ちよつと待て！何でお前が冒険者ギルドに登録してるんだ！？父さん達は知ってるのか？」

まさかまだ十歳の妹が冒険者になっているとは思わなかったのだから。

カードを確認したロイドが物凄く慌てている。

「ちゃんとママから市民証を貰って登録したんだよ。ほら、解ったならちゃんとお仕事しないと！」

「いや、しかし...。」

尚も食い下がろうとするロイドにアンジェリーナは追い討ちをかける。

「今回はソータさんに護って貰うから大丈夫！お仕事サボってたってママに言っちゃうよ？」

「…はあ、解ったよ。依頼書を見せてくれ。」

がつくりと肩を落とすロイドに宗太は依頼書を見せる。

「…大変、ですね。」

「ははは…。妹を頼むよ…。」

慰めの言葉をかける宗太に乾いた笑いで返すと、依頼書と一枚の紙を宗太に渡す。

「コレは…？」

「ん？ギルドで説明されなかったか？通行書だ。戻ってきた時に衛兵に返せば通行税が免除される。」

冒険者ギルドに登録すれば通行税は幾らか安くなるんだが、もし別の街に行くなら護衛依頼を受ければ通行税分安く済むぞ。尤も目的の街までの護衛依頼が見つかるかは運次第だがな。」

「そうなんですか…。」

宗太は登録した時の事を思い返すもそこまでは説明されていなかった。

というか書き忘れ…ゲフンゲフン。

「ありがとうございます。」

四人はそれぞれロイドに礼を言って門を潜り、イーヴルニスの森へと向かう。

「では、時間の節約のためにも魔術については歩きながら説明するとするかの。」

森までは徒歩で一時間以上かかってしまう。

無駄に時間を浪費する事も無いだろう。

宗太とアンジェリーナはルシフェラに頷いて答えると説明を待つ。

「全ての生物は多い少ないの差はあれど、身体の内には魔力を持っておる。

これは特殊な魔導具を使えば別じゃが、普通は目に見える事はない無色透明な力じゃ。

魔術とは、この魔力を己の適性を持つ属性に変化させ、呪文の詠唱と魔術陣の形成により指向性を持たせて世界に現象として顕現させる術の事を言う。

現象の規模が小さいモノなら少量の魔力で済むが、規模が大きくなるに従って世界の拒絶を回避する為に消費魔力も多くなっていくのじゃ。」

「世界の拒絶って存在を許さないってヤツか？それにしても呪文って全部覚えるのは大変そうだな…。それに魔術陣の形成って一々地面に描くのか？戦争に参加するなら描いてる内にやられちゃいそうだけど。」

流石に戦いの最中に長時間立ち止まっていたのは恰好の的になってしまふ。

ルシフェラはそんな宗太の質問に笑って答える。

「うむ、一説では世界のバランスを崩さぬ為の修正とも言われている。

呪文というのは魔力の指向性を個人が明確に意識するためのモノじゃ。

別にこの魔術にはこの呪文、と決められておる訳ではない。

魔術陣については、個人で行使する魔術は放出される魔力によって形成されるので地面に描く必要は無い。

但し、魔力不足で複数人でないと行使出来ない様な大規模魔術では、認識の齟齬をきたさぬように共通の呪文と物に描かれた陣を使うがの。

それも戦争では陣が描かれた厚手の布等を広げて行うのが普通じゃない。」

どうやら長時間立ち止まって描く必要は無いらしい。

それにしても、持ち運びの出来る魔術陣とは…。

「属性とは基本四属性が火・水・風・土、そして特殊二属性が光と闇じゃ。

特殊二属性は神族と魔族のみが持つ属性じゃな。

更に基本四属性の内、複数属性持ちの者が使える複合属性というものがある。

コレは火と風で雷、水と風で氷、火と土で金、水と土で木となる。

複合属性は魔力の消費量が基本属性より多い為、人間では余り使える者はおらんの。」

「属性って人によって数とか変わってくるんですか？」

質問したのはアンジェリーナだ。

ルシフェラは満足そうに頷くと答える。

「うむ、良い質問じゃ。属性は種族によって大体の傾向があるが、基本的には人それぞれじゃ。」

複数持つ者もおれば一つしかない者もある。

例えば、魔族でも儂は闇の他に基本四属性全てを持っておるし、リースは闇・火・水・風の四つ。

また闇と基本属性一つの計二つしか無い者もあるのじゃ。」

「傾向って言うのは？」

「魔族であれば皆闇属性を持つ。」

エルフであれば風、ドワーフならば土、獣人は比較的風が出やすいといった感じじゃの。」

人間と鬼人族、龍族はこれといった偏りは無いが、龍族は神龍と呼ばれる長以外は一つの属性しか持たぬ。

基本四属性の内大抵の者が一つの属性、才能のある者で二属性、三属性以上を持つ者は奇跡と言って良いの。」

三つ持つリースリットが奇跡なら四つのルシフェラは一体何なのだ

ろっ。

「持つてる属性以外は使えないんですか？パパもママも火を起こす時は赤い石の付いた棒を使った魔術でやってましたけど。」

宗太が考えを脱線させていると、アンジェリーナが質問する。

「属性が違う魔術も魔導具の補助があれば可能じゃ。しかし、普通よりも多くの魔力が必要になるため大魔術は難しくなる。ま、種火を起こす程度なら一般人でも可能じゃよ。…と、ここらで良いか。」

道も半ばに差し掛かった頃、ルシフェラが街道から外れて歩き出す。

宗太達もそれについて行く。

「何でこんな所に？」

「無いと思うが、街道近くでは人に見られる可能性もあるからの。さて、リース、城から判別の魔導具を持ってきてくれぬか。」

「畏まりました。」

街道からも程良く離れた場所で止まると、リースリットに指示を出す。

リースリットは一礼すると影に沈んで消えた。

「え、えっ！？どうなってるんですか！？」

シャドウ・ムービングを初めて見たアンジェリーナはかなり驚いている。

「そうか、アンジーは見るのは初めてじゃったの。あれは『シャドウ・ムービング』という閻属性の転位魔術じゃ。影から影へと移動する事が出来る。」

ルシフェラの説明にアンジェリーナはしきりに感心していた。

「お待たせしました。」

そんな話をしていると、リースリットが台座に乗った二つの水晶玉を持ってルシフェラの影から現れる。

「それは？」

「オヌシも入城時の審査で使った判別の魔導具の上位版といった所かの。右の玉が属性の判別、左の玉が魔力量の計測じゃ。それぞれ台座の水晶板に結果が表れる。」

見るとそれぞれの台座に縦三センチメートル、横六センチメートル程の薄い透明な板が付いている。

「ではソータから測るとするかの。左右の手のひらをそれぞれ乗せるが良い。」

宗太が興味深そうに眺めていると、ルシフェラに促された。

宗太は言われた通りに水晶玉に手を乗せる。

「属性が光・火・水・風・土。魔力量が…2800万じゃと!？」

水晶板を確認していたルシフェラが、信じられないものを見たといった風に驚愕の叫びを上げる。

宗太には驚きの理由が解らないのだが。

「…そ、それってそんなに凄いの？」

「先代の魔王様が約230万、同じく先代勇者が約250万と言われてましたから、早い話がバケモノですね。」

リースリットがさりとヒドい事を言ってきた。

「ルシフェラとリースはどれくらいなんだ？」

バケモノ呼ばわりされてへこんだ宗太が二人に訊ねる。

「……3500万じゃ。」

「……175万です。」

「……。。。」

宗太、ルシフェラ、リースリット三人の沈黙が場を支配した。

「…ええい、バケモノやらはどうでも良い！次はアンジーの測定じや！」

沈黙に耐えられなくなったルシフェラが叫ぶと、アンジェリーナに向き直る。

「は、はい！」

アンジェリーナが返事をして水晶に手を乗せる。

「…なんと。」

水晶板を確認したルシフェラが絶句する。

リースリットも目を見開き、口に両手を当てて驚きの表情を浮かべている。

「え、えっと…、もしかしてあたし魔術を使えないとか…ですか？」

そんな二人の様子を見たアンジェリーナが不安そうだ。

「…逆じゃ。属性が水、風、土の三属性、魔力量に至っては魔族やエルフに並ぶ52万。はつきり言ってコレは人間としては前代未聞じゃ。」

ルシフェラは信じられないといった風でなんとか口に出す。

「じゃ、じゃああたしも旅に出られるんですね？」

アンジェリーナはとても嬉しそうだ。

「うむ、これからどれだけ魔術を究められるかじゃが、先ず勝てる人間はおらなくなるじゃろうな。旅も問題なかるう。」

僅か十歳にして人間最強。

世の魔術師達が聞いたならそれこそ嫉妬に狂いそうだ。

アンジェリーナは上機嫌で今にも鼻歌を歌い出しそうな程ニコニコしている。

「それでは時間も良い事じゃし、続きは昼食を取ってからにするかの。」

ルシフェラの言葉でリースリットが昼食の準備を始める。

バスケットからシートを出して広げ、宗太達が座ると皿とコップを渡していく。

（食器まで持ってきてたのか…。）

用意が良いと言っか、流石リースリットと言っべきなのか。

昼食はサンドイッチとビンに入れられた果汁だった。

コップはこのための物だったのか。

魔獣退治の依頼と魔術の特訓の筈がまるでピクニックである。

「それで、この後はどうするんだ？」

サンドイッチを食べながら、宗太はこの後の予定について訊ねる。

「うむ、次は魔力の覚醒　つまりは知覚じゃ。魔力を体内に流し込み、純粋な魔力、属性変換された魔力の双方を覚えて貰う。」

ソータは儂が、アンジーはリースに頼むかの。アンジーの土属性だけはソータの後に儂がやろう。」

「畏まりました。」

「よ、宜しくお願いします!」

ルシフェラの決定にリースリットが頷き、アンジェリーナは姿勢を正してお辞儀する。

皆が食べ終わり、少し休憩をした後リースリットが後片付けをする。

いよいよ魔力知覚の訓練だ。

「この訓練は先ず、お互いの手のひら同士を合わせるように両手を組むんじゃ。」

宗太は自分の右手とルシフェラの左手を指を絡めるようにして組み、逆の手も同じようにする。

「それでは僕の右手から純粋な魔力を少量流すからの。オヌシは感覚を掴んだら同じように右手から僕に流し込むのじゃ。」

そう言つて右手から魔力を送るルシフェラ。

宗太は左手から身体の中に何かが流れて広がっていくのを感じた。

例えるなら水の中に注射器などで更に水を流し込んだ感覚だろうか。

「な、何これ!？」

宗太は今まで感じた事の無い奇妙な感覚に戸惑う。

「判ったかの？それが魔力じゃ。左手から広がった魔力の流れに合わせて体内の魔力も巡らせるようにせよ。」

言われた通りに体内に意識を集中する。

魔力の流れに合わせ、体内に沈滞していた魔力を動かそうとする。

すると最初は動いているのか怪しく思う程弱い流れだったものが、徐々に速くなっていくのが判った。

「おお、段々と速く…。」

「それが魔術を扱う初步の初步、魔力の循環じゃ。動かぬ魔力では体外に出す事は出来ぬからの。…では、儂が流した魔力と同量を右手から流し込んでみるが良い。」

言われた通りに右手から送り込む。

「多すぎるぞ、魔術で辺り一面を消し飛ばす気か！魔術の発動に魔力を流し込み過ぎれば思わぬ被害を及ぼす事にもなるのじゃぞ？」

そう言って宗太に魔力を戻すルシフェラ。

この魔力の制御というものの、想像以上に難しい。

体内を勢い良く流れる魔力からほんの少量の魔力だけを放出しなければならぬのだ。

ほんの一瞬だけ放出したつもりでもルシフェラに指示された量の倍

以上になってしまふ。

横を見るとアンジェリーナも苦戦しているようで、リースリットに注意されている。

「集中を切らすでない!」

「う、ごめん!」

ルシフェラに怒鳴られて意識を戻す。

見るとルシフェラは何時もの気楽な態度を微塵も窺わせない真剣な表情をしていた。

それだけ重要な事なのだろう、宗太も集中して行う事にする。

それから暫く、ルシフェラの指示を受けながら細かい魔力量の調整が出来るまでになると、漸く練習の終了を告げられた。

「…うむ、ここまで出来れば取り敢えずは良いだろう。魔力量の調整は終わりじゃ。」

「…はあー。」

宗太は大きく息を吐きへたり込んだ。

「但し、これ位は無意識でも出来るように今後も反復練習あるのみじゃぞ。」

魔力量が少な過ぎれば相手に有効なダメージは与えられぬし、魔術自体が発動せぬ事もある。

逆に多過ぎれば暴発や威力の高すぎで周囲にまで被害をだしてしまう虞おそれがあるからの。」

「が、頑張るよ…。」

魔力とは魔術毎に勝手に消費されるモノでは無いようだ。

失敗すると周囲にも被害が出てしまつとなればルシフェラが真剣だったのも納得出来る。

「では、次は属性の認識じゃ。儂が流し込んだ属性変換された魔力を認識したら、同量の魔力を変換して儂に流してみるが良い。先ずは火属性からじゃな。」

ルシフェラから魔力が流し込まれる。

すると宗太の内側で、まるで眠っていたモノが目覚めた様に何かが大きくなるのを感じた。

初めての感覚であるが、元から自分の中にあつたもののように自然と収まった。

「コレが火の属性…。」

宗太が感覚を掴んだのを見て取ったルシフェラが魔力を引き戻す。

「内側のその感覚を経由させるようにすると変換させられる。同じようにやってみるがよい。」

言われた通りに魔力を流し込む。

すると、今まで無色だった魔力が変化した気がする。

そのまま少量をルシフェラに送り込む。

「ふむ、大丈夫なようじゃの。そのまま魔力を掴んで引き戻すようにすれば自分の中に魔力を戻せるぞ。」

魔力を掴むとは中々抽象的な表現だ。

「うーん…、もっと分かり易い表現の仕方ってない？」

「魔力とは生物の身体に元より備わる機能のようなモノじゃからの。オヌシは手や指の動かし方を詳しく説明する事が出来るのかの？」

そう言われてしまつては返す言葉が無い。

黙つて戻しやすい感覚を掴むために色々と工夫をしてみる。

色々と試した結果、放出するのとは逆に掃除機のように吸い込むようにするのが一番しっくり来た。

「出来たようじゃの。今度は純粋な魔力の属性変換とは逆に火属性の魔力を経由させるようにすれば純粋な魔力に戻せる。」

言われた通りに属性変換の工程を巻き戻すように火属性の魔力を動かすと、無色の魔力に戻り体内の循環に戻っていった。

「魔力は体外に出て暫く放置すると霧散して消えてしまいが、今のうちに体内に戻す事も出来る。」

魔術陣を途中でキャンセルした時などで、魔力の無駄遣いをしたくない時などには有効じゃ。」

但し、魔術陣を完成させて発動させる段階まで行くと戻す事は出来ぬのじゃ。」

その場合は素直に発動させるか、魔術陣の構成を破棄して魔力を霧散させるしかない。」

気をつけるが良い。」

「体内から無くなった分はどうしたら戻るんだ？」

「減った魔力は先の訓練のように純粋な魔力を他人から分けて貰うか、大気に存在する魔素^{マナ}を体内に取り込む事で自然と回復するのじゃ。」

但し、一度に大量の魔素を魔力に変換する事は普通出来ぬ。」

危険域にまで魔力が減るとそれ以上使えなくなるので魔力切れで死ぬ事は無いが、身体能力を十全に発揮出来なくなるから注意が必要じゃ。」

魔力は使っても自然に回復するのか。」

宗太が頷くと次は水属性じゃの、と言って認識の特訓を続ける。」

その後も風、土と続け、最後の光属性の認識の番になる。

「光属性は基本四属性とは違い、現在この世界で持っているのは才又シだけじゃ。その為に認識には闇属性を使う。今までの認識と違い、反発し押し返そうとする感覚に集中するが良い。」

ルシフェラの手のひらから魔力の塊が流れてくる。

しかし、先の四属性と違い僅かな不快感を感じる。

「う…、何か変なカンジ…。」

「それに反発しておるのが光属性じゃ。」

そう言ってルシフェラが魔力を引き戻す。

代わりに宗太が光属性に変換をし、ルシフェラに流し込んだ。

「…うむ、確かに光属性じゃの。これで属性の認識は終了じゃ。」

宗太が魔力を引き戻すと、ルシフェラは少し前に終わっていたアンジェリーナの元へ行く。

最後の土属性の認識をするのだろう。

暫く待つとアンジェリーナも全ての属性の認識を終えたようだ。

「では、最後に魔術の発動についてじゃ。」

アンジェリーナが宗太の側まで来ると、ルシフェラは二人に向き直る。

「魔術の発動には呪文の詠唱と魔術陣の展開が必要じゃという事は先にも言ったの。」

詠唱で必要なのは主に属性、形状、対象、そして術の名称じゃ。

これらを口にする事で、目的の術の内容をより明確にする事になる。また、詠唱文を長くする事で詠唱時間も掛かるがより強力にする事も出来る。

そして魔術陣。コレは内部に詠唱内容の他、範囲や魔力制御用の術式等を書き込み発動を安定させる目的があるのじゃ。

宗太と、おそらくアンジーも注意されたであろう魔術の暴発とは、基本的に制御術式の許容量を超えた魔力により魔術が制御不能となり、意図せぬ結果をもたらす事を言う。」

だからこそルシフェラはあそこまで魔力量の調整訓練にこだわったのだろつ。

そこでルシフェラが「朔夜」と言うと、ルシフェラの影が伸び上がり宗太を襲った時に持っていた漆黒の大剣が現れる。

アンジェリーナは突然の出来事に目を丸くしていた。

「詠唱は魔術の発動に媒体となる魔導具を仲介する事で短縮する事が出来る。

この魔剣月夜のように高位の媒体ともなれば詠唱自体の破棄も可能じゃ。

少しでも速い詠唱を求められる戦闘時には有利に事を運べる様になるのじゃが、普通の詠唱より魔力の消費が多くなったり術の完成度が下がる場合もあるのが難点じゃの。

では、リース。」

ルシフェラが呼ぶと、意を汲んだリースリットが少し離れた場所まで移動する。

「では実演じゃ。

ストック

貯留、燃え盛る炎よ

数多の火球となりて

かの者を焼き尽くせ！

「ファイヤー・ボール
『火炎球弾』！」

ルシフェラが右手を前に翳し呪文を唱え出す。

すると、ルシフェラの右手から溢れ出した紅い光が細い紐のように伸び、円の内部に幾何学模様と何かの文字が書き込まれた魔術陣になった。

魔術陣は詠唱後も魔術を発動させることなく、ルシフェラの手のひらの先に浮かび上がったままだ。

「詠唱は判ったけどさ、何で魔術は発動しないままなの？」

宗太はその事を不思議に思い質問する。

「コレは遅延呪文^{ディレイ・スベル}という技術じゃ。

詳しい説明は後程しようかのう。

属性は詠唱の他、魔術陣の色でも判別する事が出来るのじゃ。

例えばこの紅い光ならば火、蒼ならば水、緑なら風、茶なら土、薄紫なら雷、蒼白なら氷、薄茶なら木、黄色なら金、そして白が光で黒が闇となっておる。

この魔術陣は、アンジーは読めぬじやろうが内部の文字が制御術式や火炎球の数の指定等になっておるの。」

「…すまん、俺も読めないんだけど。」

宗太がおずおずと手を挙げる。

「…はあ!？」

それを聞いたルシフェラが素っ頓狂な声を上げた。

「オヌシは阿呆か？勇者は召喚後にキチンと意思の疎通をはかれる様、言語や文字を理解出来る様になる術式も組み込まれておる筈じゃぞ!？」

「…そんな事言われてもな。確かに言葉は解るけど、文字は全然。これまでは文字が解らなくても何とかなってたし…。」

阿呆呼ばわりされてちよつとムツとする宗太。

いきなり見ず知らずの文字なんか読める筈もない。

「いや、待て…。そうか、そう言えばオヌシの召喚は完全では無かったんじゃないの。恐らく召喚場所がズレた他に言語に関する術式にも異常が出たんじゃないろう。コレは他にも不備があるかも知れん

う。」

少し考える仕草を取ると、召喚の失敗に関して思い出したようで推測を述べる。

「…まずは魔術の説明を終わらせようかの。
魔術はこの様に呪文と体内で属性変換させた魔力で魔術陣を描く事で完成する。

そうすれば後は顕現させるだけじゃ。

発動。^{テイク}」

ルシフェラの宣言と共に紅い魔術陣が一際輝くと、拳大の火球が五つ現れリースリットに向かって飛んで行く。

それに対しリースリットも何事か呟くと、前方に黒い魔術陣が展開し火球は見えない障壁に防がれ散ってしまう。

火球を防ぎきったリースリットは宗太達の元まで戻って来た。

「先の術は展開後発動せずに残っておったが、普通は詠唱と魔術陣双方の完成と共に発動するのじゃ。」

ルシフェラが発動のタイミングについて補足説明をする。

タイミングをズラすのが遅延呪文という事なのだろうか。

「アンジーは武器を持っておらんのじゃったな？」

「は、はい。」

ルシフェラの確認に頷いて答えるアンジェリーナ。

「…ふむ、ソータも魔術文字は読めんようじゃしのうち。暫く待っておれ。」

そう言つて影に沈んで消えるルシフェラ。

宗太とアンジェリーナはリースリットに手伝つて貰い、魔力調整の練習をして時間を潰す事にする。

「おお、魔力量調整の特訓か。感心感心。」

暫くそうしていると、ルシフェラはその手に白と黒、二冊の本を持つて戻ってきた。

二冊共、厚手の表紙には紅、蒼、緑、茶の煌めく糸のようなモノで豪華な装丁が施されている。

「それは？」

「コレは遙かな昔、それぞれ神族と魔族が作った最高位の魔導書じゃ。」

この黒い魔導書が『メフィストの魔導書』。

レイティア・メフィストと言う魔族が作った魔導書で、儂が魔剣月夜を継承する以前に使っておった物じゃ。

白い魔導書は残念ながら今まで契約出来た者がおらんなのでな、詳細は不明なのじゃ。」

然し、どちらも制作者の意識を持つと言われており、契約さえ出来れば魔術の補助をしてくれる筈じゃ。」

そう言つて宗太に白い魔導書、アンジェリーナに黒い魔導書を手渡すルシフェラ。

「契約つてどうすれば良いんだ？」

「その魔導書に純粹な魔力と自身の持つ全ての基本及び特殊属性に変換した魔力を流し込めば良い筈じゃ。」

宗太は教えられた通りに魔力を流し込む。

火、水、風、土、そして、光。

次の瞬間、宗太は真つ白な空間に立っていた。

前後左右、上下すらも一面真つ白。

平衡感覚を失ってしまいそんな錯覚を感じる。

「アナタが私を呼んだの？」

宗太が何とかフラつかないように頑張っていると、突如背後から声を掛けられた。

そこに立っていたのは足首にまで届く白い髪に金色の瞳、色白の肌を白いドレスで包み背からはこれまた純白の天使のような羽を生やした美少女だった。

歳は16くらいだろうか？

リースリットとそう変わらないように見える。

身長は歳相応だと思うが、ある一点は残念なサイズだった。

「キミは…?」

「私はリリス、リリス・ホワイトグレイル。この魔導書の意識だよ。そう言うキミは?」

白い少女　リリスは手を後ろで組んでどこか楽しそうに名乗る。

「あ、俺はソウタ・アカツキ。よろしく。」

「うん、よろしく!ソータ、か。変わった名前だねー。キミって人間でしょ?光属性とスゴい魔力量だからビックリしちゃった。」

リリスは興味津々と言った様子だ。

宗太はどう答えたものかと一瞬悩んだが、正直に教える事にする。

「実は俺、別の世界からコッチの世界の人間に勇者として召喚されたいなんだよね。何でも魔族を倒す為に、居なくなった神族の代わりとしてらしいんだけど。」

「人間が魔族を？何でまたそんな事を。」

リリスが不思議そうに聞き返す。

「ルシフェラが言うには あ、ルシフェラって言うのは俺に魔術を教えて白い魔導書を渡してくれた娘なんだけど、国の領土を広げる為とか言ってた。」

「そうなんだ。全く、弱い力でも生き抜く為の知識が欲望にすり替わるなんて人間も仕様がないわね…。あ、それとこの白い魔導書は『ホワイトグレイルの魔導書』って言うのよ。因みに私が制作者ね。」

リリスが親切に魔導書の名前を教えてくれた。

「なる程、リリス・ホワイトグレイルだから『ホワイトグレイルの魔導書』なのか…。って、ええ！？製作者って遥か昔の神族だって…。」

「そ、私はリリスの意識だもん。私の本体は死んじやってるのよ。それにしても、キミが光属性を持つてる理由は判ったけど、キミに加護を与えてる筈の神様の力を考えるとちよっと加護が弱い気がするのよね。」

リリスが小首を傾げながら考える素振りをする。

「加護を与える神様ってそんなの判るの？」

「うん、まあ大体は。パスが完全には通ってないのかな。何か心当たりとかある？」

「えっと、何か召喚に失敗して文字の知識とか召喚場所に関する術式に異常があつたらしい。ルシフェラの話だと他にも問題があるかもしれないって事だけど…。」

リリスの質問に先のルシフェラの推測を教える。

「そつかそつか、なる程ね。召喚魔術の術式がお粗末だったか発動するときに無茶をやらかしたのかしらね。」

リリスは呆れ顔だ。

最高位の魔導書を製作するほど魔術に優れているリリースとしては、そんな失敗をする事自体が有り得ないのだろう。

「それで、文字が解らないんだっけ？魔術を使う為に私と契約したいのかな？」

「うん、俺と契約出来ないか？」

宗太としては契約をして貰いたい。

しかし、今まで使えた人が居ないというなら拒否される可能性の方がのだろう。

断られたら拝み倒しても契約をお願いするつもりである。

「うん、良いよ。」

「そこを何とか！って、良いの！？」

まさかの即答に若干拍子抜けした宗太だった。

いや、嬉しいのだが。

「うん、キミと居ると楽しそうだし。それに神様の加護が不完全なまま放り出すのも可哀想だしね。」

そう言つて宗太の目の前まで来ると、宗太の顔を両手で挟み込む。

そして若干前屈みになつた宗太の顔にリリースも顔を近付け 唇同士を触れさせた。

「……ッ!？」

一瞬頭が真っ白になつた宗太だったが、唇に触れる柔らかな感触に意識が戻ると見る見るうちに顔が赤くなつて行く。

何を隠そう、宗太にとって生まれて初めてのキスだったのである。

「な、な、な……!？」

「ふふー、ご馳走様!これで契約完了、私とのパスも繋がつたし魔術文字も理解出来る筈だよ。それじゃあまた後でね!」

困惑する宗太を余所に、リリスがそれだけを言つと急に浮上する感覚に包まれる。

次の瞬間には元の草原に立っていた。

「…あれ？」

「おお、ソータ。どうじゃ、契約は出来たか？…って、顔を赤くしてどうしたのじゃ？」

ルシフェラの『契約』という言葉に先ほどの事を思い出し赤くなる宗太。

ルシフェラは怪訝そうな顔で宗太を見る。

「あ、ああ。契約は出来たよ。『ホワイトグレイルの魔導書』って言うらしい。」

「…そうか、それなら良い。アンジーも無事契約出来たようじゃしの。」

アンジェリーナの方を見ると嬉しそうに魔導書を抱えていた。

「では、最後に遅延呪文ディレイ・スベルの説明をしようかの。

遅延呪文とは魔術を留める為と発動させる為の鍵キとなる単語を設定し、任意のタイミングで魔術の発動を遅らせる事が出来る技術じゃ。魔術自体を体内に戻し、一単語での即時展開、発動をする事も出来る。

使いこなせれば戦術の幅が一気に広がるのじゃ。

しかし問題もあってのう、意識から外すと即座に発動してしまうし、体内に戻した状態で暴発させると大惨事じゃ。」

サラリと怖い事を言うルシフェラ。

便利な技術ではあるが良いことばかりでは無いという事か。

アンジェリーナも顔を蒼くしている。

「まあ、ソータとアンジーには魔導書がある。手伝って貰いながら習得してみるが良いじゃろ。」

ルシフェラはそう言って笑うと森に向かって歩き出す。

次は魔獣の討伐依頼だ。

宗太達も後に続いて歩き出した。

第7話 魔術の説明と魔導書と。ですよ！（後書き）

やっちまった…orz

通行税の話を3話で書き忘れていたのに気付いて急遽入れました。

ロイドとアンジェリーナが兄妹だっていうのは元からの設定ですよ？
…ホントだよ？

今回は魔術の説明でしたが、投稿が遅くなってごめんなさい。
設定をまとめるのにエライ時間が掛かってしまいました。

説明漏れがあつたらその都度入れて行きます…orz

ところで今更なのですが、ルビはちゃんと振れてるんでしょうか？
携帯だと確認出来ないのでPCの方、教えて頂けると助かります。

では次回は主要四キャラクターの紹介になります。

キャラクター紹介その1

アカツキ ソウタ
暁 宗太

年齢： 17

身長： 178 cm

体重： 62 kg

種族： 人間

魔力属性： 光（+基本四属性）

魔力量： 28000000

武器： 聖煌輝剣アカツキ、ホワイトグレイルの魔導書

黒髪黒眼、顔は中の上といった所。要は平凡。

性格は周囲や状況に流され易い。

しかし、真面目とは言い難いがやる事はちゃんとこなす。

召喚の失敗により、加護を与えている神とのパスが中途半端に繋がっている状態であり、聖剣を完全な状態で創り出せない他、魔力も本来より少ない。

聖剣とは光属性を持つ者が望む事で現れる、現在使用可能とされる唯一の創造魔法に分類されるモノ。そのまま装備し続けたり、必要の無い時は消す事も可能。
加護を受ける神の違いか、創造者によって名前、形状、威力も変わってくる。

アカツキは長めの日本刀の様な形状。

本来最高位の魔術媒体となるが、宗太の力が不完全なためそこまでの能力は無い。

ホワイトグレイルの魔導書は遥か昔の神族、リリス・ホワイトグレ

イルが創造魔法で生み出した魔導書で、内に創造者の意識を持つ。
魔術の高位媒体及びリリスの持つ豊富な魔術知識による発動補助や、
新たな魔術の情報を魔導書内に保存する『自動書記』オート・セクレタリなどの機能を持つ。

リリスはぺたん娘。

ルシフェラ・エメイン・レスト・ローディアス

年齢：128

身長：142cm

体重：ヒミツ

種族：魔族

魔力属性：闇（+基本四属性）

魔力量：35000000

武器：魔剣ツキヨ月夜

銀髪紅眼、髪は左右後ろで結び縦ロール。

見た目12歳程で残念なお子様体型。

遙か昔の魔族の特徴である煌めく銀髪と真紅の瞳、高い魔力量と五属性を使いこなすことから、一部の考古学者等からは「先祖返り」

「月の姫君」と呼ばれている。

見た目に反して知識は豊富である。

気が強く、面白い事が好き。

気を許した存在には優しくするが、興味の無い存在にはトコトン無関心、気に入らない存在には残虐な一面を見せる等性格は割とハッキリしている。

今一番のお気に入りには宗太。

冒険者ギルドではルシフェラ・レストールという名前で登録している。

魔剣月夜は魔王剣とも呼ばれ、歴代の魔王に引き継がれる武器。神代の昔、一人の闇の神が創造したとされる。

最高位の魔術媒体でもあり、詠唱を完全に破棄して魔術を発動させる事が出来る。

持ち主の力量で形状を変化させる事が出来るが、今まで使いこなせた者はルシフェラ以外居ない。

これも歴代最強と言われる理由である。

魔剣月夜・朔夜 サクヤ

月夜の基本形、漆黒の刀身を持つ両手剣。

超重量の破壊力を持ち、並の防御力なら防御ごと叩き潰される。

歴代の魔王はこの形状しか使いこなせなかった為、これを指して魔王剣と呼ばれた。

魔剣月夜・織月 センゲツ

漆黒の大鎌。

鎌ならではの特殊な攻撃に加え、間合いを取った相手に対し斬撃を飛ばし攻撃する事も出来る。

ルシフェラは対人戦闘では比較的コレを好むようである。

魔剣月夜・破月 ハゲツ

魔剣月夜の遠距離攻撃形態。

魔剣の形状としては一種異様な弓形態。

構えて弦を引くと魔力による矢が形成され、それを撃ち出す。

魔力、魔術を打ち出す魔弓の為、射程距離は通常の弓矢の比では無いが、やはり視認出来ない距離では命中率は低い。しかし、ルシフェラは索敵魔術と組み合わせる事で命中率の問題を解消している。

無詠唱で魔法陣を展開し、範囲魔術を矢として放つ事も可能。
はずやり 弭槍となっており、咄嗟の近接戦闘にも対応する事が出来る。

魔剣月夜・望月・不知夜月 モチツキ イザヨイツキ

魔剣月夜の中距離攻撃形態。

望月は直径20cm程の円月輪を最大5個生み出す。
チャクラム

投擲すると直進し、同じ軌道で戻ってくる。若干ならば曲線を描かせる事も可。

望月周囲の状況が脳に直接届けられる 感覚を共有する自身の分身のような存在とも言うべきもので、周囲にバラ撒けば死角はほぼ無くなると言って良い。不知夜月は望月の派生技とも言うべきか。

望月を投擲した後、本来の軌道を見捨てた遠隔操作が可能で、縦横無尽に相手を切り刻む。

望月の特性上背後への攻撃も可能だが、自身を含め最大6つの情報を処理する事になるためにかなりの情報処理能力が要求される。

魔剣月夜・暁月 ギョウゲツ

魔剣月夜の最終形態。

白銀の刃を持つ。

アカツキに酷似した形状だが能力、アカツキとの関連など全て不明。何か条件があるのかルシフェラも解放出来ない唯一の形態である。

リースリット・ノエル

年齢：114

身長：157

体重：ヒミツ

種族：魔族

魔力属性：闇（+火、水、風）

魔力量：1750000

武器：魔剣 シッブウ 疾風・迅雷 ジンライ、風雪の腕輪

薄紫の髪と瞳を持つルシフェラの侍女。
自由奔放なルシフェラに振り回される苦勞人。
見た目16歳程だがルシフェラより年下（現在の魔族としてはこれが普通）。

生まれつき魔力量が多く、歴代魔王並みにある。
物静かで落ち着いた雰囲気ではあるが、時たまさり気なくツッコミを入れる事も。

武器は遙か昔魔族とドワーフが共同で鍛え上げた魔剣で、対の双剣。
疾風は風属性、迅雷は火と風の複合属性である雷属性及び火属性の魔術媒体となる。
切れ味自体も良い名剣。

風雪の腕輪は水と風の複合属性である氷属性及び水属性の魔術媒体となる。普段は侍女服の袖で隠れて見えない。

アンジェリーナ・メナード

年齢：10

身長：135

体重：ヒミツ

種族：人間

魔力属性：水、風、土

魔力量：520000

武器：メフィストの魔導書

宗太の泊まった宿屋の娘。

茶髪に茶色の瞳で、肩甲骨の辺りまで伸ばした髪はその日の気分で

髪型を変える。

宗太に一目惚れし、何かと世話を焼いてくれる。

人間でありながら水、風、土の三属性と魔族、エルフに並ぶ驚異的な魔力量を持つが、今まで本人に魔術師を目指す気が無く調べなかった為に誰も才能に気付かなかった。

才能で言えば伝説の魔術師として歴史に名を残すのが確実なレベルである。

宗太と共にルシフェラとリースリットに師事し、魔術を学ぶ。

メフィストの魔導書は遥か昔の魔族、レイティア・メフィストが創造魔法で生み出した魔導書で、内に創造者の意識を持つ。

魔術の高位媒体及びレイティアの持つ豊富な魔術知識による発動補助や、新たな魔術の情報を魔導書内に保存する『自動書記』オート・セクレタリなどの機能を持つ。

キャラクター紹介その1（後書き）

現時点での主要四キャラクターの紹介です。

設定としては主人公の宗太よりルシフェラの方が早く出来ていたという…。

考え無しで書いてるのでコレから設定が増えたりするかもです。

聖剣アカツキ、魔剣暁月、滅んだ神族など色々伏線張ってみてると果たして回収出来るのだろうか…。

要望とかあれば次のキャラクター紹介の時にリリースとか入れようかなと考えております。

それではまた次回の更新で。

第8話 勇者召喚魔術の秘密？と犬っころ退治じゃ！

「魔術の基礎は教えたことじゃし、犬っころの退治には魔術を使ってみてはどうじゃ？」

森に向かって草原を歩きながら、ルシフェラがそう提案してくる。

「で、でもあたしはまだ魔術陣を描くなんて出来ませんよ？」

そんな提案にアンジェリーナが不安そうに返す。

確かに宗太達は魔術陣の細かい構成などは教えて貰っていないのだ。

いきなり実戦というのは酷と言えるだろう。

口には出さないが宗太も内心では不安を感じていた。

しかし、ルシフェラはそんな二人の不安も一笑に付す。

「オヌシ等…、一体何のための意識持ちの魔導書じゃと思っとるんじゃ？元は今の魔族では束になっても適わぬ最高位の魔術師じゃぞ。

呪文の詠唱から魔術陣の展開まで指示を出せば色々と補助してくれるじゃろっ。」

話し方がフレンドリー過ぎて流石にそこまで凄い娘だとは思わなかった。

『その娘の言つとおりだよ。』

「うわっ…!？」

「ソータさん？つて、え、レイティアさん!？」

いきなりリリスの声が聞こえて驚いた宗太。

アンジェリーナにもレイティアの声が聞こえたのか驚いた顔をしている。

『あー、今私とパスが繋がってるのはソータだけだから、声に出すと危ない人だよ？他の人に私の声聞こえないし。心の中で私に語り掛ければ会話出来るから。』

宗太は言われた通りに心の中での会話を試みる。

(…えっと、コレで良いのか?)

『うん、良好良好。良く聞こえるよ。』

頭の中でリリスを思い浮かべながら語り掛けると、どうやら通じた様でそんな答えが返ってくる。

(それで、ルシフェラの言うとおりってのは?てか、リリスには皆の声が聞こえるんだな。)

『細かい魔術の設定を覚えてくれればサポートするよっていう事。意識体として音を聴いたり周囲を見たりとかは出来るんだよ。でも意識体の姿は基本的に人に見えないし、声はパスが通じた人にしか聴こえないの。実体化出来れば別なんだけど。』

リリスの溜め息が聞こえる。

リリスとは契約で意識同士が通じたから、頭の中で会話する事が出来るのだろっ。

それよりも気になる事が…。

（実体化って…、そんな事出来るの？）

『召喚魔術って元々精神体を呼び寄せて魔力で肉体を持たせ使役する術だからね。私用に改良すれば可能だと思う。本来は直ぐに元の場所に戻るんだけど、キミを召喚した術式は言わばその亜種だね。』

（へえ、便利なもんだな。どれくらい実体化出来るんだ？てか、直ぐに戻るって前の勇者も戻れなかったみたいだけど。）

本来の召喚術が元の場所に戻れるなら、亜種とはいえ戻る方法もあるのかも知れない。

しかし、前回の勇者がルシフェラの父親を倒し、その後即位したルシフェラに倒されたという事から望みは薄いかもという不安もある。

『精神体を実体化させる場合は送られる魔力が尽きるまでだよ。んー…、肉体を持って召喚したっていう事は、キミの場合は魔力の制約を無くす為何だろうけど…。…前の勇者が死んだ後、死体がどうなったかルシフェラちゃんに聞いてみて貰える？』

リリスは考え込むように一拍程間を空けてからそう切り出した。

（分かった。）

宗太はリリスに言われた通り、ルシフェラに質問してみる。

「なあ、ルシフェラ。お前に倒された前回の勇者ってその後どうなつたんだ？」

「む？何じゃ唐突に。」

リリスの声が聴こえて無いという事を失念していた。

ルシフェラは急に話題を振られて小首を傾げている。

「いや、リリスが勇者の死体がどうなったのか、ルシフェラに聞いてみてくれるって。」

「リリス？…ああ、オヌシの魔導書の意識か。先代勇者の遺体なら宣戦布告の使者を送ると共に送り返してやったぞ。」

宗太が言い直すと、得心がいったという風に答えてくれる。

『…………。』

（リリス？）

黙り込むリリスにどうしたのかと声を掛けるが、何事か考え込んでいるようで返事はない。

「しかし、何故今さら先代勇者の死体なのじゃ？」

すると、今度はルシフェラから質問をしてきた。

「ん？ああ、ちょっとリリスに召喚魔術について教えて貰っててね。本来は魔力が切れたら直ぐに元の場所に戻るらしくて…。」

「何じゃと？しかし、歴代の勇者は死後この国で国葬されておるそうじゃぞ。じゃから先代の遺体も送り返したのじゃ。」

深夜の寝込みを襲撃し宿の部屋を破壊するなどぶっ飛んだ行動をしたかと思えば、宗太やアンジェリーナに対して面倒見が良かったり、自分の命を狙った勇者の遺体をわざわざ送り返してあげたりとか今ールシフェラの性格が掴みきれない宗太だった。

『…死体は消えなかったのね？』

「え？」

「何じゃ、何か問題でもあるのか？」

いきなりリリースに話し掛けられ声が出てしまった。

ルシフェラは自分が遺体を送り返した事が信じられないと言われた様に感じたか、若干不機嫌そうになる。

宗太はルシフェラの不機嫌オーラを敏感に察知し弁明を試みる。

「あ、いや…、問題じゃなくてだな。リリースが『死体は消えなかったのか？』って質問してきて…。」

「…クククツ、そんなに必死になって弁明する事も無いじやろくに遺体は消えなかったぞ。リリースも勇者が死んだのを確認しておる。のう？」

そんな宗太の態度が面白かったのか、笑いながら答えるとリリースリ

ットに確認をする。

「はい、念のため脈や心音、呼吸、魔力等も確認しましたのである
場での死は確実かと。」

何という徹底振りだろうか。

確かに「実は生きてました」で再度狙われるのも嫌だろうが。

「何で魔力まで確認するんだ？」

「あらゆる生物には魔力があるとは教えたじやろう？しかし、死ぬ
とその体内の魔力が大気中の魔素^{マナ}へと溶けて消える。つまり死体に
魔力は残らぬ故、死亡確認が必要な時には魔力を視るのじゃ。戦場
の魔素濃度は凄まじいぞ？」

『…ルシフェラちゃんの話でハッキリした。ソータ…、多分キミは
元の世界に戻れない。』

リリスはルシフェラから聞いた話と自分の知っている魔術の知識か
らの推測を述べる。

「元の世界に戻れないって何で？」

宗太はルシフェラも話の内容が解るように声に出して会話することにした。

ルシフェラも宗太の意図を理解したのか、黙って宗太を見上げている。

何故か魔力制御の訓練と同じくらい真剣な顔をしているが。

「別世界から召喚された対象の場合、魔力が切れればこの世界から拒絶されて元の世界に返されるの。元の世界と細い糸のようなモノで繋がってるからね。」

「召喚も魔力で世界の拒絶を回避してるのか…。元の世界と繋がってる糸のようなモノってのは？」

魔力が足りなくて魔術が発動しないのと同じということか。

「糸って言うのは物の例え。」

精神、魂というものはその「世界」の一部だから、どれだけ引き離しても幾らでも伸びて離れない。

だから別の世界に喚ばれても、その世界に拒絶されるんだよ。

でもソータの場合は別。

最初は肉体のせいで魔力が尽きないからだと思ったけど、キミは元の世界との繋がり自体を断ち切られてる。』

「元の世界との繋がりか断ち切られてる？魂と世界との繋がりか？それでも伸びて離れないって言ったじゃないか。」

言葉の矛盾に混乱する宗太。

ルシフェラは宗太の少ない言葉からも意味を察したようで、驚愕に目を見開き息を呑んだ。

『系はハサミで切れるでしょ？多分ソータの繋がりか召喚魔術で切られちゃったの。だから先代さんは死んで魔力が尽きても消えなかった。そして、どこの世界とも繋がりか無い、「勇者」という存在が現れた事でこの世界が内に取り込んだ。神の加護も、この世界に属する神族以外で光属性を持つ存在だからだと思う。』

宗太は僅かだが荒くなった語気で、リリスが怒りを押し殺しているように感じた。

「…なる程、戻れないってのは召喚の効果で元の世界からこの世界に繋がりか移ったからって事か。」

宗太としてはこの世界に来てからの慌ただしい毎日が幸いしてか、あまり衝撃を受けなかったのだが。

「…何じゃそれは。自らの欲望を満たす道具として喚んだばかりか、役目を果たして尚縛り付けるのか…！」

代わりにルシフェラが怒りを吐き出すように呟く。

ルシフェラと、盗み聴きしていたのかリースリットが凄まじい怒気と魔力を発している。

いつの間にか二人共角と羽が出ていて、宗太が怒りを向けられている訳でも無いのに怖じ気を感じる。

唯一意味が解っていないかったアンジェリーナも、レイティアから教えて貰ったのだろう。

顔を真っ青に染め、悲痛な面持ちで宗太を見ていた。

宗太の事で他の仲間が怒ってくれるのは、嬉しいような困ったような複雑な気分だった。

「リース、城に戻って命令。全軍を以てこの国を滅ぼすべし。」

「畏まりま…。」

「ちょっと待ったあああああ！！！！」

いきなり大事になって焦る宗太だった。

「何じゃ、大声なんぞ出して。」

「いや、怒ってくれるのは嬉しいがいきなり滅亡はやり過ぎだろ！」

やっぱりルシフェラは魔王だったと改めて認識させられた。

何だかんだで勇者の仕事をしてる事になるのだろうか？

国の滅亡回避的な意味で。

「むう…、当事者のオヌシがそう言つのなら仕方が無いの。リース、命令の撤回じゃ。」

「畏まりました。」

ルシフェラが命令を取り下げるとリースリットもそれに応じるが、二人共未だ怒りが覚めやらぬといった感じだ。

怒気と魔力こそは収めているが、険しい顔で角や羽等は出たままだった。

「しかし、滅ぼさぬならばどうするのじゃ？オヌシが死んだ後、新たな勇者が召喚され続ける事になるのじゃぞ？」

ルシフェラの懸念も当然だろう。

宗太は魔族に敵愾心など持つてはいない為、今は勇者の脅威を考えなくても済む。

しかし、宗太は不老不死では無い。

いずれは死に、その後はまた勇者から魔族や国を護る為に戦う日々が訪れるのだろう。

それは宗太も望む所では無い。

「んー、まあそっちの方はおいおい考えるとして、取り敢えずは依頼の方を片付けよう。」

今考えても直ぐに良い案が出る訳でも無いだろう。

ならば今はやる事やって、その後でゆっくりと考えれば良い。

「…うむ、それもそうじゃな。急いで事を仕損じるといつのも詮無き事か。」

ルシフェラはやれやれといった感じで苦笑する。

「それでは犬っころ退治でもするのでしょうか。」

「マッド・ハウンドだっけ？どの辺りに居るのかね。」

宗太は森の中を注意深く見るも、木々に遮られて姿は見えない。

先ほどのルシフェラとリースリットの怒気と魔力に当てられて逃げられてなければ良いのだが。

当たるを幸いに森の中を探す訳にも行かないだろう。

「少しばかり待っておれ…。

仄暗き闇よ

光に反する影達よ

何人も逃れ得ぬ宿命^{さだめ}で以て

逃げ惑う贅^{シヤドウ・サーチ}を我の手に

『影の探索』」

ルシフェラが呪文を詠唱すると、黒い魔術陣が弾ける。

しかし、何も起こらなかった。

「…何をしたんだ？」

「一定範囲内の影から対象を探し出す。闇の探索魔術の一つじゃ。北西に一キロメートル程の位置に目標と思われる影が十あった。では行くとするかの。」

簡単な説明をして歩き出すルシフェラに皆で付いて行く。

（闇属性って便利なモンだなー…。）

転移やら探索やらと魔術の多様性に感心させられる。

『一応他の属性でも探索は出来るよ？』

（え、そうなの？）

どうやら無意識にリリースと繋げて考えていたようだ。

『うん、どの属性も要は使いようなんだよね。特に光属性なら闇と表裏一体だし、大抵同じような事出来るよ。』

光というのが想像し難かったのだが、まさかそんな便利属性だとは思わなかった。

（それじゃあ、影から剣を取り出したりとかも？）

『出来る出来る。まあ光属性の場合は影じゃないけどね。』

何てチート属性と思いながらも内心ガッツポーズをする宗太だった。

物を仕舞えるなら荷物の量を考えなくて済む。

旅で大荷物は大変なので助かる能力だ。

「…ソータよ、何を浮かれておるのは知らんが、そろそろ戦う準備をせんか。近いぞ。」

ルシフェラに注意され我に返ると、何時でも戦えるように意識を集中する。

すると、向こうもコチラに気付いたのだろう。

前方から遠吠えが幾つも聞こえて来た。

「ククッ、犬っころが無駄にやる気を出しよる。」

ルシフェラが口の端を歪めて魔剣を影から取り出すと、宗太達の後ろに下がる。

リースリットも双剣を抜き同じく下がると、前方から草や枯れ葉を踏みしめながら疾駆する大型犬のような魔獣が姿を現す。

大きさは宗太と同じ程か。

黒い毛並みに赤い眼、牙の生え揃った口は開きヨダレを垂らしている。

魔獣達は宗太達を認めると、取り囲むように散開し周り込む。

「背後の奴らは任せて存分に練習するが良い。」

ルシフェラはそう言い放ち、一瞬で魔獣との距離を詰めると大剣で頭から叩き斬る。

「
ウインド・アーマー
『風鎧』」

リースリットも一言呟くと、身体の周りに風の鎧を纏わせて魔獣に切りかかる。

魔獣も反応出来ない速さで翻弄し、双剣で切り裂くリースリット。

返り血は全て風の鎧に防がれ、魔獣は断末魔の悲鳴を上げて倒れ伏した。

「すげえ…。」

『見とれてる場合じゃ無いでしょ。』

「あ、ああ、ごめん。」

リリスに注意されて意識を魔獣に戻すと、リリスに使う魔術を教える魔力を変換させる。

「猛き炎

紅蓮の業火

全てを焼く槍となりて

かの者を貫け！

フレイム・ランス
『紅蓮の剛槍』！』

宗太の詠唱と共に、リリスが魔術陣を展開する。

すると、紅い魔術陣から燃え盛る炎の槍が出現し一体の魔獣に突き刺さる。

魔獣は体内を焼く業火に暴れ回るが、直ぐに動きを止めると肉の焼ける匂いを放ちながら地に伏した。

アンジェリーナが気になり横を見ると、三体の魔獣が土に足を埋もれさせ、ルシフェラに止めをさされていた。

おそらく土の魔術なのだろう。

魔獣でも止めをさせない辺りがアンジェリーナらしいと言うか。

気付けば魔獣は早くも残り二体になっている。

「ソータ、後二体じゃ！オヌシに任せるぞ！」

「分かった！奔る水よ

吹き荒ぶ風よ

凍てつく氷よ

数多の飛礫となり

かの者達を貫け！

『アイス・バレット
氷の弾丸』！」

ルシフェラに言われ、残りの魔獣に向き直ると詠唱する。

水と風の複合属性である氷による弾丸。

無数の拳大の氷の飛礫が魔獣に突き刺さり、肉を抉る。

やがて二体共に力尽き、立っている魔獣が居なくなる。

二属性の魔力量調整が思ったより難しく、まさか成功するとは宗太も思わなかった。

細かくサポートしてくれたリリスのお陰だろう。

ルシフェラとリースリットは目を丸くしている。

「まさかいきなり複合属性を使うとは思わなかったぞ。良く成功したのう。」

「凄いですよ、ソータさん！」

「リリスが必要な魔力量まで教えてくれたからね。俺だけじゃどの

魔術も出来なかったよ。」

戦いながらの魔術行使の難しさを実感させられた宗太だった。

おそらく魔術陣の構築まで入ると発動すら無理だろう。

「まあ、それは実戦を繰り返せば慣れるじゃろう。アンジーも中々じゃったしのう。」

ルシフェラは笑いながらそう言う。

いきなりの実戦であれだけ使えば、後は経験で幾らでも伸びるものだ。

「…ルシフェラ様、魔獣が一体足りないようです。」

宗太達が話し合っていると、魔獣を確認していたリースリットからそう報告される。

「む？…確かに九体しかおらんの。」

宗太も数えてみるも、確かに一体足りない。

ルシフェラの探索魔術では確かに十体と言っていた筈なのだが。

「逃げたのか？」

宗太がそう言った瞬間。

「ガルルルルルッ」

唸り声を上げながら森の奥から近付いて来た魔獣は。

「…ちよつとデカくないか？」

思わず宗太がそう呟いてしまう程の大きさだった。

第8話 勇者召喚魔術の秘密？と犬っころ退治じゃ！（後書き）

ヤバイヤバイヤバイ、執筆ペースが段々遅く…。

てか、呪文考えるの面倒くさいですマジでorz

第9話 駄犬の主と聖剣と。です

「コレは…、ギルド職員の怠慢じゃのう。」

ルシフェラは呆れ顔で呟く。

目の前にはマッド・ハウンドより遥かに大きな体躯。

体高は三メートルを超えるだろうか。

漆黒の毛並みが木々の間から差し込む陽光に僅かに光る。

先の魔獣とは格が違うと見る者全てに理解させるような威圧感を放っていた。

「…やっぱり、さっきまでの魔獣とは違うん、…だよね?」

念のため確認をしてみる宗太。

「ヘル・ハウンド。先程のマッド・ハウンドの上位種です。特徴はその巨躯に似合わぬ俊敏さと口から吐き出す火炎、厚く堅い体毛に

より刺突は若干有効ですが、斬撃、打撃によるダメージは軽減されます。ランクはAですが、その中でも上位に位置します。」

リースリットが魔獣からは目を離さず、丁寧に説明してくれる。

ヘル・ハウンドは威嚇するように状態を低く屈め、低い唸り声を上げている。

「大方他の犬っころのボスでもしてたんじゃろう。よもやコヤツを見間違える阿呆が居るとは思わなんだ。」

そう言いつつ、ルシフェラは漆黒の大剣を大鎌に変化させる。

「こんなのどうやって倒せってんだ？」

宗太の武器は折れ曲がったツヴァイ・ハンダーのみ。

本来の性能ならば刺突による貫通力はかなりのモノを持つのだが、曲がった刃先では十分に威力を乗せられない。

打撃すら軽減されてしまうと、こんな物ではロクにダメージも与えられ無いだろう。

残るは魔術だが、慣れていない現状では詠唱中に隙が出来る上に甘い狙いだと避けられてしまう可能性が高い。

宗太は冷たい汗が背を伝うのを感じた。

「ソータとアンジーは下がっておれ！コヤツは今のオヌシ等が相手にするには少しばかり手に余るじゃろ。」

宗太とアンジェリーナの力量を良く理解しているルシフェラが二人に指示を出す。

「…っ！分かった！」

「わ、分かりました！……きゃっ！」

この中での一番の実力者はルシフェラだ。

ならばここは素直に従うべきだろう。

そう判断し、宗太は魔獣に注意を払いつつ後退りする。

アンジェリーナも同じように下がったのだが、魔獣に注意を払い過ぎた為か足元が疎かになり木の根に躓き転んでしまう。

それを好機と見たか、それまで低い唸り声を上げながら様子を窺っていたヘル・ハウンドがアンジェリーナに向き直ると牙を剥いて飛びかった。

「きゃああああっ!!」

アンジェリーナは咄嗟の事に身動き取れず、叫び声を上げながら目を瞑り身を竦ませる。

「戯け！オヌシの相手は儂じゃろっが！」

それを見たルシフェラは怒声と共に鎌を一振りする。

すると、鎌から放たれた複数の斬撃が空中にいたヘル・ハウンドの脇腹に吸い込まれ横に吹き飛ばす。

しかし、その斬撃も堅い体毛に阻まれダメージを与えられなかったようで、直ぐに立ち上がると体勢を直す。

だが、ルシフェラとしてはその僅かな時間で十分だった。

ヘル・ハウンドが体勢を立て直した頃には既に、リースリットがアンジェリーナを抱えて後方へと移動させていた。

宗太も直ぐにそちらへと移動する。

「さて、戯れようかのう？ 犬っころよ。」

ルシフェラが酷薄な笑みを浮かべながらそう言い放つ。

リースリットも双剣を構えると風鎧を展開し、ヘル・ハウンドの退路を断つように回り込む。

「ガアアアッ！」

ヘル・ハウンドが唸り声と共に前足を振るうと、ルシフェラはバックステップで回避する。

続け様にルシフェラの着地点に向かって噛み付くが、ルシフェラは

自分の影に沈み込んでさらに回避する。

すると、目標を見失って辺りを見回すヘル・ハウンドの下、影の中から大鎌と共にルシフェラが飛び出しヘル・ハウンドの腹部へと刃を突き刺す。

それと同時に、リースリットが右手の剣に雷、左手の剣に風を纏わせると高く飛び上がり、ヘル・ハウンドの背に双剣を突き刺す。

「ガアアアッ!!」

ヘル・ハウンドは内から雷に身を焼かれ、風で肉を切り裂かれ暴れ回る。

「フッ!」

ヘル・ハウンドの下から抜けたルシフェラが短い気合いと共に顔目掛けて鎌を振り下ろすが、しかしこれはヘル・ハウンドが身を振り避けた事で左首筋を軽く斬るに留まる。

ルシフェラの着地を狙い、ヘル・ハウンドが左前足を地面に叩き付けると地面が大きく抉れた。

しかし、既にその場にルシフェラは居らず、ヘル・ハウンドの右前足が鎌で斬られ、脇腹を双剣で裂かれていた。

ヘル・ハウンドが溜まらず口から炎を吐き出して距離を取るも、ルシフェラとリースリットは一瞬で防御壁を展開し防ぎきると、次の瞬間には影に沈みヘル・ハウンドの下に移動すると追撃を掛ける。

「すげえ……」

ルシフェラとリースリットの息の合った連携と圧倒的な攻撃の嵐に、宗太とアンジェリーナはただただ見惚れるばかりだった。

だが、見惚れていて気を抜いたのがいけなかった。

ヘル・ハウンドはルシフェラとリースリットの二人との実力差を悟ると獲物を変更する事にした。

ヘル・ハウンドは自分の周り、広範囲に炎を撒き散らすと、突っ立ったままのアンジェリーナに向かって駆け出す。

ルシフェラとリースリットは炎を防御壁で防ぐが、炎に視界を遮られ反応が遅れてしまった。

「……え？」

突然襲い掛かって来た巨大な魔獣の脅威に、アンジェリーナは動けず立ち尽くしたままだった。

「アンジー！」

一瞬早く反応した宗太がアンジェリーナを突き飛ばした。

「ガッ……！？」

ヘル・ハウンドの噛み付きは何とか身を擦って回避した宗太だったが、体勢を崩した状態ではその後の体当たりを避ける事は出来ずに吹き飛ばされる。

地面を転がり、仰向けに倒れた宗太の身体をヘル・ハウンドが前足で押さえ込む。

「ソーター……！」

「ガッ！？ああああッ！！」

「……ッ！？」

宗太を助ける為に踏み出そうとしたルシフェラだったが、宗太の叫び声で留まる。

ルシフェラの動きを察知したヘル・ハウンドが牽制の為に宗太を踏む力を強めたのだ。

下半身の骨が軋む。

苦痛に悲鳴が口から漏れる。

吹き飛ばされた衝撃か、意識が霞む。

ルシフェラ達の叫び声が耳に届くが、何を言っているのかが分からない。

死。

近付いて来るヘル・ハウンドの獰猛な口を見て宗太がそう意識した時。

「……………！！！」

脳裏に浮かんだ名前を無意識の内に叫んでいた。

「……………な、何じゃ！？」

思わずルシフェラが困惑の声を漏らす。

宗太の叫びと共に、宗太の身体とヘル・ハウンドの口との間に強い光を放つ白い魔術陣が展開されると、それは宗太の右手に収束していく。

「……これは自分の武器だと直感で理解する。」

「コレでも……喰らってろ！！」

宗太は、突然の光に怯み身を引いたヘル・ハウンドの頭に光を叩き込むと、そのまま意識を手放した。

「ん。」

宗太が目を覚ますと、そこは暗い森の中だった。

「おお、目が覚めたようじゃの。」

宗太に気が付いたルシフェラが声を掛けてきた。

どうやら火の番をしていたようだ。

アンジェリーナは向かいで毛布にくるまって寝息を立てていた。

「何で森の中で野宿を…？…ッ！」

そう言いながら身体を起こすと、若干痛みを感じて顔を顰める。

「まだ無理をするでない。犬っころから受けたダメージがまだ抜けない。きつてはおらんじやろ。」

それを見たルシフェラは苦笑しながらも優しく声を掛ける。

「……！そうだ、あの魔獣は！？」

宗太が気を失った後は一体どうなったのか。

生きているという事は倒せたのは間違いないのだろうか。

「説明の前に食事を取られてはいかがですか？食べられないようでしたら無理にとは言いませんが。」

そう言いながらリースリットがパンとスープ、干し肉を渡してくれる。

「あ、ありがとう。」

礼を言って受け取ると、宗太は食事を食べ出す。

昼間に激しい戦闘をしたせいか、動く気力こそ無いものの食欲だけはあった。

「ヘル・ハウンドの件じゃが…、その様子だと覚えてはおらんようじゃの。」

宗太が食べ始めるのを確認してからルシフェラがそう切り出す。

「うん、まあ、あの時は必死だったからね。何か叩き込んだのは覚えてるんだけど。」

宗太は気絶する前の事を思い出そうとする。

しかし、肝心な部分の記憶があやふやで思い出せない。

「ふむ…、では順を追って説明するのでしょうかのう。」

ルシフェラは焚き火に枯れ枝を足すとリースリットからお茶を受け取り話し始める。

宗太もお茶を受け取ると一口飲み、食事を続けながら聞く事にする。

「というか、ポットはどこから持って来たんだろうか。」

「あの時、儂とリースがヘル・ハウンドの吐いた炎で視界を遮られ、反応が遅れた隙を突いてヤツがアンジーに襲い掛かったのじゃが。」

「それは覚えてる。アンジーを突き飛ばしたらアイツの突進を受けたんだよね？」

「今なら吹き飛ばされたのは理解出来るが、意識が飛びかけたのかその後がはっきりしない。」

「うむ、オヌシを吹き飛ばした後、ヤツはオヌシを前足で押さえつけおった。助けようにも、動こうとすればオヌシを踏む力を上げられ儂もリースも身動き出来なかった。済まんの…。」

ルシフェラは俯き、申し訳なさそうに謝罪する。

リースリットも同じように俯いてしまう。

「いや、気にしないでよ。元と言えば、ルシフェラ達に任せっき

りで気を抜いてた俺の自業自得だったんだし。」

「しかし、のう。」

「自分の失態でルシフェラ達が落ち込むというのは嫌なんだよ。」

尚も気に病む様子のルシフェラにそう言うと、ルシフェラは苦笑しながら顔を上げる。

「オヌシがそう言うのなら、うむ、今回の事はもう言うまい。…それで、じゃ。ヤツがオヌシに噛み付こうとした瞬間、オヌシが何事か叫ぶと白い魔術陣が現れたのじゃ。」

ルシフェラはお茶を一口飲むと説明に戻った。

「白い魔術陣…？光属性のか？」

「うむ、その後現れた剣をヘル・ハウンドに突き刺しオヌシは気を失ったのじゃ。オヌシの横にあるじゃろう？」

ルシフェラが指差した方を見ると、宗太の横に長大な一振りの刀が置いてあった。

全長は１６０センチメートルを超えるくらいか。

どちらかと言えば反りは小さく、幅の広い打刀といった形状だ。

野太刀と言った方が正しいのかは刀剣にあまり詳しくない宗太には判らないのだが。

薄い蒼の柄と鞘には橙と金で綺麗な装飾が施されている。

軽く鞘から抜くと、白銀色の刀身が炎の光を反射し仄かに輝いている。

「おそらくそれがオヌシの持つ聖剣じゃろうな。銘は何と言つのじゃ？」

ルシフェラが聞いてくるが、宗太も覚えてはいないのだった。

『聖煌輝剣アカツキだよ。』

宗太が返答に窮していると、リリースから助け舟が出された。

「…聖煌輝劍アカツキらしい。」

「らしい、とは何じゃ。オヌシの聖劍じゃろうに。」

宗太の曖昧な返答にルシフェラは若干呆れ顔だ。

「し、仕方ないだろ！？最後の方は覚えて無いんだし！」

「ま、そうじゃな。仕方ないじゃろうのう。」

ルシフェラは向きになって反論する宗太を笑いながらからかう。

「フフツ…、ソータ様はまだ体調が万全では無いのですから、そろそろお休みになってはいかがですか？火は私が見ておりますので。」

宗太とルシフェラのやり取りを見ていたリースリットが、微笑を浮かべながらそう提案してくる。

リースリットの自然な笑みを見たのは初めての気がする。

「む？それもそうじゃな。火は儂とリースで交代で見れば良い。」

「そう？それじゃあお願いするよ。」

せつかくの二人の好意を無碍にするのも悪いと思ったので、ここは素直に甘えておくことにする。

「それじゃあ、二人共お休み。」

「うむ、ゆっくりと休むが良い。」

「お休みなさい、ソータ様。」

二人の声を聞いた宗太は、直ぐに眠りへと落ちていった。

第9話 駄犬の主と聖剣と。です（後書き）

サブタイはリースリットver.な訳ですが、アンジェリーナとの区別が付き難いですかね？

しかし、漸く聖剣出せましたよ。

聖剣を出すためだけのヘル・ハウンド戦でしたよ。

今回の書き始めの構想では「ルシフェラを助ける為に」な筈だったんですが、「チート魔王様を危機に陥れる魔獣ってどんなだよ？」って事でこんな感じに…orz

あ、アンジェリーナでも良かったのか…。

幕間 1 とある者達のお話（前書き）

宗太達が犬退治をしている辺りのお話です。

幕間 1 とある者達のお話

「遅れてしまいましたかな？」

そう言いながら一人の壮年の男性が室内へと入ってくる。

その部屋は華美な装飾が、しかし派手とは感じさせない絶妙さで施され、床には毛足の長い立派な赤い絨毯が敷き詰められていた。

天井には豪華なシャンデリアが吊され、室内を明るく照らしている。

そこはローディアス魔王王国王城の一室である会議室だった。

その室内、中央に据え置かれた黒く重厚な木製の長机には老若男女、十数名の人物が着席していた。

男性が室内へと足を踏み入れると、彼の背後、廊下に立っている二名の兵士が恭しく室内に一礼し、扉を閉める。

「いえ、まだ時間までは余裕がありますわ。どうぞ、お席にお着き下さい。」

長机の左右九つづつ置かれた立派な木製の椅子、入り口から向かって右手の一番奥に着席していた少女が来訪者に向かって良く通る澄んだ声を掛ける。

上座に座るその少女は、腰まで伸びた青みがかった銀髪に同色の瞳を持ち、歳は15程だろうか。

まだ幼い顔立ちをしている。

「それは良かったです。皆様お早いお着きでしたな。」

男性はホッと息を吐くと、失礼しますと言って自分の定位置、向かって左手の中ほどにある空席へと着く。

「皆様お着きになられた様ですので、少々早いですが本題に入りたいと思います。」

右手最奥に座る少女、が皆の着席を確認するとそう切り出す。

「本日のお話は、他でもないお姉様　魔王陛下直々のご命令をお伝えするものです。」

そう言うと、少女　ローディアス魔王国第二王女ミリア・エメイ
ン・レスト・ローディアスは右斜めに置かれた椅子に視線を向ける。
長机の最奥、一同を見回せる位置に置かれた一際立派な造りの椅子
には、主の姿は無い。

他の出席者は皆一様に姿勢を正し、真剣な顔付きになると、妹姫の
次の言葉を待つ。

ミリアは視線を一同に戻すと、今朝方のルシフェラの言葉を伝える。

「　魔族軍は、現在進めている侵攻準備を即刻中止、先の戦で我
が国の領土となった地域の復興に務めよ。尚、今後は命あるまで他
国への侵略はその一切を認めぬ。…以上です。」

言葉が終わると同時に室内はざわめきに包まれる。

そんな中でも、ミリアとその向かいに座る宰相、左に座る魔王国軍
総大将の三人は落ち着いた様子で座っている。

この三人は早朝にもかかわらずルシフェラに叩き起こされ、説明を
受けていたためこの命令には納得済みなのであった。

その後他の貴族達への説明を丸投げされ、三人で頭を悩ませたのはあるが。

結局命令をそのまま伝え、質問や異議があればその都度説明しようという事に決まって現在に至るのであった。

「私の領地には人間も暮らしております。もし他国への侵攻が中止されるといふのであれば、今後の統治もし易くなりこの決定は大変ありがたい事です。その様に領民へとお触れを出しても宜しいのですな？」

最後に入室した壮年の男性が確認の為に質問をする。

元々領民に人間も抱える彼は、他国への侵攻には消極的だったのだ。

今回時間ギリギリにやって来たのもその意思表示の様なものであった。

「ええ、ファルスト卿。尤も、終戦宣言を受けて他国がどう出るかにもよりますが、陛下の方針としては決定事項のようです。」

ミリアの答えに男性と、その他の戦争消極派の面々はホッと息を吐く。

元々魔王国に暮らす人間はともかく、先の侵攻で得た領土に暮らすのは殆ど人間なのだ。

そこを与えられた貴族にとっても、これ以上の戦争の継続はありがたい事であつた。

しかし、戦争の終わりを喜ぶ者がいる一方で、それを認められない者達も当然ながら存在した。

「ミリア王女！陛下が即位されてから我が国は連戦連勝を重ねております。何故この様な時に…！」

下座に近い席に座る一人の男性が立ち上がると、声を荒げてミリアに意見する。

「陛下が即位されてから早三年。以前の領土を奪い返した他にも、度重なる侵攻で周辺国の領土をも吸収し以前にも増して国土は広がった。それでは不満かね？」

その声を途中で遮る様にして魔王国軍総大将アーハム・ウィクト・

イベルト公爵が発言を被せる。

白髪が混ざり始めた薄緑の長髪を後ろに撫でつけ、歳による衰えを微塵も窺わせない初老の偉丈夫は、口元に蓄えた髭を撫でながら眼光鋭く発言者を睨め付ける。

「し、しかし、国を富ますには……。」

睨み付けられた男性は顔を青くしヒツと短く悲鳴を上げるが、尚も食い下がろうと発言を続けようとする。

今まで大した活躍が出来なかった彼は、領地を増やす事が出来なかったのだ。

ここで戦争が終わってしまえば最早領地を増やすのは絶望的だろう。

「戦をすれば人的、金銭的問わず莫大な損害が出るのだよ。当然、戦場となった領地の復興にもな。復興を遅らせれば治安が悪化し都市の生産性が落ちるばかりか、元人間領であれば反乱すら起きかねん。鎮圧に更に損害を重ねるのかね？一切の損害を出さず、領地を治め、更に他国を侵略出来るという案があるならば考えぬでもないが……。卿が単騎で進軍でもするかね？」

続く言葉は今度は宰相ディラン・ロット・マグナクト公爵に遮られる。

濃紺の髪と同色の瞳を持つこの壮年の宰相は、しかし文官とは思えぬ引き締まった体躯を持っている。

『健全な精神は健全な肉体に宿る』が持論のディランは、心身を鍛える為と政務の合間に武術の鍛錬にも励み、彼を知らぬ者が見れば武官と間違えてしまうだろう。

政治手腕にも優れ、文武両道を地で行く故にアーハムと仲も良く、ルシフェラやミリアにも信頼を置かれている魔王国の重鎮である。

「し、しかしですな！今回は召喚に失敗したようですが、この後万が一にもエルトリア王国が勇者を召喚しようものなら、我が国の被害は甚大なものになるのですぞ！」

二人の重鎮に言葉を封じられた男は、顔を赤くしながらも続ける。

しかし、その言葉はその場の人物にも不安を与えたようで、室内が再びざわめきに包まれる。

それを見た男はニヤリと口の端を歪ませ話しを続ける。

「そうならぬ為にも一刻も早く攻め滅ぼすべきです！」

得意気になって言う男にミリアは小さく溜め息を吐くと、ルシフェラからもたらされた情報を伝える。

「陛下からもたらされた情報によると勇者の召喚なら成功しているそうですよ。何でも、陛下に並ぶ力量を有しているとか。」

そのミリアの言葉に室内は騒然となる。

「やはり早々に攻め入るべきだ！」や、「いやここは様子を見るべきだ！」等の意見が聞こえてくる。

「静粛に！」

騒がしくなった室内を一声で黙らせると、ディランは説明を始める。

「先日、陛下が訪れた都市で召喚に失敗したと噂された勇者と出会われたそうだ。しかし勇者は魔族と事を荒立てるを良しとせず、魔族が人間へ害を加えぬ代わりに魔族に対しても害を加えぬ事を陛下と約定されたそうである。陛下自らされた約定を臣下が破るは陛下、

ひいては魔族の誇りに泥を塗ることぞ。」

室内に集められた一同は皆困惑の表情を隠せないでいる。

先程の男も言葉を失っていた。

無理も無い、とミリアは内心溜め息を吐く。

何しろルシフェラから直接説明された時は、不敬と思いつつも三人共俄には信じられなかったのだ。

その誠実さから三人からも信頼を置かれているルシフェラの侍女、リースリットもそれを認めた為に何とか事実であると理解出来たのだ。

主君であるルシフェラより侍女のリースリットの言葉の方が信用されるというのもどうかと思うが。

男は次の言葉を告げられず、顔を歪ませながら席に着く。

「この約定により人間や勇者に危害を加える事はなりません。複数の勇者を召喚出来ない状況で、もし魔族に理解ある現勇者が亡くな

ればどうなるか。事の重大さはお分かりですね？他に意見はございますか？」

男が席に着くのを確認し、ミリアが話を進める。

しかし、侵攻派もここまで言われてしまっただけは反論を述べる事は出来なかった。

消極派は口には出さずとも、この約定については歓迎だ。

勇者の脅威に晒される事も無く、侵攻も無ければ領地での政に一層専念出来る。

「意見が無い様ですのでこれにて解散とします。お疲れ様でした。」

ミリアがそう言うと、皆挨拶を述べて席を立ち部屋を後にする。

後にはミリア、ディラン、アーハムの三人が残された。

「…さて、これからどうなるのでしょうかね。」

他の面々が退室するのを待ってミリアが口を開く。

これから、今回の会議の様子から今後の予定を考えなければいけない。

「侵攻消極派の貴族はほぼ全てがこの決定に従うと考えて良いでしょう。誰も進んで領内に火種など抱え込みたくは無いですからな。」

ミリアの言葉にアーハムが答える。

ならば侵攻推進派をどうするべきか、なのだが。

「推進派の連中の動向は私の部下に探らせましょう。情報収集に長けた人材がおりますのでな。」

推進派の動向調査にはディランが名乗り出る。

優れた施政者でもあるディランは情報収集力に長けた人材も密かに育てている。

その事実を知っているのはルシフェラ、ミリア、アーハム、リース

リットのみなのだが。

「ではディラン、よろしくお願いします。集めた情報は纏めつつ、逐一お姉様に報告という事に致しましょう。幸いリースリットお姉様はこまめに戻って下さるそうですので。」

幼い頃からルシフェラの侍女として教育され仕えているリースリットは、ミリアにとって友人であり姉のような存在なのだった。

こうして、ルシフェラの急な決定による会議は終わりを告げた。

「準備は出来たか！」

エルトリア王国王城にある玉座の間で、国王ユーリスは目の前で片膝を付いている魔術師団長レイファスに確認をする。

ユーリスは端から見ても判るほど焦っていた。

魔族の侵攻が近いと報告されているのに、三日前の召喚の失敗。

それだけならまだ良かった。

攻められて領土を僅か奪われても、次の侵攻までの間が出来る。

失敗した当初はその間に再度召喚の準備を整えるつもりであった。

しかし、今では事情が変わってしまったている。

箝口令を敷いていたにも関わらず、周辺国にまで情報が回ってしまった。

この事が魔族にまで知らればこれ幸いと一気に攻め込まれかねない。

現魔王ならばそれ位余裕を持ってやってくれるだろう。

「ハッ、仰せの通りに。魔術師も先代勇者様を召喚した当時の人員と魔術師団でも屈指の者達を揃えました。」

レイファスは片膝を付いたままユーリスへと報告をする。

ユーリスの懸念はレイファスも考えていた事であるため、人員の選別も必死に考えた。

魔術師団長の名にかけても今度こそは失敗してなるものかという意気込みもあった。

「よし、今度こそ儀式を成功させるのだ！」

ユーリスの命令を受け、最後の確認をする為に儀式の間に向かうレイファス。

ユーリスも儀式を見る為に玉座の間を後にする。

「今回は万全を期す為、意識を統一する為の訓練をし魔力量も先代勇者様を召喚した時と同量と致します。」

レイファスは儀式の間に現れたユーリスにそう説明をすると、儀式の最終確認に入る。

呪文の確認に始まり各自の魔力量、立ち位置に至るまで慎重に確認をする。

全ての確認を終えると、ユーリスに儀式の開始を告げる。

「始めよ！」

ユーリスの命令と共に呪文の詠唱が始まる。

魔法陣に魔力が流し込まれ、魔法陣が輝き出す。

儀式が進み流し込まれる魔力が増えると、魔力が魔法陣を中心に渦を巻き魔力の嵐が再び広間を襲う。

間近で魔力の激流にあてられた魔術師達の顔色が蒼白になり、額には脂汗を浮かべているが今回は倒れる者は居なさそうである。

儀式が進むにつれ、魔法陣は一層輝きを増し、魔力の嵐は室内を蹂躪する。

そして、最後の呪文が唱えられると溢れていた魔力が魔法陣に収束し、魔法陣の光が爆発する。

（こ、今度こそやったぞ……！！）

目を瞑っても防ぎきれない圧倒的な光量に包まれながら、レイファスは今度こそ儀式の成功を確信した。

やがて光は収まり、視力を回復させたユーリスと魔術師達は恐る恐る魔法陣を確認する。

そして、魔法陣の中心には

またしても誰も居なかった。

「何故だ！？一体何がいけない！」

思わず叫んでしまうレイファス。

今回は完璧だったはずだ。

人員は先代勇者召喚に関わった経験者と、足りない分は大規模魔術の行使にも慣れた熟練者で補った。

呪文の確認や意識の統一も二日間とは言えみっちり訓練を繰り返した。

魔力量も許容量は超えていないはずなのだ。

失敗する理由が見当たらなかった。

周りを見回すと、他の魔術師達も呆然と魔法陣を眺めている。

「失敗…、なのか…？」

声のした方を向くと、ユーリスが呆けた顔で魔法陣を眺めていた。

そこには以前の精悍さは微塵も感じられなかった。

「も、申し訳ございません！我々の力不足で…！」

レイファスを初めとした魔術師達は膝を付いて謝罪をするが、ユリスは聞こえなかったかのように反応せず、ふらふらと儀式の間を後にする。

儀式の間は沈黙だけが支配した。

「お父様…、どうしたのかしら？…あつ！」

王城の最上階にある一室で、窓際に置いた椅子に座った少女が呟いた。

ピンクの髪をサイドアップで纏め、大きな眼は城下の街並みを移している。

フリルがふんだんに付けられた薄ピンクの可愛いドレスを着た少女 エルトリア王国第二王女ユリス・ユーリア・イヴァリア・エルトリアは、先程すれ違った父王ユリスの変わり果てた姿を見て疑問に思っても、直ぐに原因に思い至った。

「…ああ、勇者様の召喚にまた失敗したのか…。『今度こそ…！』
って意気込んだものね。」

イリスは苦笑しながらそう呟く。

しかし、イリスとしては内心ホッとした事だった。

姉が先代勇者に嫁ぎ、先代勇者亡き後、次代の勇者に嫁ぐべく教育
を施されて来たが、イリスはまだ14だ。

自分でも結婚はまだ早いだろうと思う。

しかも会ったことも無い人物との結婚なんて認めたくは無いのが乙
女心と言うものではないか。

そんな夢見る乙女な王女様は。

「…さて、いい天気だし一城下をお散歩（お城を脱走）してこよう
かな！」

にこやかに笑いながら脱走宣言するのだった。

フォートリア大陸西にあるギロード山脈は、大陸を南北に走る巨大な山脈である。

その山脈の一部にある巨大な洞窟の中、これまた巨大な石造りの玉座に、小柄な少女が座していた。

見た目十歳程度の少女の真紅の髪には蒼、緑、黄色が混じったような不思議な色合いをしており、瞳の色は黄金だった。

「ほう、エルトリア王国が再び勇者の召喚をしようとして……？ククッ、先日失敗したばかりと言うに懲りぬのう。」

少女は目の前にいる配下の報告に苦笑をする。

「はっ、如何なさいますか？神龍様。」

配下は片膝を付いたまま長に訊ねる。

「ククッ、何時も通り放っておけ。どうせ失敗じゃろうしの。」

「は…、失敗と申しますと？」

配下の男は長の言葉の意味が今一理解出来ていないようだ。

「まあ、気にせずとも良い。直に判るじゃろう。下がって良いぞ。」

長が話しは終わりとばかりに手を振ると、男は意味を理解しようと頭を捻りながらも一礼し、退室する。

「魔王国のじゃじゃ馬王女　いや、魔王に即位したんじゃったな。
あ奴も面白い動きをしないとるようじゃのう…、ククッ。」

少女は東の方角に視線を向けながら今度は楽しそうに笑うのだった。

幕間 1 とある者達のお話（後書き）

後々登場するかも知れない人物達が出てきました。

どう話に絡んで来るかは作者にも不明ですが。
キャラとかこの話考えたの今日なんで…。

しかしユーリス王の道化^{ビエロ}つぷりがとんでも無い事に…。

そして神龍様が妖怪キャラ被り…。
主に喋り方。

因みにロリが多いのは作者の趣味です。
お姉様系が欲しい方は言って下さい。
頑張って考えますんで。

それではまた次回の更新で。

第10話 街への帰還と不機嫌な魔王様

森の木々の隙間から差し込む朝日を浴びて、宗太の意識が浮上する。

重い瞼を僅かに開くと、数日前にも見た蒼と白、そして緑。

「…知らない。」

「お目覚めですか？ソータ様。」

最早色んな所でテンプレ化しつつある台詞を呟こうとしたが、宗太が起きた事に気が付いたリースリットによって遮られてしまった。

（悔しくなんか無いもん！コレは心の汗だもん！！）

目から熱い液体をこぼしながら、そう心の中で言い訳する。

「…お早う、リース。」

「お早うございます、ソータ様。もう少しで朝食が出来上がりますので、もう暫くお待ち下さい。」

宗太が挨拶をすると、リースリットも返してくれる。

見ると朝食を作ってる最中のように、焚き火の上に鍋を固定し、お玉で中身をかき混ぜていた。

食欲を刺激する良い匂いが漂ってくる。

固くなった身体を解す為に伸びをしようと、身を起こそうとする宗太だったが、左腕が動かずに再び倒れ込んでしまう。

「な、何だ!？」

突然の事に混乱する。

左腕に意識を向けるが、動かない所か感覚すら無かった。

「……んん、むー……。」

それでも必死になって左手を動かそうとした宗太だったが、次いで聞こえてきた甘い呻き声に思考を停止させる。

恐る恐る視線を左腕に向けると、毛布の一部が盛り上がっているの
が目に入る。

何事かと寝起きで回らぬ思考で必死に考えていると、不意に左腕の
膨らみがゴソゴソと動き出す。

「…んん、朝かの。お早う。」

「…お早う。」

どうやら今朝もルシフェラが潜り込んでいたようだ。

腕の感覚が無かったのはルシフェラに血管を圧迫されていたせいか。

ルシフェラが動いた為、血が巡り始め腕が痺れる。

「…何で今日も潜り込んでんだ？」

宗太は痺れを取るように左腕をさすりながら訊ねる。

「…んむ？」

ルシフェラは未だ寝ぼけているようで、目を擦りながらぼうつとしている。

「申し訳ありません。毛布が二枚しかありませんでしたので、ソータ様とご一緒させて頂きました。アンジェリーナ様から毛布をお借りするのも可哀想ですし…。」

寝ぼけているルシフェラに代わってリースリットが宗太の疑問に答える。

アンジェリーナの方を見ると、寒く無いようにしっかりと毛布にくるまれている。

なる程、朝は微かに肌寒い。

まだ幼いアンジェリーナから毛布を剥がすのも可哀想だ。

しかし、宗太は異性として見られていないのだろうか？

そう考えて若干悲しくなるのだった。

「それなら別に俺は毛布無くても良かったんだけど。」

「そういう訳にはいきません。ソータ様はお怪我をされていたのですから、身体に障ります。」

宗太が気を取り直してそう言ったものの、それは即座にリースリットに否定される。

「それはそうと、お身体の方はもうよろしいのですか？」

リースリットに訊ねられ、宗太は身を起こして伸びをすると身体を軽く動かしてみる。

毛布を敷いていたとはいえ、固い地面に寝ていたため少々身体が固いが特に問題は無さそうだ。

「うん、もう大丈夫みたい。痛みも全く無いし。」

「全く呆れた回復力じゃのう…。」

宗太がそう答えると、寝起きの頭からようやく回復したルシフェラが呆れ顔で言ってきた。

宗太自身そう考えていた為何も言い返せなかった。

「それは良かったです。それでは朝食に致しましょう。」

リースリットは微かに笑ってそう言つと、アンジェリーナを起こしに行く。

何やら夕べからリースリットの表情が柔らかくなっている気がする。

今までは表情を顔に出さない事の方が多かった気がするのだが、打ち解けられたと考えるのも良いのだろうか。

ルシフェラもそれに気付いているのか、笑みを浮かべてリースリットを見ていた。

「で、これから街に戻るんで良いんだよね？」

リースリットから渡されたパンとスープを食べながら、今後の予定

について質問する。

「うむ、昨日の内にマッド・ハウンドから素材は剥ぎ取っておいたしの。」

同じく朝食を食べながらルシフェラが答える。

リースリットがアンジェリーナを起こした後は少々大変だった。

宗太を見たアンジェリーナが抱き付いて泣き出してしまったのだ。

昨日もアンジェリーナを庇って傷付いた宗太に対して、自分を責め続け宥めるのが大変だったらしい。

再び自分を責め出したアンジェリーナを三人で宥め、先程ようやく泣き止んでくれたのだった。

朝食を食べている今も若干目が潤み、腫らしている。

「マッド・ハウンドは良いんだけど...、アレは?。」

宗太が指差した方向には三メートルを越す巨体が横たわっている。

所々傷があり、流れた血は固まっているようだ。

首から頭頂にかけて風穴が空いているのは、宗太の聖剣によるものだろう。

「む？ああ、アレはこのままギルドまで運ばうと思う。」

ヘル・ハウンドの死体をチラリと見やっただけで、ルシフェラがそう答える。

「んな！？あんなの持ってたなら街中で軽くパニックが起こるぞ！？」

一体ルシフェラは何を考えているのか。

宗太は起こるであろう騒動を考えて頭が痛くなるのを感じた。

「ククッ、騒動などギルドの連中にどうにかさせれば良い。あ奴等の怠慢でコッチは怪我人まで出たのじゃ。宗太だったからこそ軽い怪我で済んだが、他の冒険者連中だったなら確実に死人が出ていた問題だったんじゃないぞ？あれがアンジーだったら…。Bランク程度の冒

「険者パーティーなら全滅すらあり得た。」

そう答えるルシフェラは不機嫌そうだった。

リースリットも今回は文句も無いようで、静かにスープを飲んでいく。

こちら表情にこそ出していないが、怒っているような雰囲気を出していた。

宗太としても、こういった問題が起きなくなるならそちらの方が良いと考えた。

ヘル・ハウンドから受けた突進の衝撃を思い出し、本当にアンジェリーナが無事で良かったと思う。

食事が終わると、リースリットが魔術で出した水で鍋や食器を洗う。

そのまま焚き火に水をかけて火を消すと、鍋や食器、毛布を影に収納させる。

魔術便利過ぎるだろ。

「で、コレを運ぶのか…。」

宗太は試しにヘル・ハウンドを押してみる。

動かせなくは無いが、ロングホーン・ボアと比べると大分重い。

というか、重量よりも前が見えない方が問題か。

「この程度、三人で持ち上げれば訳ないじゃろ。」

ルシフェラはそう言うと、頭部を掴むと持ち上げる。

リースリットも後ろの方を掴み、同じ様に持ち上げた。

一体どんな筋力をしているんだろうか。

宗太は疑問に感じながらも、脇腹の下に潜り込むと肩に乗せるように持ち上げる。

確かに三人なら問題は無さそうだ。

アンジェリーナはその様子を目を丸くして見ていた。

「では、行くとするかの。」

ルシフェラの号令と共にハーベルに戻る為歩き出した。

「お、おい、お前等！何だソレは！？」

城塞都市ハーベルの城門に近付いた頃、不意に前方から声をかけられた。

宗太が何事かと視線を向けてみると、数人の衛兵が困惑した表情で立っていた。

彼等はイーヴルニスの森から近付いてくる黒い塊を確認して、待機していたのだった。

中にはモーリスとロイドの姿もある。

「見て判らぬのか？ヘル・ハウンドの死体じゃが。」

ルシフェラが事も無げに答える。

「そういう事を聞いてるんじゃない！ソレをどうするのかと聞いているんだ！！」

衛兵達は困惑を強めて問い質そうとする。

こんなモノが街中に持ち込まれれば、市民が混乱するのは確実だ。

それ位判るだろうに、ルシフェラは何が問題なのかと言いたげな表情をしているのだ。

「ギルドで受けた依頼での、『マッド・ハウンド10体の討伐』。その素材を買い取って貰うのじゃよ。アンジーの兄上殿は知っておるじゃろ？」

宗太達はヘル・ハウンドをその場に下ろし、ルシフェラがロイドを見ながら衛兵に答える。

衛兵達の視線がロイドに集中する。

「あ、ああ……。確かに昨日依頼書を確認したが、どうしてヘル・ハウンドが…？」

ロイドはそれを認めるが、困惑の表情はそのままだ。

「マッド・ハウンドを9体倒した後、その群れのボスだったヘル・ハウンドに襲われました。お陰で初心者のアンジエリーナ様が危険に晒されました。ソータ様が身を挺して庇われた為大事には至りませんでした。コレは依頼内容の確認を怠ったギルドへの抗議の意味でもあります。どうかこのまま入城を認めて下さい。」

リースリットが一步前に進み出ると、そう言うってお辞儀をする。

「アンジー…、怪我は無かったのか!？」

「う、うん、ソータさんが護ってくれたから。」

リースリットの言葉を聞いたロイドが、顔を青くしてアンジェリーナに詰め寄る。

アンジェリーナはビックリしながらもそう答えた。

一方モーリスは信じられないモノを見たような表情をしていた。

ヘル・ハウンドはAクラスの熟練冒険者でも十数人、一般兵なら五十人以上で漸く討伐出来るような魔獣である。

それをたった四人、しかもDクラス一人にFクラス三人という新米冒険者パーティーが討伐したという。

更には男女三人でその巨体を運んで来たのだ。

「お前等は一体……。」

「なに、只の新米冒険者じゃよ。」

モーリスの呟きにルシフェラはそうとだけ返すと、通行書を渡す。

「では、コレはそのまま運ばせて貰うぞ?。」

ルシフェラはそう言って再びヘル・ハウンドを掴む。

宗太達もそれに続いて持ち上げると、啞然としている衛兵達を横目に城門を潜る。

衛兵達は呆然とそれを見送っていた。

ギルドまでの道のり、西門から続く大通りに居る人達は、皆一様に宗太達を見て目を見張っていた。

高ランクの魔獣をたった三人で持ち運び、しかもその内の二人が少女なのだ。

気にするなという方が無理だろう。

「クククッ、皆注目しておるようじゃのう。」

そんな中、ルシフェラは楽しそうに笑っている。

宗太としてはここまでの反応とは予想外だった。

何せモーゼよろしく人の波が割れて行くのである。

進みやすくはあるのだが、奇異の視線が刺さってイタイ。

「あうう…、恥ずかしいです…。」

アンジェリーナは耳まで真っ赤にして、恥ずかしそうに毛皮に顔をうずめている。

割れた人垣の中央を歩いていくと漸くギルドに辿り着く。

ギルド前には騒ぎを聞きつけた職員が数人立っていた。

職員は顔を青ざめさせてヘル・ハウンドを眺めている。

「ギルドの職員じゃな？この魔獣を買い取って貰いたいのが…。」
「」

ギルド職員の姿を認めたルシフェラがそう話しかける。

「う、コレですか…？」

ギルド職員が恐る恐るといった風に訊ねてくる。

「うむ、昨日受けたBランクの依頼の素材じゃ。」

ルシフェラがBランクという部分を強調して答えると、職員はギョツとして慌て出す。

「か、買い取りの交渉等は中でご対応させていただきますので、どうぞコチラへ。」

「では、そうさせて貰うとしようかの。」

ギルド職員はにこやかに対応するが、額には汗をびっしりと浮かべていた。

対するルシフェラは意地の悪い笑みだ。

職員に促されるまま、素材搬入出用の裏口から中に入る。

「…さて、Bランクで受注した依頼で何故かヘル・ハウンドが出てきたんじゃが、どういう訳か説明しては貰えるのかの？よもやヘル・ハウンドのランクが下げられた訳ではあるまい？」

ギルドの買い取り室の床にヘル・ハウンドを置くと、ルシフェラが目を細めて腕を組み問い詰める。

「そ、それは…。」

「確か依頼内容の確認はギルドの義務じゃったよな？森の入り口におったのはヘル・ハウンドを入れて丁度10体じゃった。ヘル・ハウンドの討伐はAからSランクに分類されておったと記憶しておるのじゃが。コチラはオヌシ等の怠慢で危うく死人が出る所じゃった。」

ルシフェラからプレッシャーというか最早殺気といっても良いモノが放たれる。

プレッシャーに当てられギルド職員達は顔を青ざめさせている。

やはりリースリットも止める気は無いようだ。

無作為に放たれてる所為でアンジェリーナまで顔を青くしているのだが。

「ルシフェラ、ちょっと落ち着け！」

仕方がないので宗太が止めに入る。

ギルド職員はどうでもいいが、これ以上はアンジェリーナが心配だ。

「…むう。」

ルシフェラは口を尖らせながらも落ち着きを取り戻す。

ホッとしたのか、数名の職員はへたり込んでしまっていた。

本気じゃないとは言え魔王の殺気を受ければ当然か。

「えっと、そちらのミスで我々が危険に陥ったのは事実ですので、今後このような事が無いように徹底して頂きたいのですが。」

宗太が出来るだけ柔らかくそう言うと、職員達に一斉に謝罪された。

その後、職員にギルドカードとマッド・ハウンドの素材を渡し、査定等が終わるまで表の椅子に座り待つ事にする。

「しかし、話し合いで殺気を撒き散らすってのはどうよ？アンジーまで巻き込んでたぞ。」

「…ふん、アレでも大分手加減してやったのじゃぞ。」

宗太が苦笑しながらルシフェラに言うと、不機嫌そうな答えが返ってきた。

「しかし、アンジーまで巻き込んでしまったのは僕の不注意じゃった。済まんかったの。」

「いえ、気にしてません！ソータさんやあたしの為に怒ってくれたのは嬉しかったですし。」

姿勢を正したルシフェラの謝罪に、アンジェリーナは笑って答える。

注意はしたものの、宗太としても大事に思ってくれているのだと感じられて嬉しかった。

宗太達が話していると、女性職員がテーブルへと近付いてくる。

そちらを向くと、職員は一礼してから話し始める。

「お待たせ致しました。買い取り金額と依頼報酬ですが、金貨八枚になります。コチラの不備で皆様にご迷惑をお掛けしてしまった為、本来の報酬相当額に少しばかり上乗せさせて頂きました。」

そう言ってコインの入った袋をテーブルの上に置く。

「次にランクの方ですが、皆様をAランクにするべきとの意見も出たのですが、なにぶん前例の無い事です。でそれぞれ2ランクアップという事にさせて頂きました。」

今度はギルドカードが四枚置かれた。

宗太が自分のカードを確認してみると、ランクがBになっていた。

まさか依頼一回でBランクになるとは…。

「今後この様な事が無いように徹底させて頂きます。申し訳ありませんでした。」

最後にもう一度礼をする職員に、もう気にしていないと言って席を立ちギルドを後にする。

ユニスとの約束までまだ時間がある。

少しゆつくりと休みたいと思いながら、宗太は皆と宿屋に戻る事にしたのだった。

第10話 街への帰還と不機嫌な魔王様（後書き）

今回はあまり話しが進みませんでしたね、済みませんです。

え、何時も通り？

最近携帯のバッテリーがヤバい事に…。

ネット接続すると二十分経たずに電源切れます。

出先で投稿後の修正が出来ないorz

まだ一年しか使って無いのに…。

愚痴ばかりでもアレなので、嬉しかった事を。

今日確認したらお気に入りが入りが60件越えていました！

読んで下さってる方々ありがとうございます！

それではまた次回の投稿で。

第11話 パパの暴走と短剣の購入です！

宿屋の前、扉を開けるのを躊躇い宗太はつい立ち止まってしまった。

「む、むっ…、何とも陰湿な気配が漂って来ておるのっ…。」

ルシフェラも扉を見ながら若干引き気味だ。

今後の予定は宿屋に戻ってから決めようという事になり、ルシフェラ達から魔術の応用技などを教わりながらギルドからの帰路についたのだが、宿屋の入り口からは何とも暗いオーラが出ていた。

通行人も異様な雰囲気宿屋の前を避けるようにして歩いている。

「何か凄く開けたくないんだけど…。」

「うむ、何やら扉の前に居るだけで不幸になりそうじゃのっ…。」

というよりも嫌な予感が犇々ひらひらと…。

一同が躊躇っていると、ドタタタと何かが走ってくる音がし、バタ

ンと扉が吹き飛びそうな勢いで開け放たれた。

「アンジーー!!」

現れたのは宿の親父さんだった。

目の下には隈が出来ている。

おそらく夕べは睡眠を取っていないのだろう。

「アンジー、何故夕べは無断外泊なんて……!心配したんだぞ!」

「パ、パパ!?ちょっと落ち着いて……!」

親父さんは扉を開け放った勢いそのままに、アンジェリーナを抱き締めるとまくし立てる。

何という親バカっぷりだろう。

アンジェリーナは突然の出来事に困惑している。

「ちょっと落ち着いて下さい。」

話が進まないと感じた宗太は、とりあえず親父さんを落ち着かせる事にする。

「お前は…。」

漸く親父さんは宗太の存在に気付いたようである。

「…そうか、貴様がアンジーを誑かして…。」

そう言うと、包丁を握り締め宗太に向き直る。

というか、包丁なんて何処に持っていたんだ？

「お、親父さん!？」

「貴様なんぞに義父呼ばわりされたくないわっ!！」

「意味が違っ!？」

宗太が頬を引きつらせて一歩後ずさると、親父さんが目をぎらつかせて切りかかって来た。

目が血走ってて恐い。

てか、本気で切りかかって来た。

親父さんも元冒険者だったのだろうか、宗太は繰り出される鋭い斬撃を必死になって避ける。

ルシフェラとリースリットは親父さんの動きを感心した様に見える。

見てるだけじゃなくて止めて欲しい。

「そ、ソータさんに酷い事しないでって言ったでしょ！？パパなんて大っ嫌い！」

不意に我に返ったアンジェリーナが叫ぶ。

すると、親父さんは包丁を振り上げた体勢のまま固まってしまった。

やはり溺愛する娘の一言の威力は絶大だったようだ。

「いい加減にしな!!」

追いつちをかける様にドゴツと鈍い音が響き、親父さんが地に倒れ伏す。

いつの間にか親父さんの背後に居たおかみさんが、手にお盆を持って立っていた。

それにしても、お盆の角でフルスイングとはえげつない…。

親父さんは頭から血を流してピクピクと痙攣していた。

「ううむ…、とんでもない親バカっぷりじゃのう…。いや、バカ親か…?」

ルシフェラが顎に手を当て親父さんの評価を下す。

「先代陛下も似たようなモノでしたが…。」

リースリットの言葉は明後日の方向を向いて聞き流すルシフェラだった。

「全く、ウチのバカ亭主が済まないね。怪我は無かったかい？」

「いえ、大丈夫です。それより親父さんの方が…。」

おかみさんの言葉に苦笑いで返すと、親父さんの方に視線を向ける。

流れる血の量に比例して痙攣も弱々しくなっている。

…死なないよな？

「あつはつは、コレくらいじゃこの人は死にやあしないさ。それより依頼の方はどうだったんだい？一日で終わらなかったって事は結構苦労したのかい？」

宗太の心配を笑い飛ばすと、おかみさんが訊ねてくる。

親父さんには心の中で手を合わせておくことにする。

「いや、ソータがヘル・ハウンド戦で少々負傷しての。大事を取って一晩休んでおったのじゃ。」

「ヘル・ハウンドだって！？良く無事に戻って来れたね。」

ルシフェラの返答におかみさんは驚愕に目を見開く。

「ソータさんがあたしを庇ってくれて…。ヘル・ハウンドを倒したのもソータさんなんだよ！」

アンジェリーナの言葉におかみさんは感心したような表情で宗太を見る。

アンジェリーナは毎度の事ながら頬を染めて見ていた。

「いや、咄嗟の事で…。それにアンジーも凄かったんですよ。マッド・ハウンド三体に怯む事無く立ち向かってましたから。」

宗太は気恥ずかしさを覚え、頭を掻きながらアンジェリーナを誉める。

「うむ、アンジーも現在の力量はBランクに相当するじゃろうな。経験さえ積みめばA、いやSにも直ぐに届くじゃろう。」

ルシフェラも昨日の戦闘を思い返し、そう評する。

宗太とルシフェラに誉められ、アンジェリーナは気恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに笑みを浮かべる。

「そうですね。確かにアンジェリーナ様がDランクというのは過小評価が過ぎると思います。ギルドの決まりと言われれば仕方の無い事ではありますが……。」

「へえ、アンジーはDランクになったのかい？……ああ、ヘル・ハウンドとマッド・ハウンドの群れを討伐したなら数ランクアップも当然かねえ。」

リースリットの言葉におかみさんは驚き、しかし納得したという風にアンジェリーナの頭を撫でている。

嬉しそうに頬を緩めて撫でられているアンジェリーナに、その場に和やかな空気が流れる。

…地面の親父さんを除いて。

「おお、そうじゃった。儂等もここで宿を取りたいのじゃが、部屋は空いておるかのう？」

ルシフェラが思い出したようにおかみさんに訊ねる。

「空いてるよ。一人部屋が角銀貨五枚、二人部屋は八枚だけどどっちにするんだい？」

「二人部屋で頼む。代金は…、ソータ、頼めるかの？」

そう言えばまだ報酬を分けていなかったなと思い、宗太が代わりに代金として角金貨一枚を支払う。

「はい、確かに。アンジーが世話になったんだ。今夜はご馳走を作らせて貰うよ。」

おかみさんはにこやかにそう言つと、親父さんを引き摺って宿の中に戻って行った。

「…哀れな親父殿じゃの。」

その様子を見て、ルシフェラがポツリと呟く。

場には微妙な空気が流れた。

四人は宿に入ると、少し早めの昼食を取りながら今後の予定について話し合うことにした。

「報酬だけど、きつちり金貨八枚だから一人二枚ずつで良いかな？」

宗太は報酬の入った袋をテーブルの上に置く。

「いや、僕等はどうせ一緒に旅するのじゃ。纏めておいても良いじやろう。アンジーは…。」

「あ、あたしはそんな大金受け取れません！それに倒したのは皆さんだし…！」

ルシフェラの言葉にアンジェリーナは慌てて答える。

外食で一食100エリー前後、一泊二食付きで500エリー程度なのに20万エリーとなれば確かに大金だろう。

因みに一般人の月収は凡そ4万エリー、実に五ヶ月分である。

「でも、アンジーも頑張ったんだしちゃんと報酬は分けないと。」

「じゃあ、必要になるまで預かって下さい！」

アンジェリーナはこの場では受け取る気が無いようである。

「…ふむ、そうじゃの。では必要になるまで預かっておくとするかの。」

ルシフェラは何かに気付いたのか、ニヤリと笑うとそう言った。

「うーん…、それじゃあ一人金貨一枚ずつで、残りはリース。預かって貰えるか？」

今後何か必要になるかもしれないので、報酬は半分ずつ。

残りは管理がしっかりしてそうなリースリットに預けておく事にする。

「畏まりました。」

リースリットは了解すると、残りの金貨の入った袋を影に収納する。

いつ見ても便利な能力だ。

「それじゃあ、俺はこの後リードさんの所に寄ってからユニスさんの店に行くよ。」

「誰じゃ、それは？」

宗太が今日の予定を話すと、ルシフェラが質問する。

「リードさんは武器屋さんで、ユニスさんはお洋服屋さんなんです。」

ルシフェラの質問にはアンジェリーナが代わりに答える。

「武器屋に洋服屋か。では、僕等も着いて行こうかの。勿論アンジ
ーもじゃ。」

ルシフェラの言葉にアンジェリーナは不思議そうに首を傾げる。

「アンジーには魔導書があるが、それ以外にも護身用の武器が必要
じゃろう。咄嗟の危機回避にはそういった物の方が有効な場合もあ
るしの。」

ルシフェラがそう言うと、アンジェリーナも納得したようだ。

「はい！それじゃあ、あたしも一緒に一緒します！」

「それじゃあ皆で行こうか。」

今後の予定も決まった事だし、さっさと昼食を食べ終える事にする。

「リードとやらはどんな人物なのじゃ？」

武器屋への道すがら、ルシフェラが訊ねてくる。

「うーん…、何というか、山賊の頭…?」

未だに山賊というイメージが抜けきっていない宗太だった。

「ソータさん、そんな事言ったらリードさんが可哀想ですよ。変わった人ですけど、武器の目利きは確かだって言われてる人です。」

宗太の評に苦笑して、アンジェリーナが代わりに答える。

「山賊で変人…、何とも関わり合いになりたくないような人物じゃないのう…。」

ルシフェラは両方のダメな評価を受け止めたらしい。

「あ、此処です!」

武器屋の前に着くと、アンジェリーナが扉を開け入っていく。

宗太達も後に続いた。

「おう、アンジー。今日はどうしたんだ？」

武器屋に入ると、変人な山賊こと店主のリードが四人を出迎えた。

「ソータさんが武器の修理の依頼で、あたしは護身用の武器を買いに来たんです。」

「…確かに山賊じゃのう。」

「…ですね。」

リードを見たルシフェラとリースリットも、宗太の評価に納得した様子だった。

「山賊じゃねえ！元冒険者だ！」

リードは出会い頭の暴言に若干怒ったように返す。

「しかし、ボウズはもう剣を壊しやがったのか？いくらなんでも早過ぎるだろう。それにこの嬢ちゃん達は誰なんだ？」

リードは気を取り直して話しを進める事にしたようだ。

「…ちょっと依頼でヘル・ハウンドとやり合う事になりました。この二人はルシフェラにリースリット。冒険者の仲間です。」

正直にルシフェラに折られましたなどと言える訳も無く、ヘル・ハウンドに罪を被って貰うことにする。

ルシフェラはバツの悪そうな顔をしていた。

「ヘル・ハウンドなあ？ボウズはまだそんな依頼を受けられるランクじゃなかっただろうが。」

「ギルドの確認ミスで、Bランクの依頼のマッド・ハウンド達のボスがヘル・ハウンドだったんですよ。」

宗太は苦笑しながら両手剣を渡す。

「そりゃ災難だったな。…こりゃウチじゃ直せんな。」

リードは剣を受け取ると一頻り確認し、眉を顰めてそう言った。

「直せる人は居ないんですか？」

「うーむ、背中の中刀じゃ駄目なのか？まあ、直すなら北のガルズ山脈の麓にあるルーベックって鍛冶の街に居るグストってドワーフの親父を訪ねな。」

そう言って宗太に剣を返す。

ルーベックって何処だろうか。

後でルシフェラ達と相談するのかなさそうだ。

「んで、アンジーは護身用の武器だったか？」

リードは次にアンジェリーナに向き直る。

「は、はい！あたしでも扱えるような武器ってありますか？」

「…そうだな。用途が護身用のみなら短剣辺りが良いかもしれねえな。」

そう言って店内を移動し、手に数本の短剣を持って戻ってきた。

「これらが無難だろう。握ってみてしっくり来るモノを選びな。」

カウンターの上に六本の短剣が置かれる。

どれも装飾は少な目で、実用性を重視したモノなのだろう。

アンジェリーナは一本ずつ手に取ると、鞘から抜き重さや握り心地を確かめていく。

暫く確認を続け、二本の短剣に絞り込んだようである。

選んだ短剣は根元が櫛状になっている方刃の所謂ソードブレイカーと呼ばれる物と、同じく方刃だが反りの大きな短剣だった。

「こっちの短剣は重さが丁度良いんですが、握り心地が少し……。こっちは握り心地は良いんですがちょっとバランスが。」

「握りなら柄の革紐を調整すればどうにでもなる。使い易い方にし

な。」

悩むアンジェリーナにリードが助言する。

「それじゃあこっちにします！」

リードの助言を受けて、アンジェリーナはソードブレイカーを使う事にしたようだ。

「んじゃ、調整するからこっちに来な。」

リードはアンジェリーナの手や握り方の癖などを調べていく。

「早めに調整は終わらせとくから、また後で来てくれ。代金はその時で良い。」

一通り調べ、メモを取った後リードにそう言われる。

「ありがとうございます。それじゃあ、また後で取りに来ます。」

アンジェリーナはリードに礼を言う。

「そっちの嬢ちゃん達の武器は要らんのか？」

「儂等は既に持つとるからのう。新たな武器は不要じゃ。」

ルシフェラがリースリットの双剣を示して答える。

「ほう、こりゃあ見事な魔剣だな！」

リードは軽く見ただけでリースリットの双剣の価値を見抜いたらしい。

武器の目利きが優れているというのは確かなようだ。

「それじゃあ、そろそろ失礼します。」

宗太達はそれぞれ挨拶をすると、ユニスの店に向かう為に武器屋を後にした。

第11話 パパの暴走と短剣の購入です！（後書き）

急いで書き上げたんでちょっと短いかも知れません。
ごめんなさい。

それにしても親父さんやらリードやらユースやらと、我ながらお
っさんキャラの扱いが…。

それではまた次回の投稿で。

第12話 今後の予定と面倒事じゃ！

「次は服飾店じゃったかの？」

リードの武器屋を出た所でルシフェラが確認してくる。

「ああ、でも約束は夕方だったからまだ時間があるな。」

それまでどこかで時間を潰そうか。

しかし、宗太にはこの街の事は良く分からない。

「それじゃあ時間まで中央広場でゆつくりしませんか？」

宗太が悩んでいるのを見て、アンジェリーナが代わりに提案してくれる。

気配りの出来る良い娘だ。

「そうじゃの。今後の旅の予定も立てねばなんしのう。」

ルシフェラもアンジェリーナの案に乗る。

リースリットも文句は無いようだ。

ルシフェラが「旅の予定」と言った時、アンジェリーナがピクリと僅かに肩を震わせる。

「やっぱり旅に出ちゃうんですよね…。」

「うむ、一所に長く留まる訳にもいくまいで。」

ルシフェラの答えに寂しそうに肩を落とすアンジェリーナ。

しかし、直ぐに顔を上げると何かを決心したような表情となった。

宗太はそれを別れる決心を付けたという風に捉えたのだが、それは全くの間違いだったと後になって知るのだった。

中央広場は今日も沢山の人が溢れかえり、二日前と変わらぬ喧騒に包まれていた。

宗太達は売店で果汁飲料を購入すると、噴水前に丁度空いていた四人掛けのベンチに腰を下ろす。

午後の陽気の中、噴水の水音が耳に心地良く届く。

「…さて、では今後の予定について決めてしまおうとするかの。」

ベンチに座ると、早速ルシフェラがそう切り出した。

席順はアンジェリーナ、宗太、ルシフェラ、リースリットの順だ。

三人の美少女に囲まれて正に両手に花状態。

さつきから通りすがりの野郎共の嫉妬の視線が宗太に突き刺さっている。

アンジェリーナはやけに真剣な表情で話を聞く体勢になっていた。

「…そうですね、私としては王都に赴き召喚魔法陣の破壊をすべきかと思っています。」

「ふむ。しかし、まだ我が国からの終戦の使者は出ておらん。今破壊工作をするというのはちと骨じゃぞ？」

ルシフェラは難しい顔をする。

魔王国との戦争真っ最中である現状、王都は特に魔族に対する警戒が厳しいのだろう。

下手をすると、王城どころか王都自体に入るのすら難しいかも知れない。

「勇者が居らぬ今、終戦の申し入れは問題なく受け入れられるだろう。しかし、現段階で向かい入城審査でソータの存在が知られば厄介な事になるかもしれぬ。」

「ッ！…申し訳ありません、浅慮でした。」

今勇者の存在が知られれば宗太は確実に拘束されるだろう。

追い詰められた人間がどのような手段に出るかも分からない。

下手をするとその場で一国と事を構えることにもなりかねない。

そうなれば一番危険に晒されるのは、現在一番力の無いアンジェリーナだろう。

そこまで考えが至ったのか、リースリットはルシフェラに頭を下げる。

「良い、確かに重要な問題じゃからのう。しかし、急いては事を仕損ずるということじゃ。」

「…はい。」

「…なあ、ルーベックって何処にあるんだ？」

若干重くなつた雰囲気の後込みしつつ、宗太は気になっていた事を訊ねてみることにする。

「…む？ルーベックならここから北東に馬で五日程向かった所じゃが、それがどうかしたのかの？」

難しい顔で何やら考えていたルシフェラが、顔を上げて教えてくれる。

「そんなにかかるのか…。なら一度ルーベックに寄らないか？そっち経由なら王都に着くまでに使者も着いてるかなって思ったんだけど。それに剣も直しといった方が良くかもしれないし。」

「…それなら、王都に着くまで二、三週間といった所か。…うむ、良いかもしれぬの。」

「そうですね。それなら時間としても充分でしょう。」

宗太の提案にルシフェラは少し考えるような仕草を見ると、賛成してくれる。

難しい顔で悩んでいたリースリットも表情を緩める。

「いつ頃出発するんですか？」

出発日はアンジェリーナにとって最も気になる事だった。

予定によっては早急に両親を説得せねばなるまい。

（お家の手伝いは…、お兄ちゃんに任せよう！）

一方、ロイドはアンジェリーナがそんな事を考えているとは露知らず、今日も今日とて西門の見張りに勤しむのであった。

「そうじゃのう、あまり長居はせんつもりじゃが…。」

そう言つてルシフェラはチラリと宗太を見やる。

元々ルシフェラ達がこの街に来た目的は都市の保有戦力や防衛の穴を探し出すためだったのだ。

侵攻を中止すると決めたからには最早その必要もない。

出発予定日は宗太の予定によつて決めるつもりであった。

「俺は壊した部屋の弁償さえ済めばいつでも良いよ。」

「ふむ、ならば明日にでも旅の準備を整えて、ソータの用事が済み次第出発という事にするかの。」

こうして出発予定日が決められる事となった。

「それじゃ、そろそろユニスさんの店に行こうか。」

宗太は立ち上がり、三人のコップを受け取ると屋台へと返しに行く。

「君たち暇？俺らと遊ばない？」

宗太がベンチを離れると、程なくルシフェラ達にそう声かけられる。

何事かと三人が声のした方を見やると、そこには二人の若者が笑みを浮かべながら立っていた。

二人共、腰に片手長剣を佩き、軽装の革鎧を着込んでいる所を見ると冒険者なのだろう。

しかし、剣と鎧はどちらも素人目に見ても安価と判るような物で、そこから察するにランクは高くは無さそうである。

ルシフェラは、男達の笑顔に下心が混ざっているのを見て取り、げんなりとした表情を浮かべる。

「残念でも無いが、儂等にはオヌシ等に構っている暇なぞ無い。」

「まあまあ、そう言わないでさ。見たところ君たちも冒険者でしょ？ ランクは幾つ？」

ルシフェラの気のない返答にも構わず男達は話を続ける。

自分達のどこを見て冒険者だと思ったと言っのだろうか、とルシフェラは思う。

見える場所に武器を持っているのはリースリットだけ。

ルシフェラは魔剣を影に仕舞っているし、アンジェリーナの魔導書はカバンの様なブックホルダーに入れられていて外からでは分からないだろう。

そこまで考えて、ルシフェラは答えに行き着き呆れる。

（コヤツ等、ソータが居るのを見てたのじゃな…。）

わざわざ宗太が離れるのを待つて声をかけてくるとは。

「え、えつと…、Dランクですけど。」

「アンジー、斯様な奴らにわざわざ答えてやる必要は無いのじゃぞ？」

困った様に眉根を下げ、身体も若干引きながらも律儀に答えるアンジェリーナに、ルシフェラは苦笑しながらも助言してやる。

「へー、まだ小さいのにやるじゃん。俺らだからさ、もっと色々教えてあげちゃうよ？」

「必要ありません。それに、ランクでしたらあなた方も見ていた私達の連れ合いはBランクなんです。」

リースリットも男達が観察していた事に気付いたのだろう。

男達の下心の見え透いた提案に、全くの無表情でそう答えた。

男達の表情に僅かに動揺が走る。

「ただいま、…ってどうかしたの？」

そんな時、タイミングが良いのか悪いのか宗太が返却を済ませて戻ってきた。

「…ッ！…何でも無^ねえよ、テメエはすっこんでろ！」

宗太の声に男達は一瞬ビクリと肩を震わせる。

しかし、冴えない宗太を間近で見たりスリットの言葉をはったりと思ったのか、脅すように怒鳴りつける。

「…は？何なんだいきなり？」

戻ってきて早々見知らぬ男達に怒鳴りつけられ、宗太は困惑が隠せないでいた。

いつの間にか、宗太達の周りには怒鳴り声を聞いた通行人達の人だかりが出来てしまっている。

「…やれやれ、リース。」

「畏まりました。」

しつこい男達に辟易し、溜め息を一つ吐くとルシフェラはリースの名を呼ぶ。

それだけで主の言わんとしている事を察したリースリットは、一言だけ返すと徐に立ち上がり男達に向き直る。

「…それではこう致しましょう。あなた方と私が闘い、あなた方が勝つことが出来た暁にはあなた方にお付き合い致します。武器を抜いても構いませんよ。」

「…へっへっ、後でやっぱり状態でしたってのは無しだからな。」

それを聞いた男達は宗太を威圧するような表情から一転、笑みを浮かべると腰に佩いた片手長剣を引き抜く。

宗太だけは展開に着いて行けず、困惑を強めるばかりだ。

そんな宗太を余所に、男の一人がリースリットに切りかかる。

上段から袈裟懸けに振るわれたそれを、しかしリースリットは半身を引く事で難無くかわす。

リースリットは両拳に紫電を纏わせると、剣を振り切り無防備になった男の脇腹に左拳でボディブローを当てる。

すると紫電が弾け、男は二メートル程吹き飛ぶと地面を転がり痙攣する。

リースリットは殴り飛ばした男に一瞥もくれずに、もう一人に向き直る。

顔を青ざめされている男の横に一瞬で移動すると、右足を男の足の後ろに引っ掛け右手で胸を押す。

バランスを崩した男はそのまま地面に倒れ込むが、その瞬間やはり雷撃をその身に受け気絶する。

白目を剥き、口から泡を吹きながら痙攣、失禁までする様は見ていて同情したくなる。

「…紫電の、侍女^{メイド}。」

圧倒的な力で二人の男を瞬殺するリースリットを見て、あまりの光景に呆然としていた野次馬。

その中から、ポツリとそんな事を呟いた者が居た。

その瞬間、野次馬の中の冒険者や一部の市民からどよめきが始まる。

「紫電の侍女って……。」

「…あのギルドの……。」

「…Fランクで数人のCランク冒険者を瞬殺……。」

「あんなに若い……。」

「可愛い顔して……。」

「ハアハア、萌え……。」

ざわめきは一気に広がり、野次馬達の間でその様な会話が繰り広げられる。

一番最後のは聞かなかった事にしよう、うん。

「…紫電の侍女とは何じゃ、リースの二つ名か!？」

突然の出来事と、意味の分からない野次馬の会話に四人はただ困惑するばかりだ。

そうこうしている内にも野次馬の数は増えていき、それに連れざわめきも大きくなっていく。

「…と、とりあえず逃げよう!」

一種異様な空気に若干引きながらも、四人は野次馬の輪を突破する事にする。

幸いにも、宗太達が近付くと人混みが割れていった為、午前中の事を思い出しながらも抜け出すのは簡単だった。

「…何だったんじゃ、一体？」

「…さあ？」

人混みを抜け出し南区を暫く走った後、四人はようやく立ち止まり一息吐く。

ちなみに足の遅いアンジェリーナはリースリットが抱えて走っていた。

驚き、畏敬、崇拜、様々な感情の籠もった大量の視線はある意味恐怖だ。

宗太達は揃って頭を振り、思い出さないようにする。

「ユニスさんの店の近くまで走って来たんだな。」

広場での騒動があった為、走っても丁度良い時間のようなだった。

「あれ？閉まってる。」

ユニスの店の前に着くと、扉に『閉店』と書かれた板が掛けられていた。

「…お出掛けしてるんですかね？ユニスさん！」

アンジェリーナが扉を叩き、声を掛ける。

暫く待つと、人の近付いてくる気配の後に鍵を開ける音がし、扉がゆっくりと開く。

「待ってたよ…。」

目の下に隈を作り、疲れ切った表情でふらふらとしているユニスは、さながらガンシューティングゲームに出てくるゾンビのようで宗太は若干引いてしまった。

「ゆ、ユニスさん！？どうしたんですか？」

普段の快活な彼女からは想像も出来ない様子のユニスに、アンジェリーナは戸惑いの声を掛ける。

「いや、思わず二日間も不眠不休で作業しちゃってね。とりあえず入りなよ。」

そう言ってユニスはふらふらと店の奥に歩いて行く。

宗太達も店に入ると、店内でユニスを待つ。

すると、ユニスは直ぐに数着の衣服を持って戻ってきた。

「ほら、上下と下着二着ずつだ。アンタの服を参考に作らせて貰ったよ。」

そう言って差し出された服を広げると、白いワイシャツに黒の詰め襟、スラックスだった。

詰め襟は厚手で、スラックスと共に肌触りの良い生地が使われている。

襟前のホックは紐になり、ボタンは木製の丸ボタンになっているという変更点はあったが、少し見ただけでここまで再現出来る事に驚きを隠せない。

「ふうむ、良い腕じゃのう。」

服を見たルシフェラが感心したように言う。

「時間が無くてボタンにまで手を回せなかったんだけどね。それに金でボタンを作るとなると金がかかるからね。余裕が出来たら細工師にでも頼んでおくれ。」

「いえ、ありがとうございます。お幾らですか…?」

宗太は礼を言うと、恐る恐る金額を訊ねる。

ボタンが普通の物でも、ここまでの物となるとそれなりの代金になってしまうのではないだろうか。

「そうだね、全部で9000エリーってとこかね。」

9000エリー…日本円換算で7万円程度だろうか。

ここまで上質な服ならもっと高いと思ったのだが。

「どうぞ。とても良い服だったので正直もつと高いものだと思ってました。」

宗太はユニスに代金を支払うと、素直な感想を述べる。

「はははっ、アンジーのオトコには少しサービスだよ！」

ユニスは楽しげに笑うと宗太の背中をバシバシ叩きながら言う。

アンジェリーナは例の如く頬を染めていた。

「で、他に用はあるのかい？」

「いえ、ありがとうございました。」

服は四着もあれば充分だ。

しかし、詰め襟四着はかさばる。

リースリットに保管を頼めるだろうかなどと考えてしまった。

「はいよ、それじゃアタシはもう寝るとするよ。」

ようやく休めるー、とボヤクユニスに苦笑しながら最後にもう一度礼を言っと、ユニスの店を後にする。

宿に戻る前にもう一度リードの店に寄ると、早くも柄紐の調整は終わっていたようだった。

何度か握りを確認していたアンジェリーナも気に入ったようで、細いベルトも一緒に購入すると早速腰に吊していた。

「普通のナイフと違い、ソレは細い剣なら根元の櫛で絡めてへし折る事も出来る。扱い方ならリースに教わると良いじゃろう。」

「はい、よろしく願いします！」

宿への帰り道、ルシフェラがアンジェリーナにそう提案する。

持っているだけで使いこなせなければ、護身用の武器としても意味は無い。

アンジェリーナは勢い良く返事をする。リースリットに深々と頭を下げる。

「それでは、暇を見て訓練を致しましょうか。」

リースリットも快諾し、微笑みを返す。

「でも、ナイフの扱いってそんなに簡単なものじゃ無いんじゃない？」

「当然だろう。練習あるのみじゃな。さて、宿に着いたし食事を取ったら今日は早めに休むとしようかの。」

そこまで訓練する時間はあるのだろうか？

宗太の疑問にルシフェラは簡単な答えを返すと話題を変える。

宿に戻ると直ぐに夕食を取る事にした。

おかみさんが言った通り、テーブルの上には普段の宿の食事よりも豪華な料理が所狭しと並んでいる。

だが、残念ながらせつかくの豪華な料理の数々も、調理場から飛んでくる恨みの籠もった視線が気になりゆっくりと味わう事は出来なかった宗太だった。

四人での食事を終え、一服した後は部屋に戻ってそれぞれ休む事になった。

宗太も疲れを癒やす為　主に夕食時の気疲れだが　、部屋に戻ると倒れ込むようにベッドに横になり眠りにつくのだった。

皆が寝静まった深夜、宿屋の一室に突如人影が現れる。

「戻ったか。…で、どうなのじゃ？」

「はい、終戦の使者は明日には送り出すようです。」

部屋に居たルシフェラが現れた影　リースリットに訊ねると、リ

リースリットがそう報告する。

リースリットは夕食後から先ほどまで、連絡役として王城まで戻っていたのだった。

「ふむ、ならば使者がエルトリアの王城に着くまで二週間と少しといったところかのう。」

ルシフェラは魔王国からの使者が着く時間を計算し、安堵の吐息を漏らす。

それだけあれば、ルーベック経由での道程なら余裕を持って行けるだろう。

「…それと、昨日エルトリアは再度勇者召喚の儀式を行ったそうです。そして、侵攻推進派の面々で此度の侵攻中止を快く思っていない者が居るという事です。それに関してはディラン様の配下の者が探り、逐一報告致しますとの事です。」

「…うむ、召喚の儀式は直に解決するとして、推進派の問題も対策を考えておかねばならぬかのう。」

ルシフェラはそう言って溜め息を吐く。

次から次へと、面倒事はなかなか無くなってはくれないようだ。

ルシフェラは窓から見える欠けた月を眺めながら考えを巡らせるのだった。

第12話 今後の予定と面倒事じゃ！（後書き）

やっと更新分書けた…。

もしかしてなんですが、話のテンポ悪いですか？

今回の12話目で漸く宗太が召喚された時から五日間が終わった所なんですよね。

その所はご意見、ご感想お待ちしております。

そして、前々回更新時からかなりお気に入り件数が増えて嬉しかったやらの驚いたやら。

どうもありがとうございます！

それではまた次回の更新で。

第13話 出発の準備と最後の散歩です

「んー。」

窓から差し込む柔らかから朝の日差しを受けて、宗太の意識が眠りから浮上する。

朝になった事を未だぼんやりとする頭で何とか理解すると、上体を起こし軽く頭を振る。

そうしている内に、何とか意識がはっきりしてきたのを感じる。

そのまま伸びをして身体を解す。

この宿で寝起きするのも五回目ともなれば、木製の寝台に薄い布団が敷かれただけの固いベッドにも慣れてきた。

しかし、同時に安物ながらコッチの物よりもずっと寝心地の良かった自分のベッドが恋しくもなってくる。

戻れないのだから考えるだけ無駄な事なのだろうが。

溜め息を一つ吐いて元の世界の事を頭から追い出すと、のろのろとベッドから這い出して着替えを始める。

ワイシャツに腕を通し、ズボンを履く。

詰め襟を手に取ったところで、まだ着る必要もないかと思い直し、コートハンガーに引っ掛けると部屋を出る。

「お早う、ルシフェラちゃん達はもう降りて来てるよ。」

一階に降りるとおかみさんが声を掛けてくる。

食堂内に視線を移すと、壁際のテーブルの一つでルシフェラとリースリット、アンジェリーナがお茶を飲みながら談笑しているのが見えた。

「お早うございます。ちょっと顔を洗って来ますね。」

「はいよ、それじゃあ朝食の準備をしておくよ。」

毎度の挨拶を交わし、宗太はそのまま裏庭に出る。

少し肌寒い、早朝の澄んだ空気が心地良く、寝起きのダルさの残る身体に染み渡る。

井戸まで歩いて行くと水を汲み上げて桶に移し、両手ですくい上げると顔を洗う。

冷たい井戸水で二度、三度と顔を洗うと漸く意識が覚醒しきった。

「…ふう。」

タオルで顔を拭い、桶の水を流し井戸の脇に立てかけると食堂内に戻ることにする。

「お早う。」

ルシフェラ達の座っている席まで行くと、軽く挨拶をして席に着く。

「うむ、お早う。」

「お早うございます。」

「お早うございます、ソータさん。お茶を淹れますね。」

三者三様の挨拶をすると、アンジェリーナが宗太の分のカップにお茶を注いでくれる。

「ありがとう。…それで、今日はどうするんだ？」

宗太はカップを受け取ると一口お茶を飲み、今日の予定について話し合うことにする。

ここ最近で恨みから殺意に変わった親父さんの視線が調理場から放たれているが、あえて意識から外すことにする。

「ふむ、そうじゃのう…。旅に必要な物はあらかた揃えたから、弁償が済むまでは自由行動にでもするか。」

ルシフェラは顎に指を当てて何やら考えると、そう提案する。

いつ出発する事になるかが分からないため、宗太達は 家の手伝いをしていたアンジェリーナを除き 昨日、一昨日と旅の準備を整えていたのだった。

保存食や水から始まり防水性に優れたマント、毛布、天幕、薬など旅に必要と思われる物から、お茶やお菓子などの嗜好品、何故かテールや椅子まで。

すべて合わせると結構な量になるそれらは、しかしこの宿のどこにも置かれていない。

大荷物を抱えての旅を思い、憂鬱になる宗太を後目にすべてリリースが影に収納してしまったのだった。

闇属性は旅人向けの属性なのではないだろうか。

宗太の持つ光属性も似たようなことを出来るという話だったが、残念ながら宗太はまだ光属性の魔術を覚えていない。

唯一使えたのは聖剣くらいのものである。

「あ、そのことでしたら...。」

「お待たせ、朝食だよ!」

アンジェリーナが何やら言いかけたが、丁度朝食を運んできたおかみさんの威勢の良い声に遮られてしまった。

「ああ、そうそう。今日部屋の修繕に職人が来るからね。多分、修繕は今日中には終わるだろうから、弁償代はその後頼むよ。」

おかみさんはテーブルに四人分の料理を並べながら知らせてくれた。

ヘル・ハウンドを討伐して戻ってきた日から、アンジェリーナは宗太達と一緒に食事を取るようになった。

本来であればアンジェリーナも客に見えない調理場で食べるのだが、宗太達の仲間であるし、おかみさんも認めてくれたのだ。

勿論のこと、宗太達は旅装を整える買い物の中でも昼食時には宿に戻って食べるようにした。

そのために準備に二日も掛かってしまったのだが。

「分かりました。」

「アンタ達ともお別れかい。旅人との別れは当たり前のことだけど、寂しくなるねえ。」

宗太が答えるとおかみさんは苦笑し、調理場の方に戻って行った。

「…そういえば、アンジーがさっき言いかけたのって？」

「ママが代わりに言っちゃいました。今日修繕の職人さんが来るっていうことです。」

宗太は朝食を取りながらアンジェリーナが何やら言いかけていたことを思い出す。

しかし、タイミングが良いのか悪いのか、アンジェリーナが言いたかった事はおかみさんと同じ事だったらしい。

「では、出発は明日ということで良いかの？」

ルシフェラがナイフとフォークを器用に使い目玉焼きを食べながら皆に聞く。

この世界の食事用具はナイフとフォーク、スプーンが基本な為、ど

の人も扱いが上手い。

宗太も一応使えはするのだがやはり日本人、ナイフやフォークよりも箸を使いたいものである。

ルシフェラに聞いたところ、エルトリア王国の東の島国には食事に箸を使う風習があるらしい。

一度行ってみたいと思った宗太だった。

閑話休題。

「うん、それで良いけど足はどうしようか。ギルドでルーベックまでの護衛依頼でもあれば良いんだけど。」

馬で五日かかるのなら徒歩で行くというのは論外だろう。

どれだけ時間がかかるのか分からない。

「そうじゃのう、ギルドで依頼を確認して、無ければ馬車でも買っただけ無いじゃろうな。」

「馬車っていくらするんだ？それに俺は馬の御し方なんて知らないぞ。」

報酬がまだまだ残っているとはいえ、あまり高い買い物だと後々心許なくなる。

それに現代日本人である宗太が馬車の扱いなど知っているわけがないのである。

「金貨が二、三枚もあればそれなりの馬車は買えるじやろう。それに馬ならリースが扱える。御者はリースに任せるとしよう。」

金貨で二、三枚というと日本円換算で100万から200万円くらいだろうか。

どうやら自動車と値段は大差無いようだ。

宗太は残金を思い出しホッとす。

アンジェリーナの取り分を引いても金貨五枚は残っている。

これなら馬車を買ったとしても余裕は残るだろう。

「畏まりました。」

リースリットは頷き、御者役を引き受ける。

「そつか、それじゃあ食べ終わったら早速ギルドに依頼を見に行こう。」

「うむ。」

「はい。」

「行つてらっしゃい、気をつけて下さいね。あたしはお手伝いがあるので。」

アンジェリーナだけはやはり留守番だ。

一応ギルドで金貨も両替しておいた方が良さだろう。

旅装を整える買い物の際、銀貨数枚の買い物に金貨を出したら店主

に泣かれてしまったのを思い出す。

中小規模の商店ではあまり角金貨などの大金は手元に置いてないらしい。

余裕のある分は商業ギルドか冒険者ギルドなどに預けるのだとか。

こまめに両替をするか、多めに崩しておいた方が良さだろう。

余談だが、この世界に銀行は無い。

例え銀行を作ったとしても、信用の差で皆ギルドに流れてしまうのだろう。

四人は会話もそこそこに、残りの食事を片付けることに集中することにする。

ギルドに着くと、早速三人は依頼掲示板の内、護衛依頼が張り出されている部分を眺める。

早朝からそこそこの賑わいを見せるギルド内では冒険者、ギルド職

員問わず、ほとんどの視線が宗太達三人へと向けられていた。

ロングホーン・ボアを素手で倒し、尚且つ持ち上げて運んだ宗太。

Cランク冒険者を二度も瞬殺したリースリット。

極めつけはヘル・ハウンドをD、Fランクの四人で倒し、大人が十人掛かりでも持ち上げられないような巨体をたった三人で運んで来たということ。

宗太達は早くもこの都市の一般市民ですらその名前を知る存在となっていた。

中にはアンジェリーナの知り合いもいて、飲みに来るついでにからかったりしていた。

悪目立ちし過ぎたとアンジェリーナを除く三人を後悔させたのは言うまでもない。

「ないな。」

「ないのう。」

「ないですね。」

掲示板を眺めながら、揃って肩を落とす三人。

護衛依頼は殆どが近隣の村への買い付け目的か王都方面、もしくは南方の国外の都市へのものだった。

「仕方ない、素直に馬車を買うとするか…。」

護衛依頼があれば、内容次第では旅費も浮かせられたのだが、無い物ねだりをして仕方がない。

人間諦めも大事なのだ。

宗太はギルドの受付まで行くと、受付嬢に金貨の両替を頼む。

受付嬢は凄く緊張しながらの対応をしていた。

細かい金に余裕を持たせるため、両替は角金貨八枚と銀貨二十枚にしておく。

ついでに馬車を売っている場所も聞いてみる。

どうやら南区の城門近くにあるようだ。

細かい場所は通行人にでも聞きながら探せば良いだろうと判断し、受付嬢に礼を言ってルシフェラ達にもそう伝える。

受付嬢は明らかにホツとした表情をしているが、ここは気にしないでおく。

もう気にするだけ疲れるだけである。

「この辺りかのう？」

「…だと思っただけど。」

冒険者ギルドを出た宗太達は、現在南門の周辺まで来ていた。

通行人や衛兵に聞きながらの店探しである。

「…ああ、あれかな？」

教えて貰った通りに、大通りから入る比較的広い脇道を進むこと数分。

目的地と思われる店舗を発見した。

比較的ごんまりとした店舗と、その後ろには反対に周囲の商店が軽く九軒は収まりそうな倉庫がある。

倉庫の脇にある厩には数頭の馬が繋がれている。

「いらつしゃい。ご用件は？」

宗太達が表の店舗に足を踏み入れると、中年男性が応対した。

頭頂部が若干禿げかけ、口髭と肥満体が何ともステレオタイプの商人風だ。

「馬車と馬を買いたいのですが。」

宗太がそう切り出すと、店主は訝しげな、そして値踏みするような視線で宗太達を見る。

まあ、あまりに若い　まだ子供と言っても良いような三人が馬車を買いたいなどと言ってくれば、疑いたくなるのも当然だろう。

宗太とリースリットは予想していたため表情には出さなかったが、ルシフェラは若干不機嫌そうな顔をしている。

「はい、金貨四枚もあれば充分だと思うのですが、足りませんか？」

「いやいや、それだけあればかなりの物を買えるが……。」

リースリットの質問に答える店主は、しかし本当に持っているのかと言いたげだった。

一般人の給料を丸十ヶ月分ともなれば当然の反応と言えなくもないが。

リースリットが懷から金貨四枚を出すと、ようやく信用してくれたようだ。

「……いや、疑って済まなかった。付いて来てくれ。」

店主はそう言つて店の奥から鍵束を取ると、倉庫に向かう。

倉庫に入ると、荷馬車や幌馬車から始まり大小様々な馬車が並べられていた。

「この中から選んでくれ。金貨四枚ならどの馬車でも馬付きで買える。」

宗太は馬車や馬の良し悪しなど分からないので、選ぶのはルシフェラ達に任せる事にする。

ルシフェラとリースリットは一台一台、じっくりと時間をかけて車輪周りから内装までを調べ始める。

二人乗りから六人乗り、天井付きと天井無し、車輪が本体の前後に大きくはみ出して付いている物など、改めて見ると本当に色々な種類がある。

「親父殿、これにしよう。」

ルシフェラが選んだ馬車は、屋根付き四人乗りの馬車だった。

旅の足として使うため、派手な装飾などは見当たらない。

実用性を重視したのだろう。

四人乗りと言っても幅は広く、ギリギリ六人は乗れるだろうか。

両側に扉と御者席の間には開閉出来る小窓、屋根の上には荷物も載せられるようになっており車両後部に梯子が備え付けられている。

「次は馬車馬を見せて貰うかの。」

ルシフェラに促され、店主の案内で厩舎に向かう。

厩舎へと着くと、再びルシフェラとリースリットが馬を一頭一頭観察し始める。

店主は何を思ったか右手を顎に当て、そんな二人を興味深そうに見

ている。

「馬はこれが良いかの。」

ルシフェラはそう言って一頭の青毛の牡馬を指し示す。

体高は150センチメートルを越え、素人目に見ても他の馬とは気品が違うように感じられる。

「…大したもんだ。ソイツは確かにウチで一番の馬だよ。牽引馬としての実力は勿論、気性は大人しい上に魔獣に襲われても動じないヤツだ。」

目利きをルシフェラ達に任せて正解だったようだ。

店主も最初と違い、今では感心したように見ている。

「それで、幾らになるのかのう？」

「そうだな…、合わせて32万エリーだ。」

金貨三枚と角金貨二枚を支払う。

少々痛い出費ではあるが、状態の悪い馬車や馬を購入するよりはマシだろう。

「引き渡しは直ぐか？」

「いや、明日の朝にこの街を出るので。その時まで預かって置いて貰えぬか？」

「分かった、なら明日の朝に出せるように準備をしておこう。」

「うむ、よろしく頼む。」

移動の足も確保出来たことであるし、もうこの街でやることもないだろう。

三人は揃って店を後にすると、宿に戻ることにする。

少し遅くなってしまったが、アンジェリーナも交えて昼食を取ることになった。

「ふむ、大通りや中央広場とは少し違うが、なかなか賑やかじゃのう。」

「中央広場と二つの公園はこの街の市民や旅人の憩いの場なんですよ。」

「なる程のう。ここまで整備するのは骨じゃろくに、良くやるもんじゃ。」

午後の少し強い日差しを避けるように木陰の遊歩道を歩きながら、ルシフェラとアンジェリーナが楽しげに会話を弾ませている。

宗太とリースリットはそんな微笑ましい二人を眺めながら、二人の後を静かに歩く。

宗太達は現在四人揃って西側の公園へと続く遊歩道にいた。

何故こんな場所に居るのかと言うと、話は昼食時まで遡る。

「ついに明日出発ですか…。」

昼食を食べながらアンジェリーナは少し寂しそうに呟く。

見るとあまり食が進んではないようだ。

先ほどからナイフとフォークを扱う手が頻繁に止まっている。

「…アンジー、この前約束したの覚えてる？アンジーさえ良ければ午後は公園に散歩にでも行かないか？」

この街に来てからまだ一週間も経っていないが、随分と仲良くなったために別れるのが寂しいのだろうと解釈した宗太はそう提案した。

「…本当ですか!？」

途端にパアッと顔を輝かせるアンジェリーナに宗太は一つ頷くと、提案してみて良かったと思う。

「…二人だけでか?」

すると、それを聞いていたルシフェラが不機嫌さを滲ませながらジト目で宗太を見る。

ルシフェラは内心モヤモヤとした物を感じていたが、それは仲間なのに二人で遊びに行くことに対するものとして処理した。

実際、ルシフェラ達は都市の内部は調べていたが、それはあくまで仕事としてのものであり、息抜きなどの目的で落ち着いて探索した事はないのだった。

リースリットも何か言いたげな視線を宗太に向ける。

「…みんなで行こうか。散歩でも仲間で行った方が楽しいもんね…。」

二人の視線に耐えきれず、若干引きつった笑顔でそう提案する。

ヘタレと言っなかれ。

美少女二人の無言の抗議に抵抗できる男などいようか？

いや、おるまい。

アンジェリーナも嬉しそうだし良いのである。

「それじゃあ、時間も勿体ないし早めに食べちゃおう。」

こうして午後の予定は決められたのだった。

回想終了。

「ソータさん、早くー！」

「遅いぞ、ソータ！」

回想している間に先に進んでいた二人から声を掛けられる。

少し歩く速度が遅くなっていたようだ。

「ごめん！」

宗太は謝ると、追いつくために歩く速度を速める。

しばらく歩くと公園の中央、池のある場所までたどり着く。

宗太にとっては二重の意味で思い出深い場所でもある。

「む、ここは…。」

ルシフェラが何やら思い出したように気まずそうな表情を浮かべる。

「ここが西側の公園の中央なんですよ。…あれ？何で石畳がここだけ新しいんだろ。」

笑顔で説明するアンジェリーナだったが、一部だけ新しくなった石畳に気づき頭に疑問符を浮かべる。

原因となった二人は冷や汗を流しながら、リースリットは冷静な表情のまま揃って明後日の方向に視線を向ける。

そんな三人を見ながら、さらに小首を傾げるアンジェリーナだった。

第13話 出発の準備と最後の散歩です（後書き）

いつの間にかPV86000、ユニーク5000を越えてました。
ありがとうございます。

そして日間、週間ランキングにも載っていました。
重ねてありがとうございます。

今回で実に11話を費やしたハーベルでの滞在も終わり。
次回から次の目的地、ルーベックを目指して旅に出る予定です。

それではまた次回の投稿で。

第14話 最後の夜と出発と

「そろそろ帰ろうか。」

「む？おお、そうじゃのう。」

公園のベンチに座りたわいもない話をしてた宗太達だったが、ふと時間に気付いた宗太がそう切り出す。

腕時計を確認すると、時刻は午後五時過ぎ。

日も沈みかけ、辺りの人影もまばらだった。

家族連れの人達は、皆もう家路についたのだろう。

残っているのは数組の冒険者パーティらしき人達とカップルくらい。

遊歩道脇の屋台も店仕舞いを始めていた。

宗太達も立ち上がり、帰路につくことにする。

「お話しが楽しくてつい時間を忘れちゃいました。」

「申し訳ありません、私もつい時間を忘れてしまいました…。」

「リースが時間を忘れるとは珍しいこともあったもんじゃのう。」

「まあ、良い息抜きになってよかったんじゃない？」

歩きながら恥ずかしそうにペロツと舌を出すアンジェリーナとは反対に、若干落ち込んだ様子を見せるリースリット。

ルシフェラ付きの侍女として幼い頃から教育を受け、同時に長く使えてきたリースリットにとって、時間に気付かないなどと言うことは今まで片手で数えられる程度のことだった。

それを知っているルシフェラとしては、有能な侍女のうっかりミスを見ることが出来て楽しそうに笑う。

宗太としても、パーフェクトメイドなリースリットが時間も忘れて話し込んでいたということが何だか新鮮で、自然に笑みが浮かんでしまう。

宿への帰り道は、主にルシフェラがリースリットをからかう時間となり、ゆつくりと進んでいくのだった。

時刻は午後五時半。

西区の商店も軒並み店仕舞いをし、喧騒の中心は酒場へと移っていく。

あるものは仕事の疲れを忘れるため、あるものはカミさんや気に入らない客の愚痴を言い合い慰め合い、またあるものは明日の依頼や旅に思いを馳せて。

開け放たれた食堂や酒場の扉の中からは、怒りや笑いなど様々な声が入り混じり、通りに昼間とはまた違った賑わいをもたらす。

そんな賑わいの一角、宗太達の宿泊している宿屋へと入る。

「おう、将来有望な冒険者パーティのお帰りだ！」

「ガッハッハッ、あのアンジーがなあ！」

すると、入り口近くのテーブルに座った客が宗太達の帰りに気付いたように声を掛けてきた。

顔を赤くし、既に出来上がり始めているようだ。

その声で他の客達も気付いたようで、アンジェリーナの馴染みの客などは酒を片手に寄ってくる。

「聞いたぞ、初めての依頼でAランクの魔獣とやり合ったんだってなあ！」

「まだまだ子供と思ってたんだが…。」

「いやはや、子供ってのは成長が早いもんだ。」

「ウチのバカ息子なんて『有名な冒険者になる』なんて言ってた癖に二年経ってもEランクだぜ？」

「ハハハッ！アンジーとお前の息子じゃあ才能が違うわな。」

「あ、あの…！皆さん落ち着いてくだひゃっ…！？」

あっという間に酔っ払い客に囲まれ、揉みくちやにされるアンジェリーナ。

落ち着かせようと声を上げるも、残念ながらアルコールを摂取しデシヨンの上がっている男達の耳には届いていないようだ。

「…何か今日は何時以上に賑やかだな。」

普段も賑やかなのだが、今日はいつにも増して騒がしい。

どのテーブルも客で埋まっている状態だった。

しばらく呆然と、アンジェリーナを囲む客と店内を眺めていた宗太達だったが、そろそろアンジェリーナを助け出そうと動く。

「あんた達、入り口で騒いでたら邪魔だよ！」

すると、店内の喧騒の中にあってもよく響く怒鳴り声が聞こえてきた。

アンジェリーナを囲んで騒いでいた男達は皆一様に動きを止め、恐

る恐るといった風に声のした方に顔を向ける。

そこには、忙しそうに給仕をしていたおかみさんが怒りを湛えた表情で仁王立ちしていた。

首を竦めてスゴスゴと席に戻っていく男達に、ようやく解放されたアンジェリーナがホッと息を吐く。

「まったく…、最後の夜だったのに酔っ払い共が済まないね。」

怒りから呆れの表情に変わったおかみさんが宗太達の元まで歩いてくると、溜め息を吐いて謝罪する。

「いえ、今日はいつにも増して賑やかですね。…と、そうだ。部屋の弁償は幾らになりますか？」

「皆寂しいんだよ、アンジーを可愛がってくれてたからねえ。弁償は34000エリーだけど、宿泊代が13300エリー残ってるからね。20700エリーだよ。」

宗太の質問におかみさんは苦笑して返す。

それを聞いて、アンジェリーナも嬉しそうな、しかし僅かに寂しさを含んだ表情を浮かべた。

その表情を不思議に思いながらも、宗太はおかみさんに角金貨二枚と銀貨一枚を支払う。

「300エリーのお釣りだね。：悪いけど、店内はこんな有り様だからね。夕食は相席で勘弁しておくれ。」

「はい、大丈夫ですよ。」

お金を確認したおかみさんが一言謝り、宗太達を席に案内する。

「あ…。」

案内された席　食堂の奥、隅に置かれた円テーブルには宗太も見知った人物が二人座っており、宗太は思わず小さく声を漏らした。

「おう、ボウズ。」

「みんなお帰り。」

「リードさん、ユニスさん。こんばんは。」

宗太は二人に挨拶し、席に着く。

ルシフェラ達もそれぞれ挨拶をし、同じように席に着いた。

元々四人掛けのテーブルに六人も座っているため、とても狭い。

リードは特に大柄なので、圧迫感はかなりのものだった。

左右に座って平然としているアンジェリーナとユニスには拍手を送ってあげたいくらいだ。

ちなみに席順は宗太から時計回りにアンジェリーナ、リード、ユニス、リースリット、ルシフェラである。

「そういえば、リードさんは何度かお酒を飲みに来てましたけど、ユニスさんはあまり来ないんですか？」

リードは二日に一遍は来ていたようだが、ユニスが飲みに来たのは宗太がこの宿に泊まってから初めての事だった。

「ああ、アタシは……。」

「はいよ、夕食とお釣りの300エリーだ。」

宗太の疑問にユニスが答えようと口を開いたとき、丁度おかみさんが夕食を運んできた。

何時もは個人個人の食事だったのだが、今日は大皿でいくつか持ってきたようだ。

テーブルが狭いのでこちらの方がありがたい。

大皿の料理を置くと、取り皿とナイフ、フォークを六人の前にそれぞれ置いて戻っていく。

量が多いと思ったら六人前だったようだ。

それぞれ料理を取り分けると、食べ始める。

「…アタシは普段は飲まないんだけどね、今日は特別。可愛い妹分

の門出を祝おうと思ってね。」

ユニスは酒を飲みながら、先ほど中断した会話の続きをする。

そう言つてアンジェリーナを見て微笑むと、他の面々も顔に笑みを浮かべる。

ただ一人、理解出来てない宗太を除いてだが。

「門出つて、アンジー何か始めるのか？」

宗太が真面目な顔でアンジェリーナに訊ねると、アンジェリーナは目をパチパチと瞬かせ、リードとユニスは「何を言ってるんだ」と言いたげな表情をする。

宗太の考えていることを理解したルシフェラとリースリットは、呆れ顔で溜め息を吐く。

『ソータ…。』

何故かリリースまでもが呆れた様子だった。

「え…、え…？」

宗太は訳も分らず五人を見回す。

「ソータよ…、アンジーが何故魔術の習得を目指したかは覚えておるかの？」

ルシフェラがこめかみに指を当てながら宗太に訊ねる。

「えっと…、確か俺達が旅に出るって話をしてて…？」

宗太は依頼を受ける前のやり取りを思い出しながら言う。

確かそんな感じだったはずだ。

「そうじゃ、儂等と旅に出るために覚えたという事じゃ。ユニス嬢が門出と言ったのはそのためよ。」

そう言ってルシフェラは再び溜め息を吐く。

何故アンジェリーナの態度から察せないのかと、宗太の鈍感振りに呆れるばかりだ。

見た目12歳のルシフェラに「ユニス嬢」などと言われたユニスは苦笑を浮かべていた。

「あ…と…アンジーはまだ小さいし、宿の手伝いがあるから旅は無理だろうなと思ってた…。」

それを聞いて、一同はようやく宗太の考えを理解したようだった。

「パパとママはルシフェラさんが説得を手伝ってくれて、宿の方はお兄ちゃんが手伝ってくれる事になったんですよ。」

「ロイドさんが？…衛兵の仕事があるんじゃない？」

宗太はロイドとこの宿では一度も会っていない。

以前アンジェリーナに聞いたなら、衛兵の隊舎で寝泊まりしていると言っていたはずだが、時間はあるのだろうか。

「大丈夫ですよ。お兄ちゃんも初めは渋ってましたけど、隊長さん

が許可を出してくれましたし。」

「ククツ、いやはや、あの呆けた顔がなんとも…。」

ロイドとも既に話は着いていたらしい。

笑顔で報告するアンジェリーナと、一緒に行ったらしいルシフェラは思い出し笑いをする。

リードとユニスはここまで手回しが良いとは予想外だったのだろう、ポカンと口を開けてアンジェリーナを見ていた。

『旅に出たらソータも苦労しそうだね…。』

（はは、は…。）

これからの旅に若干不安を覚える宗太だった。

夕食も終わりに差し掛かった頃、店内は一層の盛り上がりを見せていた。

客達はテーブルを移動し、話し合い、笑い合う。

時折、「魔王軍は俺が倒す！」などという宣言が聞こえてくるが、終戦の報せが届いていないので仕方の無いことか。

流石のルシフェラも、これには苦笑せざるを得なかった。

「オウ、兄ちゃん。オメエさんも飲めや。」

ふと、顔を真っ赤に染め上げた客の一人が、酒を片手にふらふらしながら寄ってくる。

「えっと…、俺酒は飲んだことないんで…。」

「なあにー？オメエさんよう、そんな体たらくでアンジーを…、守れるのかあ？」

肩を組んで酒臭い顔を近付けてくる。

絡み酒とは面倒くさいことこの上ない。

周囲を見ると、他の客も幾人かこちらに寄ってくる。

「ボウズ、お前も男を見せてみる！」

「あっはっはっはっは！」

視線で皆に助けを求めるが、アンジェリーナはオロオロとし、リードとユニスは同じく酔っ払いだった。

「ソータよ、成人は皆酒くらい飲むものじゃぞ？」

「いや、俺は未成年……。」

「む？オヌシ歳は幾つじゃ？」

ルシフェラは意外そうな顔で宗太を見る。

「……１７だけど。」

「……１５くらいじゃと思っとなわ。……まあ、良い。大抵の国で成人は１５じゃから、飲酒も問題ないぞ。」

「申し訳ありません。私も…。」

宗太の年齢を聞いて、一同は驚きの表情を浮かべていた。

今まで童顔などとは言われた記憶の無い宗太だったが、歳を低く見られるというのも複雑な気分だ。

20歳も半ばを越えれば気にもなくなるのだろうか、生憎とそこまで歳も取っていない。

「俺の居た所じゃあ、成人は20歳からなの。そういうルシフェラやリースは幾つなんだ？」

「む、儂か？儂はひゃ…12じゃ。」

「私は16歳です。」

ルシフェラとリースリットの年齢を聞く限り、別に人種的なもので若く見える訳では無いようなのだが。

「ゴチャゴチャ言っな、成人してんなら問題ねえだろ！」

宗太達のやり取りに業を煮やした酔っ払いが、そう言いながら宗太を後ろから羽交い締めにする。

すると、別の男が宗太の口内に酒を流し込む。

「…む！？んぐっんっん…！！？」

宗太はいきなり口内に流し込まれた液体を、思わず飲み込んでしまふ。

苦味と僅かな辛味を感じた後、あっという間に顔が赤くなり、頭がクラクラする感覚がする。

「おお、イケるじゃねえか！」

男達は上機嫌で次々と宗太に酒を飲ませる。

「お、おいソータ？」

ルシフェラが慌てた声をかけるが、宗太には最早周りの声も雑音のようにしか感じられなかった。

五杯も飲んだころ、宗太はテーブルに倒れ込むようにして意識を失うのだった。

その後、宗太はリードによって部屋へと運ばれ、ルシフェラ達も部屋で休む事となった。

宗太に無理やり酒を飲ませた酔っ払い達は、その後おかみさんのお盆の餌食となったのであった。

よい子は人に無理やり酒を飲ませてはいけないのである。

翌朝、宗太達は揃って宿の前に居た。

宗太は二日酔いで痛む頭を抑えており、アンジェリーナとリースリットが心配そうに見ている。

宿の前には他にも親父さん、おかみさん、ロイドが揃っている。

「それじゃあ、気を付けてね。あんた達、アンジーをよろしく頼むよ。」

おかみさんが爽やかな笑顔で別れの挨拶をする。

最後まで遅しい人だ。

「アンジイイイイツ!!」

親父さんは地面に転がったままアンジェリーナの名前を叫んでいる。

例によって宗太に切りかかり、おかみさんにロープで縛り上げられたのだった。

いつものごとくお盆で気絶させないだけ、これも優しさなのかもしれない。

「大変かもしれないけど、アンジーをよろしくな。」

一方ロイドは疲れきった表情で宗太に話しかける。

鎧を着込んでいることから察するに、これから衛兵としての仕事があるのだろう。

「短い間でしたがお世話になりました。」

「うむ、任された。まあ、アンジーならそんなに心配は無いと思うがの。」

「お世話になりました。」

宗太達はそれぞれ挨拶を返す。

「パパ、ママ、お兄ちゃん、行ってきます!」

アンジェリーナも元気良く旅立ちの挨拶をする。

表情こそ笑顔だが、その目には涙が浮かんでいた。

10歳の少女なのだから、悲しくないはずがない。

宗太が軽く頭を撫でると、アンジェリーナは指先で涙を拭い改めて笑顔を浮かべた。

「き、貴様！アンジーから離れんかつ！アンジー？アンジー！アンジイイイイッ！！」

宗太達は親父さんの叫びに苦笑しながらも、馬車を受け取りに向かう。

「おう、お前さん達。待ってたぞ。」

馬車商の元に行くと、既に馬と馬車は繋がられ、すぐに出発出来るよう準備が整えられていた。

車体上部の二台には雨除けの布が被せてあり、風で飛ばされないように紐で馬車の金具に縛り付けられていた。

「うむ、感謝する。すぐに出ても良いのかのう？」

「ああ、構わんよ。もう代金は貰ってるからな。」

それを聞くと、早速ルシフェラは馬車へと乗り込み、宗太とアンジ

エリーナも後に続く。

リースリットは手綱を受け取ると御者席に座る。

「出して良いぞ。」

ルシフェラが小窓からリースリットに指示を出すと、馬車はゆっくりと進み出した。

ガタガタと石畳の上を走る馬車は、裏通り　大通りは既に人で溢れているため　でも幅の広い道を東門に向かって走る。

ハーベルは領主の城と高級住宅街のある北区には城門が無いため、北に向かう時は東西の城門から出る事になるのだ。

東門で簡単な手続きをし、街道へと出る。

「さて、目指すはルーベックじゃのー！」

二手に別れた街道を左に曲がり、馬車は鍛冶の街ルーベックを目指して進むのだった。

第14話 最後の夜と出発と（後書き）

投稿が遅れて済みませんでした。

執筆文を誤って削除してしまい、へこんでおりました。
書き直したのですが、微妙な所があるかもです。
全ては無常ですね。

ようやくハーベルは終わり、次の街に向かいます。
エンラさんに感想を頂いた部分はこの辺りで挿入する予定ですよ。
新キャラも早めに登場させたくまりました（笑）

それではまた次回の投稿で。

第15話 馬車での旅と盗賊の襲撃です！

見晴らしの良い草原の中を南北に走る街道を、一台の馬車が北に進んでいる。

空はどこまでも蒼く、波間に漂う泡のように白い雲が流れていく。

地面では時折吹く風が、緑の絨毯を靡かせる。

時たま遠くの方に村落らしきものが見えるが、街道上には人影は無く、旅人や行商人とすれ違うことも無い。

「良い天気じゃのう。」

「そうですねー。」

僅かに下部を開いた馬車の窓、その縁に肘を掛け、窓の外を眺めながらルシフェラが呟く。

その隣で同じように窓の外を眺めながら、アンジェリーナが相槌を打つ。

窓からは、長閑な風景が後ろから前へと流れていく。

代わり映えの無い草原の中に、時たま生える立ち木と遠くの森が微妙な変化をもたらす。

「う　う　う　う　う　う　。」

和やかな空気の車内には、ガタゴトという回転する車輪の音と、低い呻き声が聞こえてくる。

宗太である。

最初の内は初めて乗った馬車にテンションの上がつていた宗太だったが、次第に口数が少なくなり、最終的には乗り物酔いでダウンしていた。

ルシフェラは長旅用にと、商品の中からスプリングの利いた馬車を選んだのだが、それでも揺れは宗太の想像以上だった。

スプリングが利いているといっても、現代日本の自動車と比べると無いも同然だ。

加えて街道は未舗装なのである。

馬車の作った轍や落ちている小石、雨風によって窪みが出来ていたり、馬車を揺らす要因には事欠かない。

未だ治らない二日酔いと相まって、出発から一時間ほどで宗太は限界を迎えてしまった。

今は丸めた毛布を枕代わりに、後部座席で横になっている。

「まったく、これくらいで情けないのう。」

「そんな…、こと、言っただって…、うう…。」

顔を蒼白にしながら呻く宗太を見ながら、ルシフェラは呆れたように溜め息を吐く。

アンジェリーナは心配そうに宗太に視線を戻した。

王族のルシフェラとその侍女であるリースリットは、元々移動には馬車を利用する事が多かった。

馬車の質にこそ差はあるが、この程度ならばさして問題も無い。

アンジェリーナも、あまり長距離は乗った経験は無いが、宿の手伝いなどで乗っていたのはスプリングなど付いていない荷馬車だ。

それに比べれば、この馬車はむしろ快適とさえ言える。

『ソータ、大丈夫？』

肉体の無いリリスは元より酔いとは無縁だ。

この世界に来てから身体能力が強化されているものの、どうやら三半規管は強化されなかったようである。

自らの加護が馬車に負けるとは、流石の神も想定外だった事だろう。

「もうじき休憩じゃ。もう少し頑張れ。」

「あ、ああ……。」

宗太は呻くような声で返事をする、そのまま目を閉じる。

それから一時間程走ったところ、ようやく馬車が停車する。

リースリットが御者席から降り、草原にシートを広げる。

ルシフェラとアンジェリーナも馬車から降り、シートの上に座る。

宗太は一番最後にノロノロと降り立つと、力無くシートに腰を下ろす。

「ソータ様、お食事は如何なさいますか？」

昼食の準備をしながら、リースリットが心配そうに訊ねてくる。

「ごめん、干し肉一切れと水だけ頂戴。」

今の状態でしっかりと食べてしまったら戻してしまいそうだ。

干し肉を良く噛めば空腹も抑えられるだろう。

リースリットは手早く調理を済ませ、ルシフェラ達はパンと干し肉のスープを食べる。

宗太は干し肉を少しずつかじって食事を済ませる。

食事内容としては寂しいが、食べる気力も湧かないのだから仕方ない。

「少し食休みをしてから出発しようかの。」

「そうして貰えると助かる…。」

食事を終えたルシフェラの提案にそう答えると、宗太は大の字に寝転がる。

未だ揺れているような錯覚がするが、座っているよりは余程楽だった。

横になると、慣れない馬車での移動で思ったよりも疲労が溜まっていたのか、睡魔が襲ってくる。

「ソータよ、行儀が悪いぞ。」

そんな宗太に苦笑しながら、ルシフェラが寝る。

「ああ、ごめ…、ん…。」

宗太はそれだけ言うつと寝息を立て始める。

「…寝てしまったのか？」

ルシフェラが声を掛けるが、目を閉じたまま宗太の返事はない。

呼吸と胸が規則正しく上下している。

ソロソロと宗太の側に寄るルシフェラだったが、ふと反対側から同じように近寄るアンジェリーナと視線が合う。

「む…。」

「えっと…。」

少々気まずい空気が流れるも、宗太を挟みながら視線で語り合う二人。

やがて、お互いに顔を見合わせながら頷き合うのだった。

「ソータ。起きよ、ソータ！」

ペチペチと額を叩かれる感触と、ルシフェラの声で意識が浮上する。

毛布で枕でも作ってくれたのだろうか、後頭部に柔らかい感触がある。

「…ん、ごめん。おは、よ…？」

目を開けると、右側にルシフェラ、左側にアンジェリーナの顔があった。

挟まれて寝顔を見られてたと思うと、途端に恥ずかしくなってくる。

ふと違和感に気付く。

屈んでいるわけでも無いのに、二人共やけに距離が近いのだ。

宗太は首を右に向ける。

すぐ目の前にはルシフェラの腰が見える。

同じように左を向くと、こちらはアンジェリーナの腰が。

「ソータ！」

「ソータさん！」

正面に顔を向けると、恥ずかしそうに顔を赤くした二人が軽く睨んでいる。

ここにきて宗太はようやく思い至る。

枕だと思っていたものは二人の膝だったようだ。

美少女二人の膝枕というのは嬉しくもあるのだが、同時に見上げた時の絶壁は仄かに物悲しさを覚えるものだった。

「ソータ…、オヌシ何やら失礼な事を考えておらんか？」

考えていた事が顔に出ていたのだろうか、ルシフェラが訊ねてくる。

宗太を見下ろす二人の笑顔がちよっと怖い。

「い、いや、別に何も…！」

宗太は慌てて否定すると、身体を起こす。

まだ少しフラフラするが、気分は大分良くなった。

もったも、すぐにまた酔うことになるのだろうか。

「もう大丈夫ですか？」

「うん、大分気分も良くなったよ。」

宗太は心配そうに見るアンジェリーナに笑って答えると、シートを畳み始める。

「それなら良かった。…ところで、リースの膝枕だったらどの様な感想だったんじゃない？」

「え？うーん…、眼福…、かな？」

急にルシフェラに質問され、宗太は特に考えもせず答えてしまった。

リースリットは僅かに頬を染め、アンジェリーナは手のひらを胸に当てて落ち込む。

「ほほう…、やはり先程の微妙な表情はそういう事か。」

ルシフェラが再度凄みのある笑顔を浮かべる。

拳を握りしめ、頬が僅かに引きつっている。

「へ？…あ、ふぐうつ！？」

宗太はやバいと思う間もなく、ルシフェラの正拳突きを腹部に受け地面に沈むのであった。

休憩を終え、馬車が再び走り出してから二時間程経つ。

少し前に草原は終わりを迎え、現在は森の中の街道を走っている。

日の光が森の木々に遮られてしまったため、後一時間も走れば野営の準備をする必要があるだろう。

宗太は再び酔いのために横になっている。

ルシフェラはというと、宗太が何度か謝罪をしたものの未だ機嫌が治らぬ様子で黙って窓の外を眺めており、アンジェリーナがそんな二人をオロオロと交互に視線を巡らせていた。

「ルシフェラさん、機嫌を治して下さいよ。」

車内に流れる気まずい空気に堪り兼ねたアンジェリーナが取りなす事にする。

アンジェリーナも落ち込みはしたものの、そこはこれからの成長に期待する事にしたのだった。

「…別に気を悪くしてなどおらぬ。」

窓の外を眺めているルシフェラは、眉根を寄せ、少し唇を尖らせながら答える。

ルシフェラにとってお子様体型というのは密なコンプレックスだったりする。

これでもリースリットよりも年上なのだ。

更に数年前からは妹にまで体型で負けている。

昔の魔族の成長速度は現代よりも遅く、自分が昔の魔族に近いということは頭では分かっているのだが、女としてそれを認められるかといえばそれはまた別なのだった。

「それなら…。」

アンジェリーナがそんなルシフェラに苦笑し、言葉を発しようとした時、不意に馬車が止まる。

「ルシフェラ様。」

何事かとアンジェリーナが辺りを見回していると、御者席のリースリットが小窓から話しかけてきた。

「うむ、囲まれているの。大凡^{おおおよそ}二十といった所か、盗賊の類じゃろうな。全く人とすれ違わぬので変だと思ったんじゃない。」

馬車の中でぐるりと視線を巡らせながら、ルシフェラが予想する。

アンジェリーナも窓の外を見やるも、見えるのは木立ばかりだ。

「如何致しましょう。」

「ソータはこのザマじゃし、アンジーもおるからのう。…良い、儂が出よう。」

ルシフェラはそう言って馬車から降りると、囲んでいる盗賊が訝し

んでいるのが伝わってくる。

「魔剣月夜・望月」
モチツキ

ルシフェラは魔剣を呼ぶと、手には五枚の円月輪チャクラムが現れる。

直径は二十センチメートル程、漆黒の円盤はその外周部のみが白銀の輝きを放っている。

「盗人には運というものも必要じゃぞ？…魔剣月夜・不知夜月！」
イザヨイツキ

ニヤリと笑ってから円月輪を投擲すると、次の魔剣の名を叫ぶのだ。
った。

「何なんだ…？何なんだよ、こりゃあ…！？」

森の木に背を預けながら、盗賊団のリーダーが呟く。

視線を横に向けると、先程まで獲物の様子を窺っていた仲間が、全身を切り刻まれ血塗れの肉塊と化している。

「何で俺たちがこんな事に…。」

男達は運が向いていたはずなのだ。

「なのに、何で…。」

男の疑問に答えるのは、仲間の悲鳴のみだった。

エルトリア王国の北部から北西部にかけて存在する森。

この森を縄張りにしてから数週間、盗賊団『赤羽の鷹』は連日の略奪でかなりの稼ぎを上げていた。

北部と南部を繋ぐ割と大きな街道であるために割と商人が通るのだが、この場所は特に警備も無い。

もともと、領主の私兵が討伐に乗り出してきたとしても、広大な森

が姿を隠してくれるだろう。

逃げる事など容易い。

先程も商人三人からなる商隊を、護衛の冒険者ごと殲滅したばかりだった。

盗賊団の情報を出来るだけ漏らさないようにするには、例え一人たりとも逃がす事は出来ない。

入念に連携を取り効率的に目標を殲滅する様は、さながら軍隊のようでもある。

その実力からか、盗賊ギルド内でも『赤羽の鷹』は少数ながらもそれなりの地位に就いているのだった。

「コレだけありゃあ、結構な額になるな。」

森の西部、切り立った崖に空いた洞窟を利用したアジトでリーダー格の男が笑みを浮かべる。

洞窟内の一室には、ここ数日の戦利品が置かれていた。

後はこれらを盗賊ギルドを通じて売り払ってしまうだけだ。

男は別の部屋へと移動すると、既に酒盛りを始めている仲間に加わる事にした。

「南部から旅人と思われる馬車が一台森に向かってきます！」

酒盛りに加わってからしばらくして、一人の男が駆け込んできた。

馬の扱いが上手いので、見張り役を任せている内の一人だ。

「旅人だあ？んなもん放っておけ。」

アルコールが回り、僅かに顔を赤くしたリーダーが答える。

金を持っているかも分からない旅人など、襲うだけ時間の無駄というものだ。

「それが…、外装は質素なものなのですが、造りは立派な馬車なんです。恐らく金貨数枚はする馬車かと。」

「…ほう。」

リーダーは男の報告に目を細める。

ボロ馬車に乗っているような旅人なら放っておく所だが、それなりの馬車に乗っているという事は金持ちの外遊といった所だろうか。

それならば、金や宝石なども持っているかもしれない。

「…本当にツいてるな。野郎共、狩りの時間だ！」

リーダーは獰猛な笑みを浮かべると、仲間に指示を出す。

盗賊達は「おおっ！」という掛け声と共に手早く準備を済ませ、街道へと馬を走らせるのだった。

街道には報告の通り、質素ながらも立派な馬車が走っていた。

盗賊達は森の中を、馬車を包囲する形で馬を走らせる。

街道の反対側では仲間が同じようににしているだろう。

リーダーは慎重に襲撃のタイミングを計る。

すると、いきなり標的の馬車が停止し、盗賊達も慌てて馬を止める。

今までにない動きに訝しげに見やるが、時刻は直に日が森の木々に隠れるというところである。

大方野営の準備に入るのだろう。

ならば好都合と仲間に手で合図をしようとした時、馬車の扉が開き中から一人の少女が現れた。

リーダーは口笛を吹きそうになるのを堪える。

現れたのは、上品な漆黒のドレスに身を包み、サラサラとした美しい銀髪に意志の強さを表すような真紅の瞳が印象的な美少女だったからだ。

まだ幼いが、そっちの趣味を持つ変態にはかなり高く売れるのは間違いないだろう。

御者役の侍女と合わせれば一体幾らになるのか。

恐らく貴族の子女のお忍びの旅なのだろうと当たりをつける。

(…こりゃあ、本格的にツいてるぜ。)

リーダーが少女を見据えたまま再び合図を出そうとした時、あり得ない現象に目を見開いて固まってしまう。

少女が何事か呟いたと思ったら、足元の影が浮き上がり手に五枚の円盤が出現したのだ。

「なんだ…？ありゃあ…。」

少女がニヤリと笑って円盤を投擲すると、それらは森に吸い込まれるように消えていく。

気を取り直して襲撃しようとしたリーダーは、突如聞こえた仲間の悲鳴に三度合図を止める。

森の中に仲間の悲鳴と馬の嘶いななきが響き渡る。

混乱し、無意識の内に馬を一步下がらせた時、目の前を黒い何かが通り過ぎ馬の頭を落としていった。

落馬したリーダーは、慌てて起き上がり視線を巡らせる。

すると、自分の近くにいた仲間の周りを先程の黒い何かが縦横無尽に飛び回り、瞬く間に肉塊に変えてしまった。

「一体何がどうなって…。あのガキは何なんだ…！？」

リーダーは近くの木を背に、周囲を見回す。

幸い黒い飛行物は見当たらない。

「と、とにかく撤収し、て…？」

安堵の息を吐き、素早く撤収の方法を考えるリーダーの目の前を、自身から黒い円盤が飛び出して行った。

恐る恐る自分の腹部を見やると、横一線に鮮血が吹き出す。

「あ…、あ…？」

訳も分からず崩れ落ちる身体の上に、背後の壁にしていた木が倒れてくるのが最後の感覚だった。

盗賊達を圧倒的な力で殲滅した後、どこかに消えたルシフェラだったが、直ぐに馬車に戻ってきた。

「さて、日暮れまで近い。もう少しだけ進んでおくのでしょうか。」

小窓からリースリットに指示を出すと、直ぐに馬車が動き出す。

「どこに行ってたんだ？」

「盗賊のアジトに、の。奴らめ、結構な額を溜め込んでおったぞ。」

宗太の問いに、影から数枚の金貨を出しながらルシフェラが答える。

「…それって、盗賊の金を持って来たのか？なら、元の持ち主に返さないで奴らと…。」

「元の持ち主など、恐らくはもうおらぬよ。」

宗太の抗議はルシフェラに遮られる。

「おかしいとは思わぬか？ここは北部と南部を繋ぐ比較的主要な街道じゃ。それにもかかわらず商人と一度もすれ違つてはおらぬ。」

言われて思い返してみるが、ずっと横になっていた宗太は窓の外的光景など見ていなかった。

「…そう言えば、そうですね。」

がつくりと肩を落とす宗太を横目に、アンジェリーナが同意する。

「生き延びた者があるなら、街で噂になっておっても良いはずじゃ。それすら無いとなると、考えられるのは一つしか無いじゃろ？親族など探しようもないしのう。」

そこまで言われてようやくここで起こっていた出来事に思い至った宗太は、思わず黙ってしまった。

馬車内に沈黙が流れる中、再び馬車が止まる。

「暗くなつて参りましたし、今日はこの辺りで野営に致しませんか？」

「そうじゃの。」

御者席からそう提案するリースリットにルシフェラが同意し、野営の準備をする。

天幕はルシフェラ達に任せ、宗太は森で薪を拾い集める。

途中何度か先程の出来事が頭をよぎるが、所詮宗太にどうこう出来る問題でも無い。

忘れるように努める。

「ソータは初めての旅の疲れもあるじゃろう。見張りは最後にして先に休むが良い。」

食事を取りながら、今晚の見張りの順番について話し合う。

結局、アンジェリーナを除き四時間置きに一人ずつ起きて見張る事になった。

時間はまだ六時を過ぎた頃だ。

普段なら寝るには早い時間ではあるのだが、確かに疲れているので好意に甘える事にする。

「それじゃ、お言葉に甘えさせて貰うよ。お休み。」

「うむ、ゆっくりと休むが良い。」

「お休みなさい、ソータさん。」

「お休みなさいませ。」

ルシフェラ達はもう少し起きているようだ。

宗太は皆の挨拶を聞きながら天幕に入り、毛布にくるまるとルシフェラ達の談笑する声を聞きながら眠りにつくのだった。

第15話 馬車での旅と盗賊の襲撃です！（後書き）

最近執筆速度が遅くなってしまいましたねorz

道程を長々と書くのもアレなので、次を書いたら一気にルーベックまで飛ばします。

ルーベックまで行ったら年上キャラだ！

…どという風に出すかはまだ考えておりませんが。

話は変わりますが、「プロローグがプロローグじゃなくね？」との事なので、書き直そうかと考えております。

現プロローグは1話の冒頭に回す事になるのかな？

いつ頃上がるかは不明ですが、編集した時はお知らせします。

それではまた次回の投稿で。

第16話 夢と決意じゃ！

「……、…兄、宗兄そうにい！」

誰かが呼ぶ声で宗太の意識が眠りから浮上する。

もう朝なのだろうか、日差しが瞼の裏にも微かに届いている。

「宗兄、起きてよ！」

聞き慣れた声に、若干苛立ちの色が混ざり始める。

しかし、宗太は睡魔の誘惑には勝てないのだ。

声の主には悪いか、まだ寝させて欲しい。

そんな意味合いも込めて、ゴロリと寝返りをうつ。

「い・い・か・げ・ん・に、しなさああい！」

声の主が苛立ちも露わに宗太の布団を勢い良く引つ剥がす。

僅かに肌寒い空気に包まれ、宗太はようやく目を開ける。

目の前には白い壁紙の貼られた壁。

少し上に視線を向けると、宗太の好きなロックバンドのポスターが三枚貼られている。

視線を反対側に向けると、机と本棚、クローゼットなどが目に入る。

よく見慣れた宗太の部屋だ。

そして、ベッドのすぐ脇には宗太の良く知る人物が、引つ剥がした布団を手にとっていた。

宗太の三つ下の妹、あかつきはぐら暁桜だ。

156センチメートルという家族の中では小柄な身長に、内に意志の強さを覗かせる大きな瞳。

纏まりの悪いショートカットは所々跳ねており、後ろ髪の一部を伸ばして細い三つ編みを作っている。

奇抜な髪型のような気もしないでも無いが、活発な雰囲気似合っている。

宗太が普通っていた中学の制服に包まれた細い体軀は、一見すると華奢なように思えるが、趣味の格闘技で鍛えているため見た目に反して力はある。

「何だ桜か…。どうして部屋に？」

「何だじゃないでしょ、宗兄を起こしてくるように言われたの！」

宗太の疑問に、桜は腰に手を当て性格とは反対に慎ましやかな胸を張る。

「見て分からののか？俺は眠いんだ。」

「分かるわけ無いでしょ…。」

桜は呆れたように溜め息を吐くと、布団をベッドの上に置く。

「ほら、サツサと起きて朝ご飯食べちゃいなよ。入学早々遅刻なんて、笑われちゃうよ?」

そう言っただけでイタズラっぽい笑みを浮かべると、クルリと背を向けて部屋から出て行く。

宗太は黙ってその背を見送る。

桜の物言いに違和感を覚えたのだが、その違和感の原因が分からない。

考えても仕方の無い事か。

宗太はベッドから降りると、ハンガーに掛けてあった制服を手に取り着替える。

「おはよう。」

リビングに入ると、既に他の面々は朝食を食べ始めていた。

「あ、やつと来た。」

「宗ちゃん、おはよう。ご飯今用意するわね。」

リビングに入った宗太に気付いた桜の横に座っていた母、あかつきかけ 暁千景が席を立ち、宗太の分の朝食を用意し始める。

軽くウェーブのかかったセミロングの髪に、おっとりとした表情が印象的だが、五歳年上だった寡黙な父 あかつきけんじ 暁賢治に一目惚れし、猛アタックの末結ばれたというのだから侮れない。

父親はというと、既に出勤したようで姿は見えない。

「おはよう、宗太。」

宗太が席に着くと、隣に座っていた姉、あかつきかえで 暁楓が挨拶してきた。

腰まで届く黒く艶やかな長髪の前髪は、目の少し上で切りそろえられている。

168センチメートルの身長にスラリとした手足、出る所は出て引込む所は引込むでいる見事な体型。

顔立ちも整っており、弟である宗太から見ても美人だと思う。

実際に結構な頻度で男子に告白されているらしい。

そのどれもが敢え無く撃沈しているという話だ。

もつとも、本人が男を苦手としているようなので仕方のない話なのだが。

因みに口調もどこか男っぽいため女子にも人気があるが、本人にレズっ気は皆無である。

「おはよう。…姉貴、何で制服なんて着てるの？」

宗太より二つ年上の姉は近所の大学に進学したのでは無かったか。

宗太は僅かに感じた違和感を姉

あかつきかえで
暁楓に質問する。

「は？一体何時まで寝ぼけているんだ…。学校行くのに制服を着ないでどうする。」

楓はやれやれと肩をすくめる。

「ほらほら、お喋りは後にしてご飯食べちゃいなさい。」

何かがおかしいが、何かおかしいのかがはっきりとしない。

頭の隅に何かが引つかかったまま、宗太は朝食を平らげた。

楓と二人でやけに人の少ない通学路を歩く。

桜も途中までは一緒だったが、中学校は方向が違ったため途中で別れたのだ。

「おーっす、宗太！」

すると、後ろから岡崎が宗太の隣に走ってきた。

「よお、今日は早いな。」

「おはよう、岡崎君。」

「遅刻するなってお袋に叩き起こされたんだよ…。おはようございます、楓さん！今日も綺麗ですね！」

うなだれて母親の文句を言ったと思えば、楓に挨拶されると途端に元気になる。

余りの切り替えの早さに宗太は呆れ、楓はクスクスと笑っている。

「そう言うお前も今日は随分早いじゃんか。」

「…桜に叩き起こされたんだよ。」

そう言うて宗太は溜め息を吐く。

「二人共、夜更かしばかりしてるから起きられないんだぞ。」

楓に窘められ、揃って肩を落とす二人だった。

見慣れた教室で授業を受けている。

だが、何故か宗太には教師の言葉が理解出来ない。

『授業を受けている。』

理解出来るのはただその事実のみである。

再び感じる違和感に内心戸惑いつつも、黙って席に座っている。

チャイムが鳴ると、生徒達は立ち上がり、幾人かは教室から出て行く。

「宗太、メシにしようぜ。」

宗太がそのまま座っていると、岡崎が近寄ってきた。

「ああ、そうだな。」

「宗太、お昼にしよう。」

宗太が返事をして立ち上がると、丁度楓が教室に入ってくる。

そのまま二人で教室から出ると、そこは屋上だった。

床に座ると宗太と楓は弁当を広げ、岡崎はパンをかじる。

「授業にはついていけるかい？」

「ぼちぼちね…。」

「分からない所があれば私に聞きなさい。教えてあげよう。」

そう言って笑う楓に苦笑で返す。

男が苦手で浮いた話を全く聞かない楓だが、宗太には非常に甘いのだった。

「…そろそろ教室へ戻ろうか。」

たわいもない会話で時間を潰し、腕時計を確認した楓が立ち上がる。

もうそんな時間なのかと、宗太も立ち上がり歩き出した時。

屋上に突如亀裂が走った。

亀裂は宗太を中心に広がり、逃げる間もなく崩れだす。

崩れた先　そこに本来あるはずの教室や廊下は無く、ただただ闇が広がっている。

「「宗太！」」

声のした方を振り向くと、楓と岡崎が宗太に向かって手を伸ばすのが見えた。

宗太も手を伸ばすが二人に届く事は無く、宗太は闇に飲み込まれた。

先程までの風景から一転、辺りは何もない闇に包まれている。

楓や岡崎の姿を探しもがくが、動いているのかすらも分からない。

暫くもがいていると、やがて闇の中に小さな光が現れた。

光は徐々に大きさを増し、やがて宗太を包み込む。

「……、…タ、ソータ！」

「姉貴！？…んがつ！？」

自分と呼ぶ声に飛び起きた宗太だったが、額に走る衝撃に再び倒れる。

鈍い痛みに額を押さえ上を見ると、見張りの交代のために宗太を起こしにきたのだろう、ルシフェラが手にランタンを持ち心配そうに覗き込んでいた。

どうやらランタンに頭突きを喰ましたらしい。

隣にはリースリットもいる。

どうやら起こしてしまったようだ。

「大分魔うなされておったようじゃが、嫌な夢でも見たのか？」

「嫌な夢…？…あつ！」

ルシフェラに言われてようやく夢の内容を思い出す。

姉、妹、母、友人、学校…、ほんの一週間程前までの日常。

…父親の出勤の早さまで現実通りというのもアレだが。

そして、突如崩れた日常…。

「…ちよつと昔の夢を見てね」

「…昔のというと、元の世界のか。済まぬ、口にしなかったので、てつきり吹っ切れていたのじゃと思っておった…。」

「何でルシフェラが謝るんだよ。…まあ、最近賑やかだったからさ、あまり考える余裕は無かったんだよね。」

申し訳なさそうにうなだれるルシフェラに思わず苦笑してしまう。

「儂も元の世界に戻る法を探してやろう。……だから、泣くでない。」

ルシフェラは宗太の頭を優しく抱きしめて決心する。

この世界の人の身勝手で、望まずこの世界に呼び出されてしまった哀れな少年を、夢で魘^{うな}されながら涙を流す少年を、いつか元の世界に返してやろうと。

最後の呟きは、本当に微かなもので。

密着していた宗太の耳にも届かなかった。

「ルルル、ルシフェラ!？」

突如抱きしめられ、狼狽える宗太。

顔に柔らかさとルシフェラの体温、そして仄かな香りを感じる。

心臓がバクバクと高鳴り、顔が赤くなっているのが自分でも分かる。

「とと、取り敢えず、俺は見張りに行くから、二人とも休めよ!」

宗太は慌ててルシフェラの腕から抜け出すと、二人にそうとだけ言
って天幕から出て行く。

（薄暗くて助かった…!）

恥ずかしい顔を見られずにホッと安堵する宗太は、もう先程の夢を
気にしてはいなかった。

宗太が出て行ったのを確認したルシフェラは、側に控えていたリー
スリットに向き直る。

「…さて、今後の方針は決まったのう。」

「はい、ですが元の世界との繋がりが切れてしまっている以上、通
常の送還では無理かと思われます。」

真剣な表情をするルシフェラに、リースリットも真剣な表情で返す。

「うむ、やはり旅をしながら探す他ないじゃろうな。レイティアとリリス殿にも協力して貰いたい。」

ルシフェラはアンジェリーナと宗太の寝ていた場所の枕元にある二冊の魔導書に語り掛ける。

ルシフェラよりも遥かに魔術の知識の豊富な二人ならば、何かしら思い付くかもしれない。

『ま、ルシフェラちゃんの頼みならしょうがないわね。』

ふと、ルシフェラの脳裏に艶やかな声が届く。

「頼りにしておる、レイティア。リリス殿もな。」

どこかぶっきら棒な物言いに苦笑しながら、声の主に語り掛ける。

契約していないためリリスの声は聞こえないが、助けてくれるものと信じよう。

「リースも済まぬな。儂の我が儘に突き合わせてしまつて。」

「王として旅で見識を広める事は重要な事です。ルシフェラ様は先代勇者の襲撃でその機会がありませんでしたから…。だからこそ、ミリア様、ディラン様、アーハム様も全力で国務を助けて下さっているのです。」

ルシフェラの謝罪に、リースリットは当然の事だと言葉を返す。

「そうか…、あの三人にも後で礼を言わねばな。」

思えば、信頼する友や部下には気苦労を掛けっぱなしだ。

リースリットの返答に苦笑し、ふと、最近苦笑してばかりという事実に気付き再び苦笑した。

焚き火に枯れ枝をくべながら見張りをしている内に、周囲は明るくなり始めている。

「んー…。」

軽く伸びをして深呼吸。

少し肌寒さがあるものの、澄んだ空気が気持ち良い。

「お早うございます。」

すると、天幕からリースリットが出てくる。

朝食の準備をするのだろう。

「お早う、リース。夕べは起こしちゃってごめん。」

外に出てから気付いた事だが、夕べは夢を見ながら泣いていたらしい。

見られていただろうか。

だとしたら恥ずかしい。

「いえ、お気になさらず。それでは朝食の準備を始めさせていただきます。」

リースリットは軽く笑みを浮かべると、食材と器具を取り出し調理を始める。

普段と変わらないリースリットの様子に、大丈夫だったかとホッと息を吐く。

実際はしっかりと見られていた訳なのだが。

「お早う。」

「お早うございます。」

暫くして、ルシフェラとアンジェリーナも起きてきた。

「お、お早う…。」

普通に接しようとしても、つい夕べの事を思い出してしまつ。

「ソータさん、どうしたんですか?。」

アンジェリーナは明らかに挙動不審な宗太を見て不思議そうにしている。

ルシフェラは宗太を挙動不審にしている理由に思い至り、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると、すぐ側まで歩み寄る。

「ククッ…、また怖い夢を見たらいつでも胸を貸すぞ？」

そう耳元で囁くと、リースリットの方に歩いていく。

「ル、ルシフェラ…!!」

宗太は顔を真っ赤にしながら怒鳴るが、ルシフェラは澄ました顔のまま相手にしない。

宗太が怒っている理由の分からないアンジェリーナは、不思議そうに首を傾げていた。

第16話 夢と決意じゃ！（後書き）

お姉様キャラでホントにお姉様を出してしまった…。

夢の見方ですが、自分の見る夢を参考に書きました。

いきなり時間が飛んだりとか、空間が変な風に繋がってたりとか…。

あまり夢見ないんですけどね。

書いてる内に大分長くなってしまったので、キリの良い場所で切つての投稿です。

それではまた次回の投稿で。

17話 召喚魔術と召喚魔法です

『ちょっとソータ、放置はヒドいんじゃない!?』

宗太がリリスに怒られたのは、食事も終わり出発の準備に入った時だった。

食器やらの片付けはリースリットに任せ、天幕を仕舞う時になってようやくリリスを中に忘れていた事に気付いたのだった。

「いめんいめん…。」

宗太は両手の平を顔の前で合わせて謝罪する。

魔導書に対し謝罪する男の図というのも、端から見るとシニールな光景だった。

「何じゃ、オヌシの世界ではそういう風に謝罪するのか?」

ルシフェラは宗太の謝り方を不思議そうに見ている。

「え？…えっと、単純にお辞儀だったり、片手だったり、あとは土下座…かなあ？」

宗太は謝罪の仕草を思い出しながら言う。

「ドゲザ…？何じゃそれは？」

「えっと、こういう姿勢なんだけど…。」

宗太は土下座をして見せる。

「う…む、コレは、なかなか…。」

土下座を見て軽い優越感と嗜虐心を覚え、ちよつと自国でも取り入れようかと考えてしまうルシフェラだった。

（…って、いかんいかん！儂はそこまで鬼畜では無いぞ！）

だが、ふと我に返ると頭を振って考えを追い出す。

「…確か東方の群島国家ヤマトではその様な謝罪があったと書物に

ありましたね。」

食器の片付けを終えたリースリットが土下座を見ながらそう言う。

「あるんだ、土下座……。ていうか、ヤマトって……。」

あまりに捻りが無さ過ぎて突っ込む気すら起きない。

「そういえば、こつちの世界で一般的な謝罪の仕方ってどんなの？」

ふと疑問に思った事を尋ねてみる。

「む？こちらではお辞儀か、目上の者に対しては右腕を胸の前で折り曲げてのお辞儀が一般的じゃのう。騎士の敬礼は、王に対して以外は直立で右腕を胸の前で曲げるのじゃ。王に対しても例外はあるかの。」

ルシフェラはそう言うってお辞儀をして見せる。

握った右拳が左胸の前にくる形だ。

「へえ、その礼の仕方は初めてみたよ。どういっ……うわっ！」

『ちょっと、ソータ！謝罪の仕方なんて今はどうでもいいの！』

謝罪談義へと話が脱線している事に痺れを切らしたリリスのツッコミが入る。

「あ、ああ、ごめん……。」

『まったく……、せっかく召喚魔術が完成したっていうのに……。』

リリスはブツブツと文句を言っている。

その中で、宗太には気になる単語があった。

「待った！召喚魔術が完成したって、勇者召喚のか？」

宗太の言葉にルシフェラはピクリと僅かに反応するが、気付いた者は居ないようだった。

『何で私がそんなの作らなくちゃいけないのよ。前に話したでしょ

？私が実体化するための召喚魔術。』

言われてみれば、確かにそんな話をしていた気がする。

この一週間程度で完成させてしまったということだろうか。

『じゃあ、詠唱と魔力の変換よろしく！』

（よろしくだったって、俺呪文とか知らないぞ？）

流石に適当な呪文で発動するモノでは無いだろう。

『大丈夫、私の後に続いて詠唱して。魔力も必要量を満たしたら合図するから。因みに光属性ね。』

（ん、分かった。）

それなら何とかなるだろう。

宗太は了承すると、魔力を変換し始める。

思えば聖剣以外では初めての光属性魔術だ。

深呼吸をして気分を落ち着ける。

『じゃあ、いくよ。』

世界の根源 天上の光よ』

「 世界の根源 天上の光よ」

リリスの後に続いて詠唱をしながら、前方に出現した白い魔術陣に
どンドン魔力を流し込む。

周囲の木に止まっていた鳥達が、いち早く異変を察知して一斉に飛
び立つ。

『 我、光を以て変革を望まん』

「 我、光を以て変革を望まん」

突如詠唱を始めた宗太に、ルシフェラ達は驚きの表情で見ている。

『我が魔力^{ちから}を以て世界に新たな理^{ことわり}を』

「我が魔力を以て世界に新たな理を」

先ほどから馬鹿みたいに魔力を注ぎ込んでいるのだが、一向に合図が無い。

右手から溢れては魔術陣へと吸い込まれる魔力の奔流により、周囲の空気までもが魔術へと向かって渦巻く。

ゴクリ、と誰かが息を呑んだ音が微かに聞こえる。

あまりの魔力量に、リースリットは無意識に一步後ずさっていた。

『我が魔力^{ちから}を糧に彼の者をここに顕現させん
召喚^{サモン}！』

「我が魔力を糧に彼の者をここに顕現させん
召喚！」

詠唱の終わりと共に、さらに魔力を流し込む。

普段使う魔術とは文字通り桁違いの魔力量に、宗太が不安を覚え始めた頃。

『魔力オツケー！』

ようやく出されたりリスの合図と共に魔力の供給を止める。

結局全魔力の五分の一ほどの魔力を使ってしまった。

魔術陣が一層その輝きを増し、光が弾けると同時。

空気が弾けたかのような風の奔流が吹き荒れ、周囲の木々を激しく揺らす。

突然の光と風の奔流に、堪らず宗太達は顔を腕で覆い隠す。

目を瞑り、腕で顔を覆っていても尚瞼の裏まで届く光と、辺りの物を吹き飛ばさんとする突風に何とか耐える。

「ぎゃああああっ!?!」

「アンジー!？」

吹き荒れる風の音の中、微かにアンジェリーナの悲鳴が聞こえてくる。

やがて光と風が止み、アンジェリーナの方を見ると、どうやら吹き飛ばされはなかったようでその場にへたり込んでいた。

「うん、成功成功!」

宗太がホッと息を吐いた時、すぐ側から最近になって聞き慣れた声が聞こえてきた。

宗太達は揃って声のした方を向く。

そこには足首にまで届く白い髪に金色の瞳、色白の肌を白いドレスで包み背からはこれまた純白の天使のような羽を生やした美少女
ホワイトグレイルの魔導書に宿る意識、リリス・ホワイトグレイルが立っていた。

「何者じゃっ!」

ルシフェラは一瞬で影から魔剣月夜・朔夜を抜くと、突如現れた少女に警戒を向けながら構える。

リースリットも剣を抜きこそしないものの、腰の双剣の柄を握りながら半身に構えている。

「ちょ、ちよつと待ってよ！私は敵じゃないってば！」

いきなり臨戦態勢の二人に、リリスは慌てた様子でわたわたと手を振る。

「リリス！」

「…リリス？もしか、魔導書の意識体か！？」

宗太の言葉に、ルシフェラは魔剣を構えたまま驚愕の表情を浮かべる。

「そうそう、さっきのソータの召喚魔術で実体化したの！だから神剣を向けないで！」

若干涙目になりつつ、説明をするリリース。

「実体化すると斬られたら死ぬのか？」

宗太はふと浮かんだ疑問を聞いてみる。

「え？いや、別に死なないけど斬られるってイヤでしょ？せつかくの魔力も無駄に消費しちゃうしね。」

小首を傾げながら答えるリリースに、ガツクリと力が抜ける気がした宗太だった。

「…それにしても、召喚魔術って服とかも一緒に召喚されるんだな。」

「なになに、裸の方が良かった？ソータのエッチ。」

気疲れしてつい漏らしてしまった宗太の呟きに対し、リリースは手を後ろで組み、少し前屈みになった態勢で宗太の顔を覗き込んでくる。

顔にはニヤニヤと笑みを浮かべている。

「…ち、違う違う！そういう意味じゃなくて…！！」

とんでもない勘違いに、宗太は顔を真っ赤にしながら慌てて否定する。

背中に突き刺さるルシフェラ達の冷ややかな視線が心に痛い。

「あはは！冗談冗談。精神体の実体化っていうのは、要はそのもののイメージだからね。服をイメージして魔力と一緒に実体化させてるんだよ。勿論翼も隠せるよ。」

ホラ、と言って背中の中の羽を消して見せるリリース。

イメージ次第で姿、格好を自由に変える事が出来るということだろうか。

あまりの便利さに思わず感心してしまう。

「あ、イメージ次第と言っても、その存在からかけ離れた姿は取れないよ？精密なイメージにも限界があるからね。」

宗太の考えを読んだかのように訂正を加えられた。

何でも思いのままとはいかないようだ。

「それにしても、召喚魔法とは…のう。」

「そういえば、魔法と魔術って同じ意味なのか？」

ルシフェラの呟きに、以前から疑問に思っていた事を聞いてみる。

魔法だったり魔術だったり、人によって言い方が異なるのが気になっ
ていたのだ。

「む？…ああ、宗太は違いを知らんのじゃったな。アンジーもか
う。」

「はい。」

「私も知らないなあ…。私が生きていた頃は魔術で統一されていた
筈だから。」

リリスも首を傾げている。

魔術の知識に長けているリリスまで知らないということに、内心驚く宗太。

「他の魔術師と契約していなかったリリス殿が知らぬのも無理はない。魔法というのは神族が滅びてから出来上がったモノだからのう。」

「ということは、魔術より新しいモノってことか？」

疑問が解ける前に新たな疑問が浮かんでしまう。

「いや、そういう訳では無いのじゃ。まあ、詳しい話は馬車の中でするとしてよ。」

そう言ってルシフェラは馬車の方へと歩いて行く。

気にはなるが、確かにこの場で話しては時間が勿体無い。

宗太達も荷物のチェックをしてから馬車に乗り込む。

「さて、魔法についてじゃったのう。」

馬車が進み始めてから、ルシフェラは先ほどの話の続きと口を開く。

「ああ、魔術と何が違うんだ？」

「違いは無い、魔法とは魔術の事じゃ。」

「……は？」

意味の不明さに思わず口をポカンと開ける宗太とリリース。

「……どういふことなんですか？」

アンジェリーナも首を傾げながら質問する。

「つまり、魔法とは現在純粹な使い手の居らぬ魔術の事を言つのじや。厳密には無属性　純粹な魔力を使う魔術と光属性の魔術の二つを指す。」

「無属性魔術と言うと、魔術妨害とか？光属性の使い手はソータみたいな勇者が居たらしいけど、それでも魔法に分類されたの？」

「うむ、それで合つておる。それと、逆に言えば光属性を持つ者は一人だけ。それも魔力量の低さと、教える者が居らぬ為に未だかつて使いこなせた者は居らぬ。故の『魔法』じゃ。まったく、宝の持ち腐れじゃの。」

ルシフェラが呆れた様に溜め息を吐く。

「…えっと、魔術妨害って何？」

ルシフェラとリリスの魔術談義について行けない宗太が、恐る恐る手を挙げ質問する。

「魔術は大量の魔力、魔素が混ざると構成を保てなくなるの。魔術妨害っていうのは、簡単に説明すると大量の魔力をバラまいて相手の魔術の構成を崩す力業よ。相手の数倍の魔力を使ったりするから、魔力量の多い存在じゃないと使えないのがネックなんだけどね。詠唱で指向性を持たせる事も出来るよ。」

「なんとまあ…。」

詠唱で指向性を持たせる事が出来るから魔術という括りなのだろうか。

あまりのこり押し技に呆れるばかりだ。

「他に聞きたい事はあるのかの？」

「私は今の所無いわね。」

リリスは既に理解したようで、首を横に振る。

宗太はふと疑問に思った事を訊ねてみることにする。

「あー…、闇属性も光属性と同じ事が出来るんじゃないかな？ たっけ？
闇属性も魔法になるのか？」

「闇属性は魔族が居るじやろうが。それに、似ているが少し違うのじゃ。例えば儂やリースが収納に使っておる空間魔術があるじやろ？ 闇属性は魔力の消費が少ない代わりに、扉は『影』と限定されるのじゃ。光属性は魔力の消費量が多い代わりに、そういった制限は無く何処でも行使出来る。」

言われて思い返してみれば、確かに魔剣や道具の出し入れは全て影からだった。

「他の同系統の魔術もそう。闇属性は魔力の消費量の少なさに対し範囲、又は効果が限定されるのじゃ。戦闘に生かせるかは使い手のセンス次第じゃのう。」

それは光属性も同じじゃがの、と言って笑う。

リリスの召喚にはかなりの魔力を使ってしまった。

光属性は便利だと使いまくっては、直ぐに魔力切れを起こしてしまうのだろつ。

もしそれが戦闘中だったとしたら、それは致命的なミスにもなりうる。

「…人間って魔力量少ないんだろ？よく召喚魔術なんて出来たよな。」

「うむ、数百人、もしくは大量の魔晶石を使った大儀式だそうじゃ。」

因みに、魔晶石とは魔力を内に溜めておける特殊な石の事じゃ。以前説明した魔素石を精製して造る事が出来る。」

宗太が知らないことを見越して魔晶石の説明を付け加える。

そこまでして勇者を喚ぶ執念に軽い恐怖すら覚える。

出来る事なら関わりたくは無い。

兎にも角にも、疑問は無事解消されたのである。

勇者召喚の事はなるべく考えないようにして、通常の雑談へと移るのであった。

17話 召喚魔術と召喚魔法です（後書き）

今回はリリスの実体化と、所々『魔法』となっていたり『魔術』となっていた事の理由の説明となりました。

前話など、どんどん増える設定に、友人には「ちゃんと纏めきれるのか？」と言われたり…。
…頑張ります。

話は変わりますが、今回の大地震。皆様ご無事でしたでしょうか？

我が家は棚の上の物や鬼瓦、瓦が落ちた程度の被害で済みました。津波も家の近くまでで止まったようです…。

余震もまだまだ起きていますし、どうかお気をつけてお過ごし下さい。

それではまた次回の投稿で。

第18話 ルーベック到着と入城審査と（前書き）

今回全然進みませんでした……。

年上キャラは一体何時になれば出せるのか。

第18話 ルーベック到着と入城審査と

「ルシフェラ様、ルーベックの街が見えて来ました」

「む？ おお、ようやくか」

御者席に設けられた小窓から馬車内へとリースリットが声を掛ける。

街道を馬車で走る事さらに五日。

ようやく遠くに鍛冶の街ルーベックが見える位置にまでやって来ていた。

馬で五日というのは、どうやら馬単騎でという意味だったらしい。

馬車では僅かに遅れ、六日掛かってしまった。

尤も、一日程度遅れた所で大して問題も無いのだが。

道中は初日の森以来盗賊に出会う事も無く、森を抜けた頃からチラホラと商人達ともすれ違うようになった。

初日にすれ違わなかった原因は、やはりあの盗賊団にあったのだらう。

道中、偶々同じ場所で休む事になった商人に話を聞いた所、どうやら都市部の商人の間ではこの街道は『危険な道』としてウワサとなっているらしかった。

ならば何故そのような道を選ぶのか。

答えは『時は金なり』という事である。

脚で稼ぐ商人などにとって一分一秒は大事な物ではある。

が、利益を考えれば増やせる護衛など高が知れているし、護衛を多少多目に雇った程度で安心し危険な道を選ぶということは、詰まる所商人としては二流以下だったということだろう。

確かに時間は得難い物ではあるが、命に代わる物は無いのだから。

二日目以降にすれ違った商人達は幸運だったと言える。

だが、それに気付かないのであれば、いずれ同じ過ちを繰り返すことになるのだろう。

その時に運が向いているかは知らないが。

途中、魔獣には幾度か遭遇したものの、全てルシフェラとリリースによって瞬殺されていた。

乗り物酔いで動けない宗太と戦闘に慣れていないアンジェリーナの代わり、という事だが、リリースは実に嬉々として魔獣を狩っていた。

久しぶりに実体を持てた事が余程嬉しかったのだろうか。

対象を自動追尾する攻撃魔術の複数発動などを難なくこなし、一同を驚かせていた。

ルシフェラの魔剣月夜・不知夜月がそれに似てはいるが、追尾系魔術は難易度の高さから現代では失われた技法であるらしい。

改めてリリースの技能の高さを思い知らされた。

『いやー、随分と掛かったねえ』

そのリリースはと言うと、数度の魔獣退治で魔力を使い果たし、今は魔導書の中に戻っている。

魔力を使っただとしても、召喚主からの追加の魔力供給により実体化の時間は延びるらしいのだが、リリースが拒否したのだ。

曰わく、『実体化していると通行税や手続きが面倒だから』という事である。

すっかりしていると言うべきなのだろうか、理由を聞いた一同は余りに現実的な理由に微妙な反応を返すことしか出来なかった。

（全くだ……、街に着いたら先ず休みたい……）

乗り続けて慣れたのか初日よりマシになったものの、未だ続く頭痛を堪えながら宗太はリリースに同意する。

吐き気は無いのが救いか。

と言っても、最早戻す物が胃の中に無いというのが事実なのだが。

「ソータさん、大丈夫ですか？」

「ソータ、街に着いたら直ぐに宿を取る。もう少し我慢せい」

相変わらず蒼白な顔色の宗太を見かねて、アンジェリーナとルシフエラが心配そうに声を掛ける。

馬車の中では終始この調子である。

延々続く頭痛も、二人にこうして声を掛けられると堪えられる気がするの不思議だ。

「ソータよ、念の為、今の内に魔力の属性変換をしておくがよい」

「……え？なんでまたそんな事を？」

宗太が憎き頭痛を耐えながらも横を向くと、向かいの座席に座るルシフェラの手には既に黒く鈍い光沢を放つ弓が握られていた。

いつの間にか影の中から取り出していたようだ。

ルシフェラは弓の上端に弭槍^{はずやり}を取り付けながら、説明を続ける。

「うむ、街に入る際に魔力属性の審査を受けるかも知れんからの。簡易版の識別球なら体内で属性変換した魔力を巡らせれば誤魔化せる。まあ、それも割と高等な技術なのじゃがな、ソータなら問題ないじゃろう。魔術での識別阻害の方は、リリスに術式の改変を頼むしかないじゃろうしの。そちらは王都への道中で間に合っじゃろう」

「分かった。じゃあ、風と……火、水辺りで良いかな」

「うむ」

宗太は言われた通り、体内の魔力を変換して巡らせる。

頭痛により集中力を切らせば、直ぐに無属性へと戻ってしまうのだが……。

そうして馬車に揺られること更に一時間、太陽が頂点を過ぎた頃、ようやくルーベックの街の城門へと辿り着いた。

「ようこそ、鍛冶の街ルーベックへ。旅の方ですか？」

「はい、審査の方よろしく願いします」

城門の監視をしている衛兵に、御者席からリースリットが対応する。

「では、手続きをしますので皆さんはこちらに。規則ですので馬車も確認させて頂きますが、よろしいですね？」

衛兵に促され宗太達も馬車から降り、門に備え付けられている審査窓口へと向かう。

ルシフェラが了承の意味で頷くと、別の衛兵二人が馬車の荷台や内部などを詳細に調べだした。

これは密輸などを防ぐためである。

都市部の通行税は商人よりも冒険者などの方が安い。

その都市に店舗を持たない行商人などからは通行税として徴収するためである。

それ故、冒険者ギルドへと登録だけし、税金をごまかして利益を上げようと考える者が出てくるのも当然と言えるだろう。

その対策として、馬車や大荷物を背負った冒険者は度々荷物検査を受ける事になるのである。

拒否すれば入城は認められず、規定量以上の商品と思しき物品を持ち込む際は追加の税を払う、もしくは投獄される事になる。

投獄などは余程悪質と判断されなければ、滅多にあることでは無いのだが。

但し、冒険者にも基本追加税無しに持ち込み及び売却が認められている物がある。

魔獣の素材である。

優秀な冒険者がその都市周辺で魔獣を狩ってくれるならば、近隣の被害も抑えられ領主が兵を出す必要も減るためだ。

私兵を討伐に差し向けるより、冒険者ギルドに依頼を出す方が安く済む。

ならば冒険者から素材を買い取って行商するのだろうか、と考えるだろうが、その様な事はまず起こらない。

冒険者にとっては商人に売ってもギルドに売っても値段に大差は無いからである。

商人としては利益を出す為に出来るだけ安く買いたい。

ならば、と冒険者は少しでもランクアップの評価に繋がるようにギルドで売却するのである。

ランクの高い冒険者の中には、都市の素材を扱う商店で直接買い取って貰う者も居るが。

どちらにせよ行商人にとっては、魔獣素材の売買は旨みが無いので手を出す者は居ないのである。

「身分証などがありましたらお出し下さい」

兵士に連れられて向かった場所はハーベルと違い、城壁内、外開きの城門より内側に設けられた小窓だった。

宗太は以前受けた審査との違いに、不思議そうに眺めていた。

実はハーベルの城門にも同じ物があり、普段はそこで審査されるのだが、宗太の怪しさから詰め所での審査になったのだった。

が、そこは宗太の知るところではなかったりする。

キョロキョロと周囲を見回す宗太を不審に思ったのか、衛兵達の顔付きが僅かに厳しいモノとなる。

「ソータ、初めての街が珍しいのは分かるが、あまりキョロキョロとするでない」

不穏な空気の変化を過敏に察知したルシフェラに窘められ、宗太は慌てて姿勢を正す。

そのやり取りを見て、衛兵達の間の張り詰めた空気が僅かに弛む。

新米冒険者が初めての審査で緊張の余り挙動不審になるのは別に珍しい事では無いのだ。

一応仕事であるから警戒はするが、衛兵達もそんな冒険者は何度も見てきたのである。

「ギルドカードで良いかの」

そんな宗太の態度に苦笑しながら、ルシフェラが窓口の衛兵にギルドカードを提示する。

次いで、リースリットとアンジェリーナもギルドカードを差し出す。

「ルシフェラ・レストールさん、リースリット・ノエルさん、アンジェリーナ・メナードさん、全員ランクDでハーベル登録の冒険者で間違い無いですね？」

「うむ」

窓口の衛兵の問いをルシフェラが肯定する。

「……それで、あなたは？」

書類に何やら書き込んだ後、衛兵が宗太の方を見る。

先程の挙動不審な様子から、若干探るような視線を宗太に向けている。

「あ、はい」

宗太は身分証を出していない事に気付き、慌ててギルドカードを提示する。

「ハハッ、慌てなくても良いですよ。ソータ・アカツキさん、ハーベル登録……、ランクB!？」

苦笑しながらギルドカードを受け取った衛兵は、内容を確認すると共に思わず絶句する。

それを聞いて他の衛兵達も驚く。

挙動から新米冒険者と思えばまさかのBランク。

熟練者とも言える実を持っているというのだから、この反応も当然だろう。

不正な書き換えや偽造カードということも疑ったが、その様な形跡もなくカード自体も本物のようだ。

衛兵達の様子に何か拙いことでもあったかと内心焦る宗太だったが、咄嗟のことに何と説明すれば良いのか分からずつい黙ってしまふ。

「ソータは今まで人里離れた森の中で武術の師匠と二人暮らししていたらしくてのう。冒険者としてはまだまだ初心者じゃが、ロングホーンボア程度なら一人でも容易く狩れる程の実力者じゃ。そのランクはそれがギルドに評価された結果じゃよ」

と、訝しんだ衛兵が再び口を開こうとした頃、見かねたルシフェラが助け舟を出してくれた。

「ロングホーンボアを？ まあ、そういう事でしたら……。次は魔力属性の検査をさせていただきます。皆さん、順番にこちらの水晶に手を翳^{かざ}して下さい」

ルシフェラの言葉もいまいち信じてはいない様にみえるが、とりあえず仕事を進める事にしたようだ。

カウンター脇から識別球を取り出すと、宗太達の魔力属性を調べるために促す。

「三属性が三人に、二属性が一人……ですか。今まで色々な冒険者を見てきましたが、属性持ちの人なんて初めて見ましたよ」

どうやら識別阻害は上手くいったようで、宗太はホッと胸をなで下ろす。

尤も、三属性持ちが三人も固まっているというのも異常な光景なのだが、衛兵達はその事に気付いてはいないようだった。

因みに、リースリットは識別阻害の魔術により、火と風の二属性のみ反応するようにしていたようだ。

これも主を立てるといことなのだろうか。
あるじ

「あたしとソータさんは、ルシフェラさんとリースさんに魔術を教わりながら旅をしているんですよ」

「才ある者を育てるのも存外楽しいモノでう。魔術師ギルドの偏屈共には任せておれぬわ」

衛兵は偏屈共という部分で思わず吹き出してしまつ。

ともあれ、魔術も使えるならＣランク魔獣の単独討伐も可能なのだらうと、宗太の実力と立ち居振る舞いの差異については一応の納得はしてくれたようである。

正拳一撃で倒したなどと言われれば信じなかったであろうが。

いい具合に勘違いをしてくれたようだ。

「それでは通行税、お一人につき銀貨一枚になります」

「じゃあ、四人分で」

「確かに。では良き滞在になりますよう」

通行税は宗太が代表して払い、衛兵に礼を言くと、馬車に乗り込み街へと進めるのだった。

第18話 ルーベック到着と入城審査と（後書き）

外で煙草吸いながら執筆していたら、足首から先で11カ所蚊に刺されました。

指先とか刺すのは止めて欲しいです。

まあ、それは置いていて。

何の予告も無く、5ヶ月にも及ぶ休載をしてしまい済みませんでした。

ここに深くお詫び申し上げます。

続きが思っように書けず、つい読み専という逃げに走ってしまいました。

これから投稿は不定期になるかも知れませんが、今後はここまで間を空けないように執筆していきたいと思います。

それではまた次回の投稿で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4542q/>

魔王襲来！！

2011年8月14日02時47分発行